



玉田玉秀齋口演
山田唯夫速記
忠魂義膽
後の島村清

097510-000-9

特9-145

後の島村清 (忠魂義膽)

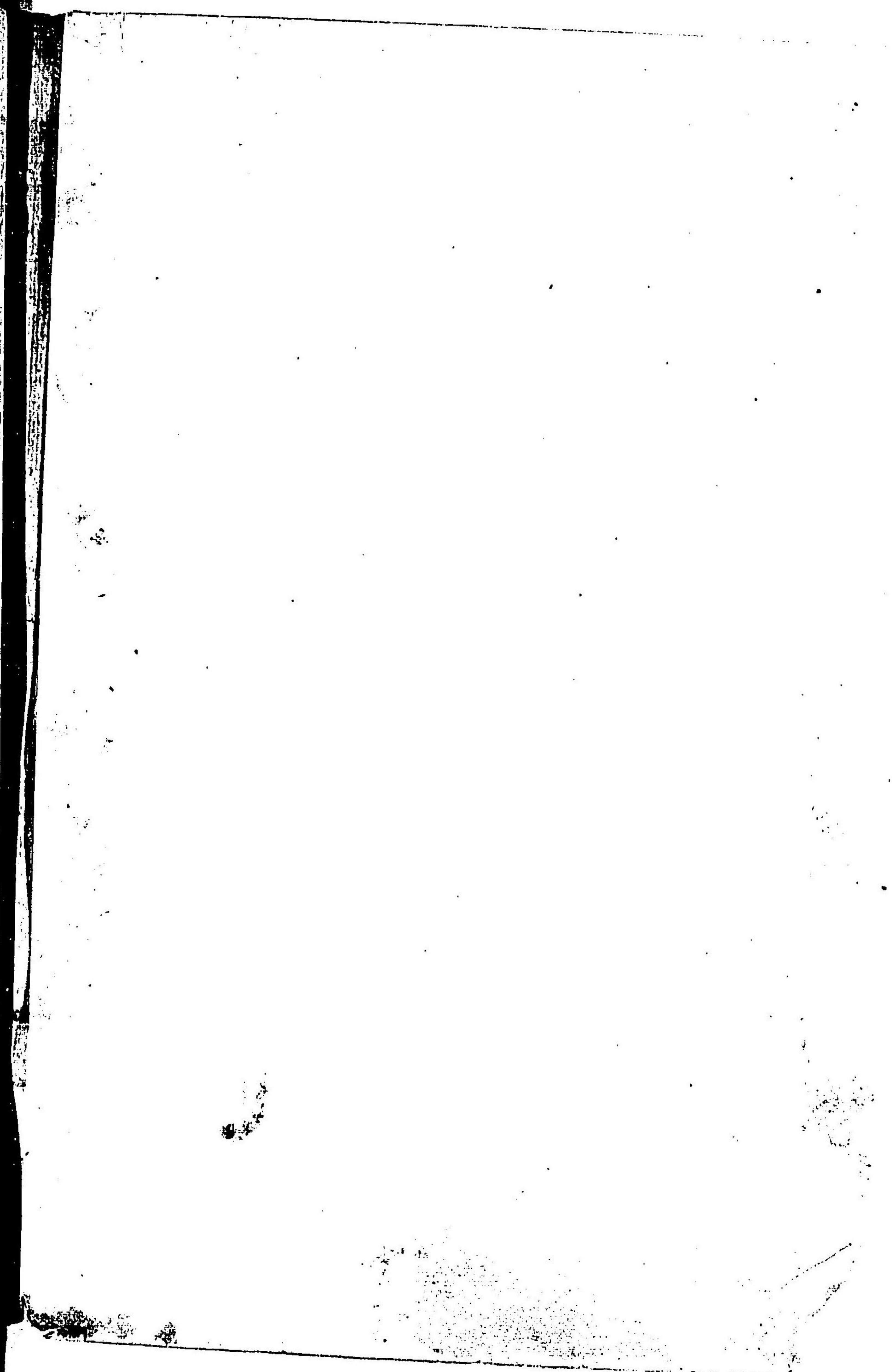
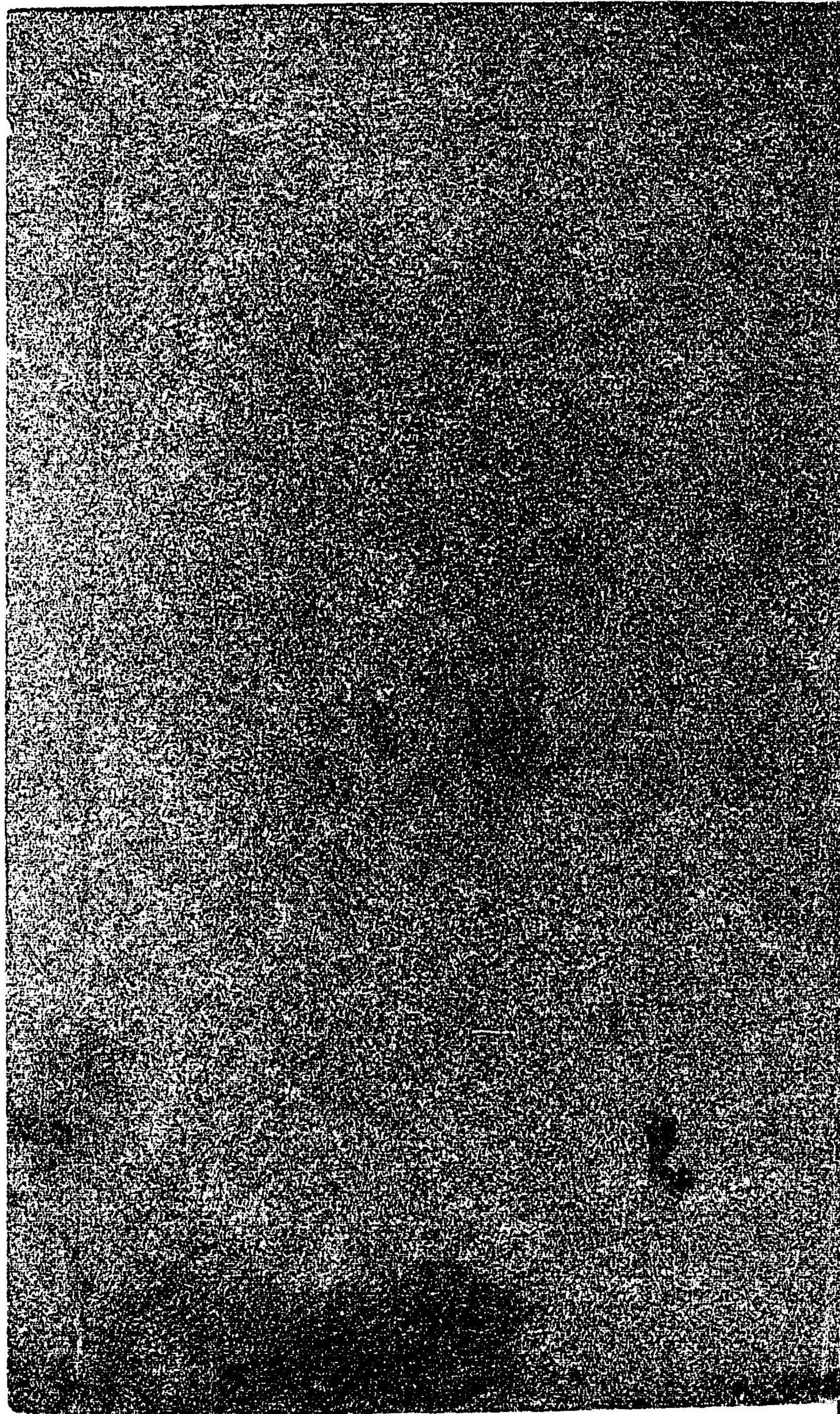
玉田 玉秀齋 / 講演

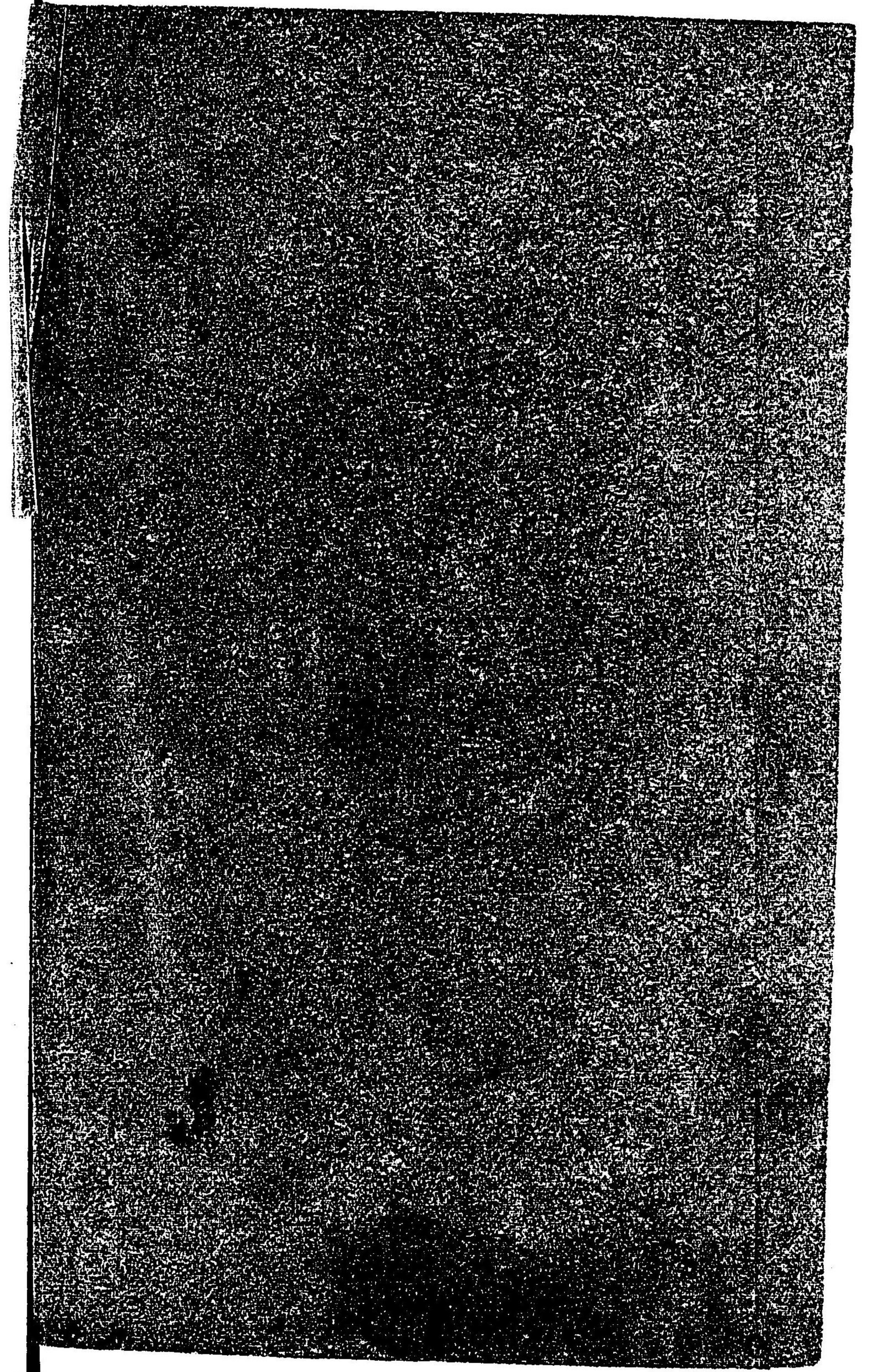
M44

DBS-1421



265
614







山口



後 島 村 清

忠魂 義膽 後 島 村 清

第 一 回

山 田 唯 夫 速 記
玉 田 玉 秀 齋 講 演

44. 2. 9
丙 亥

先般御好みに應じまして、忠魂義膽島村清と題しまして、本畫
の主人公たる島村清、饑いて莫逆の友杉金之助の兩人が、明治
二十七八年戰役より、無事凱旋したる上、島村清は故大隊長
松山大佐の令嬢綾子と結婚の式を挙げ、綾子の兄にして、此松
山家相續人たる松山弘行が、英國より歸朝する迄の間、四谷坂
町の松山家の邸内に同居する事と成る、又一方杉金之助に於
ては、島村清夫婦の媒介に依りて、西郷侯爵家の家扶、玉井松

後 島 村 清

三郎の令嬢春枝と結婚の約束を致したるが故に、至急にかを
軒借り受けんと、島村清夫婦とも相談をして、日々所々方々と
格好の家を探して居る、家が在り次第に杉金之助は、玉井春枝
と結婚の式を舉行すると言ふ考へ、處が讀者諸君も能く御承知
の通り、明治二十八年七月、彼の歐州の強國たる露西亞、獨逸
佛蘭西の三大國が聯合して、東洋平和の爲めと稱し、吾が忠勇
義烈なる將士が、碧血を流し、屍を荒野に晒して漸く得たる遠
東半島を、空しく清國に還付するの止むを得ざるに至らしめた
續いて辱け無くも、今上天皇陛下は遠東半島還付の詔勅を下し
置かれました、勿論吾が忠勇なる大日本五千餘萬の同胞も、此
大詔を拜しては唯々恐れ入るの外無く、嗚呼怒髮天を突くの
憤怒の情を僅に其詔勅を眺して、是れを押へたが、現す
風沐雨の辛勝を甜め、上官部下、戦友共の、命を鴻毛の輕さ
に比して、漸く勝を得たが爲めに、清國特命全權公使李鴻章が

後 島 村 清

能く吾國に來り、日本帝國の代表として、時の内閣總理大臣
伊藤博文侯、外務大臣陸奥宗光伯等の談判に依つて得たる遠東
半島を、空しく陽に美名を借り來つて、陰に吾れを威嚇し、遠
に遼東半島を還付する事に成つたのでございませうから、直接戦
地に臨んだ軍人諸君の心情は、誠に吾々が考へても無かしの思
ひ遣られるのでございませう、紅葉色付く其年十月中旬の夕間暮
れ、身には陸軍中尉の制服、制帽、佩劍をガチャ付かせ、片手
に巻煙草、片手に折詰をブラ提げ乍ら、眞赤な顔をして踏々眼
々と、四谷坂町松山忠行の宅へ参つた一人の士官、是れなん陸
軍歩兵中尉、杉金之助でございませう、表戸をガラ／＼と引開
き乍ら、玄關へと蒐つて來た金之助、島村は居るかア、僕
だ、杉だ、御出迎ひ申さなにか、養生君は居らぬか、下女君
は在りませぬか、ウイーン、柏車の付いた長靴を以つてドン／＼
と庭を掃かして居る、此聲に驚いた養生の岩村、岩村「イヤア是

後 島 村 清

れは御出で成さいますし、何うぞ御上り下さい金之ヤツ、是れは
書生君、何うだ相變らす致々として勉強して居るな、ウムッ感
心く君の目的は軍人か、將た外交官か、岩村ハイ、僕は最初軍
人に成る筈で、其勉強をして居たんですが、此年外交の事に憤
慨して、急に志を變へ、今では外交官志願です。今年外交の選
付は何うです、實に憤慨に堪へません、今吾國に歐米二州より
來り住む者は尠なくは在りませんが、其來り住む者、表向きは
吾が法律に服従するとは言ひ乍ら、内實吾が國の政治家を卑屈
者だ、腰抜けたと輕蔑し、日本本人に向つて亂暴狼藉到らざるは
無く、萬一此事に苦情を起す事有れば、彼等は忽ち本國政府に
申告して、數ヶ國全盟の虛喝手段と成り、宛然ら開國當時の有
様と少しも變つた事がございませぬよ金之然り、大に然り君
も又吾黨の者だ、却々語るに足る、君の言ふ通り、此頃の外
界は實に言語同斷だ、李白の詩では無いが、敢へて高聲に語ら

後 島 村 清

ず、恐らくは天下の人を驚かさんだ、去年は愉快な時に生れた
と思つたが、今年には又不愉快な時に生れたと思ふよ、實に去年
の今頃には引換へて、見る物聞く物皆斷腸の種ならざるは無し、
嗚呼止みなん哉、と宛然ら感慨に堪へざるもの如く、悄然
として玄關に突立つて居る、此時島村清、新婦綾子の兩人は、
先程から此杉金之助の聲を聞き付けて今に書生の案内で、座敷
の方へ這入つて來るだらうと待つて居るが、何時迄経つても、
書生と何か聲高に話しを致して居るから、這入つて來る氣色が
無い、遣コレ綾子、今來て居るのは杉中尉では無いか綾子ハイ
左様でございませぬ、妾しも今に這入つて御出でに成るだらうと
存じて、御待ち申して居ります、何うしたのでございませ
う、清何うだ、出迎つて遣らうア無いか、何だか大層酔拂つ
て、威勢が宜い様だつたが、俄に黙止り込んで仕舞つた様だ、
綾子ハイ、夫れでは妾しが御出迎ひ申しませう」と綾子は立つ

て玄關口へ来て見ると、杉金之助は巻煙草が早や灰計りに成つて居るのを后生大事に指先に挟み、汁の滴れる折詰を手にて提げた儘、腕組をして眉を揚げて、目を怒らして居る様子。此方には書生の岩村政雄、是れも机の上に拳を握り、綾子は何うしたのだ目的も無しに睨み付けて居ると言ふ有様。綾子は何うか直らうと思ひ乍ら綾子、オヤ杉さん、入らつしやいませ、何うか直ぐ御通り下さい」言はれて杉金之助はヒョイツと心注ぎ、見ると綾子が其れへ叮嚀に頭を下げて居る様子だから、杉ヤツ、是れは細君、態々の御出迎ひ、御苦勞に存するツ綾子、オホ、ウイトツ、時に島村は居りますか綾子、ハイ、座敷に御待ち受け申して居ります、金之助、然うですか、友在り遠方より来る、又樂しからずやですな、時に御令嬢……、イヤ新夫人、是れは僕御土産です、何うぞ御食り下さい」と折詰と間違へて、灰に成つ

た巻煙草の吹殻を突出した、綾子は驚き乍ら綾子、オヤ、其れは何うも有難う存じます、オホ、併し巻煙草の吹殻は何んなにして喰へたのが一番宜しございませう……、杉ヤア、是れは失敬、イヤ何うも……、甚だ失敬……、成程是りア巻煙草の吹殻でした、斯うツと……、イヤ是れ、御土産は此折詰だ、御土産、御土産ですよ細君、決して僕の喰ひ残しチア無い、新たに命じた松源の庵丁、一守美味いですよ、未だ入用は幾何でも取り寄せます、注文したまへ、アハ、ハ、綾子、オヤ、是れは何うも有難う存じます、サア御上り下さい、金之ウイトツ、ヤツ其れでは御免ツ」と斯く靴を脱いで、エンヤラヤアの三尺港で、ドッコイショ」と掛聲のみは大業だが、其割合に足は上らず、金之助、書生君、一寸手を借し玉へ……、ウム有難い、未だの外交官、確固り頼むよ」と熟し柿の如き酒氣粉々吐き乍ら、ヨロ」と踏眼めく足を運び、綾子に案内を致

後 島 村 清

が、世間へは發狂と傳へられて、其忠烈なる精神を知る人の跡
 ないのは、實に残念千萬だ、僕は大尉が一死を以つて建白し
 たと言ふ、其建白書を見たが、實に慷慨悲壯、是れを讀んで泣
 かざるを得んね、清ウム、君は其建白書を見たか、金之ウム、確
 に見た、那れ程の精神を國民一般に知らしめたらば、其れこそ
 國民の士氣を鼓舞し、十年で會稽の耻を雪げるものなら、五年
 で雪げると言ふ場合に成るのだ、何故世間へ隠して置くだらう
 ドン、國民に示して遣れば宜いと思ふな、清アハ、其
 んな物を出しては、穩か成らぬ事に成るからに、金丸大尉殿計
 りでは無い、李鴻章が來た時分、廣島でも憤死した少佐が有
 るうだナ、杉然うよ、那れも世間から忘れられて仕舞つたナ、
 戦場では、花々敷く討死をするのは容易だが、國家の爲め、
 吐いて、自殺すると言ふのは、餘程の忠烈な精神で無ければ出
 來る事では無い、殊に金丸大尉の如きは、朝鮮以來各地に轉戦

後 島 村 清

し、功名も深山に在つた人だ、其功名を双肩に荷つて、目出度
 く國へ歸つて來ればこそ、官位も進むだらうし、世人にも歡迎
 せられるだらうし、取分け妻子や親族も悦ぶだらう、即ち名譽
 と幸福とが、本國で待つて居るのに、其れを見捨て、一死以
 つて國家に報じたのは、實に千古の義士共、無雙の愛國者共言
 つて宜い、然るに其精神は世人に知られんと、空しく狂人視せ
 らるゝと言ふのは、實に遺憾千萬では無いか、斯くの如き義士
 を斯くの如くに待遇するのには、是れ國民の元氣を鼓舞する所
 に非ず、金丸大尉地下で知る有らば、今の有様を何と評するだ
 らう、僕は一念茲に至れば、思はず大尉の爲めに涙に漲ぐね、
 清ウム、實に君の説の通りだ、金丸大尉一人の心を通せん
 ら、兎に角、四千万人の心を通じ無いんだから、情け無いでは無い
 か、大尉の心が世人に通じ無いと同様に、四千万人の心は更に
 世間に通じ無いんだせ、此頃米國の或に新聞は日本人の事を、

聲の無い國民だと評したせ、何んな大事件が有らう共、國家の榮辱に關した事が有らう共、日本の新聞は常に沈黙して何事も言はぬ、新聞が何事も言はぬは、國民に意志の無いので有る、意志の無い國民は木石と何ぞ擇ばん、吾が米國の如き自立的の人間から見れば、日本の國情は餘程不思議で有るなんぞ、情を知らぬものだから、散々に悪口を書いて居る、併し今と成つては、何と言はれても仕方が無いが今に見ろ、蒼龍尙未だ雲上に昇らず、秘んで有り神州劍客の腰ッ、段鑑遠からず米國に在り、英領の際には英政府の逆政に苦しんだが、獨立戦争は何うだ、必ず僕が報する時が有るだらうと思ふ、併し其れは果して何日の日かなア、金之遺憾、實に憤慨に堪へ無い、其れに付いて僕は今日君に話しが有るのだ、清ウム、一體其れ何んた、金之新夫人、貴女も聞いて下さいよ、僕一人の心は四千萬に通せず、四千萬人の心は世界に通せずと言ふ有様では、前途の事

が實に案じられる、其れが爲めに中尉に登つたのも、金羽勳章を頂いたのも、少しも愉快な事は無いのだ、清オ、君も先日中尉に成つたそうだが、御芽出度う綾子杉さん、誠に御芽出度に存じます、金之イヤ其れが少しも面白く無い、僕は何うも秘かに考へて見ると、上官、部下、戦友の功を奪つた様な心持ちがして成らぬ、清馬鹿を言へ、君も随分威海術惣攻撃の際には、殊勳を現したデア無いが、金之殊勳と言ふ譯では無いが、兎に角軍人の本分を盡したと思ふのだが併し、吾々の心が世界に通じ無いのは仕方が無いが、此際せめて金丸大尉の心を世人に通じさせ度いものだ、大尉斗りで無い、國家の爲めに憤死した人の魂を慰めん爲めに、或一時を思ひ立つて居る、清フーム、然るか、併し其りア一体何んな事だ、金之ウム、實は外デア無い、國に盡すは何も軍人斗りデア無い、吾々が戦地に入つて后願の思ひ無きは、國民四千萬の後援が有つたからだらう、清ウム、然

り 金之其處で僕は少し考へる事が有つて、今度は軍人を辭職仕
 様と思ふのだ。濱エツ、君が軍人を辭する……ッ、其
 ア一体何うした事だ。傍に聞いて居る新夫人、島村綾子も驚き
 の眼を見張り乍ら綾子「オヤ杉さん、貴方本當に御辭職を成さる
 御考へですか。金之ア、然うですわねエ、島村、豫て君も知る通り
 僕は天性の訥辨で、思ふ事の十分の一も語れ無いら、或は其
 間に言葉の不完全、又意の達し無處か有るだらうと思ふが、
 大体の筋道に於いては、餘り間違ひは無からうと思つて居る、
 マア聞き給へ斯うだ、新夫人、貴女も聞いて下さいよ。濱エツ
 謹聴……、オイ綾子、茶を代へたが宜からう。綾子「オ、ホン
 ニ、話しに身が入つて、スツカリ忘れて居ました……ッ、サア杉
 ん、御茶を代へましたから、何うぞ御茶菓子召し喰つて下さ
 いまし。金之「ア何うも有難う、忠臣蔵の台詞「ア有りませんが
 酒は飲んででも飲まいでも、言つてる事は眞面目だから、島村君

聞いて呉れ給へ」と此處で杉金之助が如何なる事を語り出しま
 するか、讀者諸君と共に、次の一回を楽しみに致しませう。

第 二 回

杉金之助は汲み出された茶をグイツと飲み干し、金之「ア、美味い
 實に甘露、何うも有難う、時に島村君、僕が今度軍隊の方を
 辭職仕様と思ひ立つたのは、今度の遼東半島還付の詔勅が下つ
 たからで、吾々徹臣の者が、今更に成つて残念だとか何だとか
 言つては、却つて大元帥陛下に對して、誠に恐れ多い事だが併
 し、僕一個の考へを以つてすれば、残念なのは決して止んだの
 では無い、殊に遼東還付の事有りし當時より、陸軍軍人の故無
 くして自殺せし者、殆ど僕が聞いた丈けでも三十幾人、是れは
 決して發狂したのでは無い、事故も無いのでは決して無い、世

の中は其れを言ふ事が出来無いのだ、殊に建白書を殘して空しく
 金州城外の露と消へた金九大尉殿も、世間では發狂だが、
 原固が判ら無いとか言ふが、狂人が建白書として、誠に立派
 過ぎて一目見れば、誰れにでも判る事だ、併し目下の處では是
 れ其事故を言ふ能はざるので有る、聞く事が出来無いので有る
 のだ、無言無聲の中に黙契して、熱血變じて涙と成るのだ、
 併し翻つて考へて見ると、吾邦には世界無類の軍人には事欠が
 ぬが、其代り吾國に乏しいのは、外交家と資本家で、外交家が
 乏しければ、軍人の功蹟を満足に收める事が出来無い、軍人の
 功蹟を收める者が無ければ、百戰百勝の功も無い、併し其れ
 は戦争の事で、世界平和と成れば商工業の戦争だ、其商工業に
 就いて忽ち要するのには資本で有る、其資本家の無いのは誠に
 歎に堪へ無いと思ふが、島村君、君は何う思ふ、清ウーム、成
 程、其れは君の言ふ通り將に然うに違ひ無いよ、金之然うたらう

處で僕は考へた、斯様な事では到底も將來世界各列強國と肩を
 並べて、一等國の班に入る事は六ツケ敷い、と言つて僕が今か
 ら外交官に成ると言つた處で、年は早や二十六才にも成ると、
 時機既に過ぎ、言ふ可へして行はれざる事だ、仍つて外交官
 は思ひ止まつて、一大資本家と成つて見度いと思ふのだが、其
 れが爲めに乞ふ塊より始めて、僕が進んで赤手空拳、世界の
 活動界に飛び出さう、其れに就いては是非軍人を止の無ければ
 成ら無いと言ふ事に成るのだ、清ウーム、成る程、君の言ふ事
 は一理有る、併し憤慨するのには吾々軍人斗りでは無い、吾が忠
 烈なる四千萬同胞は、確かに慨歎して居るのだが、只々大元帥
 陛下の大詔を畏みて、口へ出さ無いと言ふ丈りなのだ、然れ共
 屈する者は必ず伸ぶ、辱を忍ぶ者は遂に榮と成る無からんや、
 榮辱屈伸、唯數年の後を待つてトせんのみだ、故に君も今陸軍
 中尉の榮職を擲つて、絶いて始めより事を成すには及ば無いだ

らうと思ふ、殊に君は目下僕等が及ばず乍ら媒介人と成つて、既に婚約も済んで居るのだから……、ねエ綾子、お前は何う思ふ」と言はれて綾子も口を開き綾子ハイ、妾し共は一向に其んな六ツケ敷い事は判りませんが、取て私し共に居る書生の岩村も、軍人志願を止めて外交官に成ると云つて、其勉強をして居る位ひでございますから、他にも澤山外交家、或は資本家を志して居る者も有りませう、外交とか資本とかは其れ等の者に任して置いて、貴方は杉さん、折角日清戦争に御出で成すつて、御勤功も澤山に御有ん成さるし、殊に承りますれば隊中でも、第一に物事が御出来成さると云ふ御評さも聞いて居ります、其れが今更軍人を御止め成さると云ふ御評さも聞いて居ります、其さいませんか、濱ねエ杉君も宜へ考へて見たら何うだね、何も今急に歐米諸強國と競争を仕無ければ成ら無いと云ふ評でも有るまい、僕は實に君の親友として注告をする、何うか思ひ止

まつて呉れ、僕が頼みだ、僕の軍隊に君有るを以つて實は少々自負して居るのだ、惜しい者だ、何うか思ひ止まつて呉れよ、綾子「杉さん、モウ一度御考へ直しをする」と云ふ事は出来ませんかと、両方から、眞實籠めた兩人の言葉に、陸軍中尉杉金之助は金之「ウーム」と暫く溜息を續いで居たが、聴ての事に金之「島村ッ」と清の顔を見上げた目には、一杯の涙を溜めて居る、金之「ウーム島村、不肖の杉金之助を惜しんで、否憐れんで其れ程迄に云つて呉れる君に對しては、實に一言も無い、更に一句も無い、多謝ッ、清ウーム、其れでは思ひ直して呉れるか、金之「今一度能く考へて見様、實は今日でも辭表を出さうと思つたのだが、併し親友の君に黙止つて行つては濟ま無いと思つたから君に云つた後で事を決行仕様と思つたのだ、濱ウーム、其りア能く来て呉れた……、オイ綾子、飯はまだか綾子ハイ、アノ今仕度をして居りますの、清牛肉でも買つて、早く酒を出せ、杉、

久し振りで一杯遣らうぢア無いか金之ウム御馳走に成らう……
 ア、奥様、今に僕が家を構へたら、ウンと御馳走をしますから
 暫くの間借りて置きますよ綾子「オホ、何うぞ御願ひ申
 します、吃度毎日御邪魔に上りますよ金之宜敷い、焼芋位ひな
 ら一日何貫目でも決して後へ引く事は無いですよ、アハ、
 、清然うだ、焼芋の御馳走なら、此奥様は幾何でも御喰
 りに成りますから、何うか確かに私しから願つて置きます綾子
 アラッ、貴方迄が甚いわ、其んな事を云つて在らつしやると、
 今日牛肉に御酒は取消しに致しますよ、宜うございますか
 清是れは驚いた金之イヤ降参く、決して申上げは致しません
 何うか御手柔かに御願ひ申します」云つて居る處へ仲働きのお
 千代は、焔爐に火を入れて牛肉の鋤焼と云ふ仕度をして其處へ
 持ち出して来た千代「是れは杉の旦那様、入らつしやいませ金之
 イヨウ懸れはお千代閣下、今日は大分塗つて居るな千代「知りま

せんよ、貴方様が入らつしやると、何時も御馳り遊ばすので、
 養生の岩村さん杯ば、貴方が御歸りに成ると、貴方の御口眞似
 杯を成すつて、冷かされる事がございませよ金之ハテナ、僕が
 何時か君を騙つた事が有るのか知ら……フーム、然うかなア、
 千代「御惚り遊ばしては不可ません、先日入らつしやつた時は、
 下女「獅子鼻に白牡丹なんぞ被仰つたぢアございませんか、
 金之「イヤ違ひなし、確に言つた、美人を形容するに、芙蓉花
 の雨に惱める風情と言ふのは有るから、僕は白牡丹を以つて君
 を評したのサ、アハ、千代「其れが不可ませんよ金之「ア、
 宜い、併し君は却々正直者だと云つて、島村も大變感心して
 居る、又僕が見ても正直者は直ぐ判る千代「ハイ有難うございま
 す金之「ウム、括み喰ひが正直に外へ現れて、其デク、肥つて
 居る事は何うだ、心が正直など、身体迄が正直に成るから不
 議だ、アハ、千代「オヤッ、又御悪口でございませるか、恐

れ入ります、是れでも未だ嫁入前までございますから、僕の付かない間に台所へ引取りませう、オホ、。と下女のお千代は台所へ引取つて行く、後に三人は笑ひ乍し清サア杉、ウンは一つ飲んで喰つて呉れ、何か外に御馳走も有るそうだが、君は牛肉が好きだから、御馳走を差置して牛肉を買つた譯だ、喰や皿迄、牛喰や鍋迄だ、ウンと喰つて呉れ、マア一つ飲め、金之、ウム、頂戴仕様、綾子、サア御酌を致しませう、金之、是れは何うも恐れ入つた、奥様の御酌とは……、オイ島村、僕は何時迄も兵管内の冷へ切つた寢床の中に寝て居るが、君なんぞは幸福な者よ、美人を妻として一家圓滿に納まつて、僕は君の家に来ると、春風に吹かれて居る様な心持ちがするのよ、清馬鹿にするな、君も今に然う成るぢアないか、然し何處かに家はなにか、金之、ウム、今も話した様な譯だから、家も何も探して見やア仕ないよ、清其りア不可ない、早く格好の家を見出して、家庭を

作れば宜いぢアないか、僕も心掛けては居るんだが金之、ウム、其れも何う成るか判らないよ、僕には不破の關屋の蔭庇しが、僕の性質に合つて居るのかも知れない、清マアサ、ウンと飲んで例の得意の琵琶歌でも聞かうぢアないか、金之、ウム、今日は是非一つやつて見様、奥様、満々と一つ酌いで下さい、綾子、ハイ、何うぞ御召飲り遊ばせ」と差しつ押へつ酒を飲んで居りました、が金之、ウイーツ、大分酔つて来たぞ、サア琵琶歌をやる、清、ム、やつて呉れ、金之「始まりッ」と香吐朗々と唱ひ出す、薩摩琵琶歌の一節、金之、夫れ達人は大観す、振山蓋世の勇有るも、榮枯は夢か幻か、大隅山の狩獵に、真如の月の影暗く、無念無想を觀すらん……、オイ島村、金丸大尉も今地下に有つて、無念無想を觀じて居るだらうが、僕は夫れを思ふと残念で堪らない、清、止せ、くッ、何時迄其んな事を云つて居る、其れよりは今度は僕が詩吟をやらう、金之、ウム、一つ活潑なやつを聞かして呉れ

清ヨシツ 吟し出す頼山陽先生の筑摩河
 越公虎の如く峽公蛇の如し。汝盤さんと欲せば吾己に眠ふ、八
 千騎は夜暗を衝く、曉夢晴れて大旗を擧ぐ、兩軍搏ては山裂け
 んと欲す、快劍陣を斬りて腥風を生ず、虎吼ハ蛇逸し河雪を憤
 く、傍に毒蛇有り其蹶を待つと、彼の越の上杉謙信、甲斐の武
 田信玄が、筑摩川に於いて、大快戦の有様を述べ、其後邊には
 毒蛇の如き織田信長、其他の戦國時代の英雄が、秘に其隙を窺つ
 て居ると云ふ、群雄割居時代の有様を、虎や大蛇に譬へて詠じ
 た詩でございます、島村清は是れを吟じ終れば杉金之助金之ウ
 ム成程、傍らに毒蛇有り其蹶を待った、其毒蛇を討つは果し
 て何れの日か、島村、早く毒蛇を討ち度いものだな、清ウム
 早く討ち度いものだ、と兩人は話しを致し乍ら、暫く差しつ押
 へつ牛肉で酒を飲んで居りましたが、藤金之助は暇を告げて兵營内へ歸つ
 も廻つて来たと云ふので、

て行く、清は相變らず松山家より、日々第一師團司令部へ通つ
 夕暮れ、島村清は何日も似合す日が入つて、七時頃に四谷坂
 町なる松山家へ歸つて来た、綾子は足音を聞いて玄關へ出迎へ
 に行く、清オ、綾子、昨日か今日かの内に、杉は此處へ来や
 ア仕なかつたか綾子、エ、杉さんは御出でぢアございません
 先日貴方と座敷で御酒を召し飲つたなりで、妾しは未だ御目に
 掛りませんの、清ウム、然うか綾子アノ杉さんが何うか遊ば
 しましたか、清ウム大變な事が出来たのだ、綾子エッ……、併し
 マア貴方此方へ御上り遊ばせ、清ウム……」と靴を脱いで上へ
 昇つて参り、座敷へ遣入つて座つたなりで、清ウム、フテナ
 何處へ行つたのか、と獨言を言つて居りますから綾子は綾子ア
 ノ杉さんが何う遊して……、清ウム、綾子、杉は昨日辭表を出
 して、未だ免官の辭令も下らない内に、何處へ行つたか行方が

知れないのだ綾子「エッッ 清其れで吾々の方でも所々へ人を遣
つて探さして見たが、薩張り判らない、所が何でも同じ部家に
居る者に聞くと、故郷の方から結婚に付いて金が入るからと云
つて、二三日前に手紙を遣つた處が、昨日何でも五六百圓の金
を送つて来た様子だ、其金を持つた儘行方が判らないとして見
ると、矢張り外國へでも行つたと思はれるのだ綾子「エッッ、然
うでございませうか、那れ程御止め申しましたのに……」清イヤ
杉の心として仕方がない、併し何處へ行つたのだらう」と話
しを致して居る處へ書生の岩村、岩村「エ、只今御手紙が参りまし
た」と手紙を其處へ持つて来たから島村清は「清ウム然うか」
と手に取つて表裏を返して見ると、差出人は横濱停車場にて杉
生として有る「清ヤッ、綾子、杉からの手紙だ綾子「エッッ然うで
すか、何處から……」清ウム横濱停車場として有るが、ア、中
を讀んで見様」と封を切つて讀み下して見ると、鉛筆の走り書

まで、

不肖杉金之助帝都を立つて去るは、敢へて他意有るに非
す兄の好意を無にしたるは返すくも遺憾なれど、原因
は既に御承知の筈なれば敢へて此處に陳辨せず、但し落
着く先きは山か川か、爾は將來の問題に屬すと雖も、聊
か、以つて金之助が平生の愚を試みんと欲す、萬一業成
らば、更に君に報せむ、萬一業ならずんば竟に死せむ、
敵は本能寺に在り、牡丹餅は棚に在り、茲に猛然として
人生風浪の冒險者と成るのみ、終りに臨んで多年の好誼
を謝し、併して皆様の幸通を祈る、幸に自重在れよ、

於横濱停車場

杉金之助

十月廿三日

同島村清君
綾子夫人

再伸、珠て婚約の玉井氏令嬢は、何共申様無きも、宜
敷く破談と成したまへ、奈何と成れば僕は未だ生か死
か、未來の問題に屬するが故なり、失敬多謝

第 三 回

鳥見、勿々陸軍備中尉杉金之助は、親友島村清の許に一書を
して、吾大日本國を去つてから早や五年の星霜を経た事
公使館を襲ひ、吾日本公使館にては、惜しむ可し檜原一
官が、暴徒の爲めに憐れ異郷に送られた、其れが爲めに各
中獨逸、佛蘭西、英吉利、亞米利加にては、軍艦を繰出す
軍艦を遣するやら、各國居留民、及公使館、軍艦を繰出す
京城内へ陸戦隊を組んで押し寄せ、殊に吾日本帝國は隣國
に、北

在り、始めより檜原書記官が暴徒の爲めに斃れた密接の關係が
有るので、其先きに軍隊を渡清致させ、軍艦を派遣して
吾居留民、其他各國居留地、公使館、領事、馬杯を警護致させ、
各國軍隊の先鋒と成つて殊功を現し、聖眼救髮の歐米各國兵を
して、大に驚かしたのでございます、此時島村清は陸軍大尉に
進み、妻綾子との中一郎と言ふ男の子を設けて、矢張り四谷
坂町の松山家に同居を致して居る、今日は十月の二十三日、庭
に色付く楓葉を眺め乍ら、島村清は一子一郎を抱き上げ、清
坊や、貴様は大さく成つたら何に成るのだ、アハハハハ、
アハハハハ、綾子、是れでも成長すりや軍人に成るだらう
か、綾子、オホ、ハハ、其リア貴方、馬鹿の子も三年すりア三ツに
成ると言ひますからねエ、御母さん、大丈夫です、ねエ、静子、大
夫ですとも、今に軍人に成つて、清さんを下に使ふかも知れ成
いよ、清ヤア其リア何うも恐れ入つた、子供に使はれる様に成

つチア、此處面も形無しです。からなア、時に御母さん、英國に
 行つて居らつしやる兄様は、近々の内に御歸りに成るさうです
 ね。静、ハイ、手紙は前月の末に來て、此年中には歸ると言つて
 寄越したのだが、まだ充分には判ら無いのよ。清、ハ、ア、然
 ですか。静子、併し清さん、貴方は今度の北京攻撃には行か無いの
 でせうね。清、ハ、ア、豫て軍隊では皆々行き度く思つて居たので
 すが、何れでも五師團と六師團かと波清して、何うやら行く事
 出來無い様子で、皆も非常に残念がつて居ますよ。綾子、ホ、ウ、
 然うでせうね。清、然し御母さん、一度御相談を仕儀と思つて居
 したのです。が先日上官から私しに對して、語學研究の爲め、歐
 州の各國へ派遣を命せられたのです、其れで實は未だ公然辭令
 が下つたと云ふ評チア無いですが、豫ての望みでは有るし、其
 上官には能く頼んで置きました。が、萬一今日にでも其辭令が出
 れば、日を定めて洋行仕成りければ成ら無いのですから、甚だ濟

みませんが、何うか、在中は宜敷く御願ひ申します、其内に兄
 様も御歸りに成るとは思ひますが……静子、オヤ、然う、其れは御
 目出度い事だ、私費でも行き度い人が有るのに、特に貴方が
 多くの人から選抜されて、洋行すると言ふのは、何よりの事で
 す、殊に貴方の出世を成る事ですから、不在中は決して心配無
 く行つて御出で成さい、其うして居る内に弘行も英國から歸つ
 て來て、嫁でも貰つて身体が固まつたら、何も不自由は無いの
 だから、確固り勉強して來て御呉れ、清、ハイ、有難う存じます、
 オイ、綾子、お前も今聞く通りだから、何分留守中を頼むよ。綾子、
 ハイ、承知致しました、其れで凡そ期限が有るでせうなア。清、ウ
 ら、マア三年位ひだらうと思ふが、殊に仍ると四年に成るかも
 知れ無いと思ふ綾子、ア、左様でございませうか、不在中は決して
 御心配の無い様に致して居ります。清、ウ、何分頼む、誰れか
 宜い人が有つたら、留守の事を頼んで置き度いと思つたが、今

差當り別には是れと言つて心易い人も無いが、併し、書生の岩村
 も今では大分温和敷く成つたから、是れ等にも留守を能く頼ん
 で置く事に仕様……、斯んな時に那の杉が居て呉れよば、大分
 力に成る男だが、那奴ッは今に行方が判ら無い、何うして居る
 のだらうな……オ、其れで思ひ出したが、那の玉井の春枝さ
 んは此節手紙でも寄越すかね綾子、ハイ、那の杉さんと許婚の春
 枝さんですか、清ウム然うよ綾子、ハイ、那の人も杉さんが何で
 も米國へ行つたと言ふ評さを聞いて、御父様に願つて無理に米
 國へ行らつしやつた後、昨年の春でした、無事に居ると言ふ
 手紙を寄越したなりで、今に何の便りも無いのよ、清ウム然う
 か、スルと未だ杉にも遣は無いと見へるな、遣つたら何か言つ
 て寄越しそうなものだ、綾子然うです、ねエ、米國と一口に言つて
 も、却々廣い處です、一すには判ります、何でも春枝
 さんは、米國へ行つて杉さんの事業を助けるんだとか云つて、

行らつしやつたそうですが、杉さんも春枝さんも、早く御歸り
 に成ると宜いにねエ、ねエ御母さん、静子然うねエ、杉さんも面
 白い御方だが、今頃は何處に居られる事だらう、貴方の處へも
 何の便りが無いと言ふのは、可訝しいねエ、何か變つた事が有
 つたのでは無からうか、清然うですか、ナアに、那れは却々磊
 落落な風に見へますが、何うして腹の淺い奴ッでは無いのですから
 大丈夫ですよ、何れ何とか心に感じた事を断行するのでせうよ
 成功すれば何處からか知らせが有りませう、静子然うでせかねエ
 言つて居る處へ下女のお千代は千代、アノ御隠居様、旦那様、御
 飯の御支度が出来ましたが、直ぐ御飯を出しませうか、静子、ア、
 然うかい、其れでは清さん、一緒に喰べませうか、綾子、ハイ、喰り
 ませう、オイ綾子、お前も一郎を連れて一諸に御飯をやつたら
 宜からう、綾子、ハイ、然う致しませう、と家内打揃つて樂しき晩
 餐の膳に向ひ、終つて其夜は其儘寝て仕舞つた、何翌朝島村清

は、例の如く綾子、一郎、書生の岩村、下女のお千代、杯に、玄關迄送られて、第一師團司令部へ出勤致しました。其日は、前日に清は松山家へ歸つて来た、出迎へた妻の綾子に向うて、清は御座敷に居られるか綾子、ハイ御歸り遊ばせ、アノ御母さんは、お前にも少し話しが有るから、一諸に來て呉れ綾子、ハイ清、オ、一郎、何が嬉しい、何時も莞爾く笑つて居るな、サア俺れが抱いて遣らう、來いよ綾子、イエ貴方、不可ませんよ、先日も貴方が餘り背が御高いものですから、上の敷居で坊の頭を打つた、アございませんか、清、ア、それ、頭が固まるんだ綾子、オホ、、、、勝手な事計りを被仰つて居るね、も一つ甚く打つたら頭が裂けて血が出ますよ、清、ア、血が出たつて日本男子だ、のウー、泣きア仕舞いだらう、オ、泣くな、と子

供を無細工に抱き上げ乍ら、離れ座敷へ綾子を連れて出て来た。島村清、清御母さん、唯今歸りました、静子、オウ清さん、今日は大層早いなだね、清、ア、御母さん、愈々海外派遣の辭令が今日下りましたよ、静子、ナヤ然うかい、其して何時此地をば立つのだね、清、ア、來月の一日に此東京を出發する事に成りました。其れで種々準備も有るものですから、四五日の休暇を貰つて歸つて来たので、静子、オヤ然うかい、其れはマア大變な事だね。其れでは那の御金が入るのなら、銀行から出して來て、早く買ひ整へて置くが宜いよ、清、ア有難うございませぬ、併し其んなに澤山な物が入りませぬ、御下賜金も充分に頂けるんですから、其れで大丈夫です、其れで綾子、呉々も言つて置くが、一郎の事を頼んで置く、留守中は萬事御母さんと御相談の上で、事を計なねば不可無、留守中は萬事御母さんと御相談の上で、大きいです、性根は誠に初兒です、綾子も身体は斯んなに

一郎も宜く御願ひ申して置きます。静子「アア、然んな事は決して心配仕無いが宜いよ。清其れでは私しは、少し買ひ整へ度い物も有り、今日の内に二三軒暇乞ひをして来ますから、御免を蒙ります」と島村清は、家中の者とも相談をして、其日の内よりに、其れく洋行の準備を整へて居る。其内に一日二日と経つて、愈其年十一月一日と成つた。午後七時三十分新橋發の急行列車は、最早發車に五分間計り、幾個とも無く連結された列車の中は、人の身体に埋められて、恰も人形箱の様でございませぬ。フロツク扮裝の紳士、五ツ紋附の令夫人、華美な裾模様召した令嬢、背廣服にダブ高襟の青年、粹を凝した藝者、制服、若しくは小倉袴を穿いた學生、海老茶袴にリボンの女學生、印紳に腹掛の職人、赤毛布に風呂敷を肩にした田舎者、孫の手を引いた老人、其他有りと有らゆる世の中の階級を代表した男女が集つて居る。檢札口ではまた乗客の切符に缺を加へて驛夫何

うか御早くくと急き立てゝ居る。彼方一等列車の前に寄集つた一群は、是れが島村清の洋行を見送らるゝ人々でございませぬ。黒い背廣服に山高帽、肥へた紳士は是れが陸軍大臣海軍大將西郷從道侯でございませぬ。其他綾子の母、静子の後邊には耻しそ、うに子の一師を抱いた綾子、其他同隊の少佐、大尉中尉の連中、彼れ是れ二十人斗り、其内島村清は陸軍大尉の制帽、制服を着し、其れく挨拶を致して居る。今しも清は西郷侯の前に佇立て、舉手の禮を施した上、清閣下、此度は不肖清、選ばれて海外派遣の命を受け、此上の喜びはございませぬ、尙宜敷く御願ひ申し上げます、職に今日は態々御見送り下されて、誠に有難う存じます、西郷侯は美髯を捻り乍ら從道オ、島村、今度は確固り勉強して歸つて呉れ、待つて居るが、清ハイ有難う存じます。從道シテ是の婦人はお前の細君か、清ハア然うです、是れが私しの母で……從道ハ、ア、スルと此方が松山大佐の未亡

人だナ……ア、松山さん、島村も急に出発する様に成つて、
 后が淋しいでせうが、留守中は新夫人を相手にして、何うぞ待
 つて居て下さい……ヤア細君、島村は私の子も同様だから、
 歸るのを待つて下さい」云はれて二人は小腰を尾めて、町噺
 に禮を致し、兩人「ハイ有難う御禮を申し上げます從道サア島村、
 時間だらう、早く乗るが宜い清ハツ、其れで誰方も御免下
 さい」とツカ／＼と列車の中へ乗り込んだ、清は豫て定め
 腰掛へ腰を下し乍ら、窓外に顔を突き出して、同隊の大尉と二
 車の扉をバタツ／＼と閉じて行く、締りを終つた、驛長は見送
 りの人人に注意を致し乍ら、隻手を舉げて驛長「ビ、ビ、ッ」
 と合圖の呼子を鳴らすと同時に、ビーツツ／＼と一聲の汽笛を名
 残り、黒煙を残して徐かにゴトツ／＼とフツ／＼と大喝に、
 行を始めた、見送りの將校連中は、帽を取つて大喝に、萬歳！

ッ、萬歳！と見送つて居たが、次第に列車は速力を増して
 早やぐも東京新橋驛を離れて行く、綾子は一郎を抱いて書生の
 岩村と共に、母の静子を扶けて、プラットホームを出で、待た
 して於いた人力車に乗り、西郷侯其他見送りの人々に挨拶をし
 て歸つて行く、斯くして島村清は、汽笛一聲新橋を、早や吾が
 汽車は離れたり、妻岩の山に入り残ると鐵道唱歌に在る通り、
 昔し東海道第一の險と唱へられたる箱根八里も夢の間に過ぎて
 翌日江州米原の驛にて汽車を乗換へ、北陸線に乗つて午後六時
 頃、越前敦賀港へ着車を致しました、敦賀より乗船して浦汐
 斯德に渡り、西刺利亞鐵道にて露西亞の帝都、セントヒータ
 スバーク、其れより獨逸、佛蘭西、伊太利、英吉利と、諸國の
 言葉の研究するのでございます、島村清は取敢へず敦賀の停車
 場へ降りると、富貴館と朋友の者の添書を持つて居りますから、汽船便
 賀の新通り、富貴館と言ふ宿屋に泊り込み、浦汐通ひの汽船便

を聞いて見ると、丁度其翌々日、露西亞の商船で、エラスンツク號と言ふ噸數三千三百噸と言ふ船が出ると言ふ事でございます。午前十時の出帆と言ふので、早くより起き出でた島村清、朝飯を済まして仕度を整へ、宿の手代に送り込めて、税關の調べも事無く済み、税關波止場より小蒸氣船に乗り込んで、本船階段の下に着した手代「サア旦那、是れがエラスンツク號でございます。御荷物杯は西刺利亞鐵道連絡の引換証を取つて、此方の舷門から船へ積み込みます故、何うか御乗り下さい。清ア、然うか」と島村清はエラスンツク號へ乗込み、一等室へ案内をされて煙草を飲んで居る處へ、宿屋の若い者は引換証を持つて来た手代「エ、旦那、是れが引換證です。清ア、何うも御苦勞だつた、是れは少ないが君に進げる手何うも有難う存じます、其れでは御機嫌宜敷う。清ア、御苦勞……」其内に小蒸氣は宿屋の若い

第 四 回

者に乗せて、段々本船を遠ざかる、其内に荷物の手配も済み、税關の届けも終つたから、ブローツブローツと唸るが如き汽笛を擧げ、錨を巻き上げて、愈々エラスミツク號は、敦賀の港を抜錨致しました、サア是れより此エラスミツク號甲板に於いて、意外の奇遇より島村清日本海上深夜の一大活劇は、回を追ふて申上げる事に任ります……。

水や空、空や水なる日本海の大平原を、敦賀の港を後にして、針路を北に、と取り、白波を蹴上て進むは是なん露國商船エラスミツク號でございます、一等室には島村清、手荷物を其れ片附け終り、軍服を褌袍に着換へ、巻煙草を喫み乍ら、他の一等室に乘客でも有るのかと、上草履を穿いてブラ、客室

の外を通り乍ら覗いて見たが、清の外には一等船客は無い、一等室は若々カラ明きでございます。清フーム、此頃は段々露西亞の方も寒く成るから、旅行する者も少ないと見へる」と心の中心に思ひ乍ら、階段を下つて二等室、三等室の方へ行つて見ると、此處には下等労働者も見へて、支那人十五六名、日本人七八名、中に二三人の露西亞人杯も見へる、島村清は其れ等の者の顔をみると、労働者とは言ひ乍ら、氣の業か知らぬが、何れも一癖有りそうな奴斗り、心の中に島村清、清ハテナ、何れ見ても、露西亞人杯を對手にして居るが、労働者、殊に外國へでも行つて、露西亞人杯を對手にするには、容易な事では無からうから、自然顔か悪者の様に見へるんだらう」と何氣無く其んな事を考へつゝ、自分の部家、歸りて來ると、一人のボーイが「エ、旦那、晝飯は洋食に致しませうか、又御注文ならば和食も出來ます、何方に致しませう」と問ひ掛けられて島村清、清フーム別

に注文して迄日本食を喰は無いれば成ら無い事も無い、洋食で結構だ、ボイ左様でございますか、其れでは此處が貴方の食堂でございますから、何うぞ御喰ひ下さいまし」と丁度其客室の前の一、二寸した四五人の食堂が有る、成程一等船客の食堂と見へて却々立派にして有る、清ア、然うか」と島村清、食堂へ出て來て椅子へ腰を掛け、待ち受けて居ると、雖もボイが運んで來た洋食、島村清はボーイを對手に種々な話しを仕乍ら、暫くの間に晝飯も仕舞ひ、又もや自分の部家へ歸つて、靴の底から珠を勉強して居る書物杯を取出し、寢床へ横に成つて一生懸命に讀み始めた、其内に二時間と経ち三時間と過ぎて、何時しか秋の日の暮れ易く、早や五時の時計がチン／＼と鳴つた、又もやボーイの知らせに仍つて、夕飯も事無く喰ひ、食后暫く運動を成さんと、上甲板へ上つて來て見ると、青海原は風程かにして、

清村島の後

宛然ら強を敷き詰めたる如く、流石日本海の中央、丈け有つて、目二群れ、其他には、彼方、此方に、餌を尋ねて飛び廻る信天翁の一、西の空に没して、僅かに片雲に金色の光りを發して居る、日は既に染物の粉を解いた様な、藍の如き海面に映つて、其美しきは口にも筆にも盡されざる景色でございませぬ、島村清は四方の景色を眺め乍ら、彼方此方と歩行廻つて居る内、段々、日は暮れ、にはキラキラと星の光る斗り、耳に入るものは汽船の機械がド、くものも有りませぬ、此時島村清は何の目に入るものも、耳に聞、の鎖を指先に玩弄する居りましたが、何うした事か其鎖の輪、でも開いて居たものと見へて、小さな磁石計がカラツと甲、板の上、落ちた、ハツと思ひ乍ら島村清、其磁石計を手探りに

清村島の後

俯向ひた其途端、上草履の先きが其磁石に當つたか、又もやカラ、消は、音する方へ耳を付け、見やる彼方に船の舷の方に、荷物を、を、入、れる、大、き、な、穴、が、在、つ、て、其、板、の、隙、間、か、ら、コ、ロ、ツ、と、下、に、轉、が、り、落、ち、た、島、村、清、は、遺、ヤ、ア、ツ、到、頭、下、へ、落、し、て、了、つ、た、併、し、待、て、く、那、の、磁、石、計、は、西、郷、侯、より、俺、れ、が、日、清、戦、争、に、凱、旋、し、て、歸、つ、た、當、時、共、紀、念、と、し、て、下、さ、れ、た、物、だ、其、れ、を、失、つ、て、は、西、郷、侯、に、濟、ま、無、い、何、う、か、し、て、探、し、出、し、度、い、も、の、だ、と、何、思、つ、た、か、其、儘、自、分、の、部、家、に、下、つ、て、参、り、蠟、マ、ツ、チ、を、以、つ、て、再、び、元、の、處、へ、上、つ、て、來、た、其、處、で、其、蠟、マ、ツ、チ、を、磨、つ、て、下、を、見、る、と、船、艙、と、言、つ、て、甲、板、か、ら、荷、物、を、積、み、込、み、其、上、に、大、き、な、板、で、蓋、が、拵、ら、へ、て、有、る、島、村、清、は、其、蓋、へ、手、を、掛、け、て、ク、ム、ツ、と、上、へ、引、揚、げ、て、見、る、と、錠、も、卸、し、て、無、か、つ、た、か、何、の、苦、も、無、く、蓋、が、開、い、た、蠟、マ、ツ、チ、に、火、の、点、つ、た、儘、で、下、の、方、を、覗、い、て、見、る、と、山、の、様、に

清村島の後

積み重ねた其下に成つて居る荷物の上に、キラ／＼磁石計が光
 つて居る、島村清は荷物へ手を掛けて、豫て軍隊の中で機械体
 操を以つて覺へた方法に仍つて、バツと下へ飛び下りた、清は
 心覺への荷物の上を、手探りに探つて見ると、磁石は其儘に成
 つて居たから、其れを時計の鎖へ付けて、今しも荷物の上へ攀
 じ登り、上の方へ登つて甲板の板間へ手を掛けんとせし一刹那
 心の迷ひか空耳か、遙か船艙の荷物の間より「ウーム／＼」と
 唸る聲、續いて何とシク／＼ス、リ泣きの聲が聞へる、
 「ナツ」と島村清、耳を澄まして其泣きを聞出さんと致しまし
 たが、何うやら其泣聲、唸り聲は此船艙の中にするらしい様子
 無、清ハテ何だらう、此處は船艙で、決して人の來る可き處では
 り聲杯がする處を見ても有る譯が無い、何だらうナ……併し唸
 ら船員共が、例の海外醜業婦を、警察、税關の目を忍んで、露

清村島の後

西亞遊りへ密船させるのでは無からうか」と思ひ付いたから島
 村は、秘と荷物を傳つて眞暗闇の中を、聲を便りに手探り乍ら
 段々／＼と下の方へ降つて参り、船艙の底へ足を附けて、シツ
 と様子を探りて居ると、船艙の底には外國へ輸出する茶箱が、
 六七個ズラリと並べて有る、其他には蓆巻きにした荷物や、或
 は吠に入れた穀物斗りや、別に怪しい物は無い、清は其茶箱へ
 耳を付けて、中の様子を聞いて居ると、中にはゴトツ、ゴトツ
 と云ふ音がする、ウーム／＼と唸る聲が聞へる、ハツ
 と驚いた島村清、清ウムツ、扱てはツ」と聲を秘めて茶箱の蓋
 へ口を付けて、清オイッ、オイッ、貴様は一体何だツ、女かツ」
 と隙間から聲を掛けますと中なる者の聲として「ハイ、ハ
 イ、アノ姐様、誠に済みませんけれど、先程からの腹痛で、何
 うにも斯うにも辛抱が出来ませんから、何か薬が有りませうなら
 ば、少し頂かして下さいまし」と言ふ聲は確に女の聲で有つて

後 島 村 清

茶箱杯へ入れて居る處を見ると、何うしても醜業婦に違ひ無い
 清「ウムムッ」と思つた島村清。又もや箱の隙間へ口を寄せ
 清「オィ、女、僕は何と云ふ者に欺かれて、海外へ密航する
 お前は其姐さんとか何と云ふ者に欺かれて、海外へ密航する
 醜業婦だ、僕は島村清と云つて、陸軍大尉だ」聲を掛ける
 中なる女は、ワーツと計りに泣き出し、女「ア、左様でございま
 すか、何うぞ御助け下さいまし、清「ウム宜し、僕が助けて遣
 暫くの間ジツと辛抱して居れよ」と言ひ置いて、又もや蠟マツ
 チに火を点し、四邊を見ると、天の助けか傍らに、荷物をつみ
 直す鐵の棒で、二尺斗りの物が落ちて有る、是れ幸ひと島村清
 フツと蠟マツチを吹き消し、茶箱の隙に其鐵棒の平たく成つた
 處を突込んで、ウムムツと力を入れる、清「ア、女、此處から出ら
 して、難無く茶箱の蓋が一枚開いた、清「ア、女、此處から出ら
 れるだらう、女、ハイ有難うございます」と四邊一面の眞暗がり

後 島 村 清

で姿形は判りませんが、年若き一人の女が、暗限い乍ら茶箱の
 中から這ひ出で来た、清「ウム、其れでマア大丈夫だ、併し誘拐
 されたのはお前斗りか、女「イエ、妾しと共に七人斗り居ますが
 皆此茶箱に入られて居ります、清「エーッ、七人も居るのか、
 其りア何うも大變だ、併し一人でも残して置く事は出来無い、
 宜し序に助けて遣らう」と手探り乍ら茶箱の傍に立寄り、一つ
 鐵の棒を突込んで、成程一つの茶箱に一人宛
 の女が、半死半生と言ふ工合に成つて、ゾロ／＼匍ひ出して來
 る、島村清は今更の如くに驚き乍ら、清「全体お前等は何うして
 斯んな事に成つたのだ」と聞きます、中なる一人の女「女ハ
 イ、妾しは長崎縣の生れでございませうが、朝鮮へ行けば澤山の
 金儲けが有ると言ふ事を聞き、豫て一度行つて見度いと思つて
 居る矢先、此十日斗り前に、仁川の宿屋の亭主だと言つて、
 仲居を雇ひに來た者が有ります、其人は長崎の唐人町、木村屋

と言ふ宿屋へ泊り込んで居ると言ふので、妾しは兩親に無断で家を飛び出し、其木村屋へ行つて仲居に使つて貰はんと、其仁川の宿屋の亭主に逢つて見ますと、却々親切に言つて呉れるものですから、二三日其宿屋の物置小家に隠れて居る内、悉船が行くには、是非共旅行免状とか入用のだが、其れを持つて居るかと言ふ御訊ね、妾しも兩親に無断で出て来る位ひでございませ故、其んな物を持つて居そうな筈が有りませぬ 清ウム、女其處で妾しは其人に持つて居無いと言ふ事を申しませぬ、此箱の中は苦しからうが、荷物として朝鮮へ送るから、一日二日ても宜いと言ひますので、妾しも行き度いのが腹一杯で、ウソと承知をして、此茶箱の中へ這入つて居りますと、上から釘付けにした儘、長崎港から荷船に積み込まれ、此本船へ積み換へ

られ、何日経つても出しては呉れず、其内毎日一人の洋装した女の人が、小さな握り飯を三宛持つて来て、此箱の穴から放り込んで呉れる外、日の光りも縁に見る事が出来ません、汚ない話してございませぬが、兩便は仕流し、病氣に成つても薬一服飲まして呉れませぬ、始めて欺かれたと氣が注いた時は早晩の祭り、半死半生の儘晝やら夜やら判ら無いで、今日迄斯うして居りましたのでございませぬ何うぞ御慈悲を以つて御助け成されて下さいまし」と涙乍らに物語る、外の女も其れに續き、皆々今迄の様子を云つて居りますが、大抵大同小異の成行き、一伍一什の様子を聞いた島村清、遣ウム、憎くみても尙餘り有る醜業婦誘拐の奴等……、ウム宜し、確にお前等は僕が助けて遣る、確固りして居れッ 萱ハイ、何うぞ宜敷う御願ひ申します、清其れでは貴様等は暫く此處に待つて居れ、僕が上へ昇つて、此船の船長に談判を成し、必ず助けて遣る」と女を下

に待たして置いて、又もや清は荷物を攀じて、段々と上へ昇つて参り、今しも甲板の板間に手を掛けて、バツと上へ頭を出して飛び上らうと成したる刹那、甲板の上には水夫の外套を頭から冠つた一人の男、闇の中よりバラ／＼と躍り出で、一個の金槌様の物を片手に振り上げて、今しも甲板に登らうとした島村清の、脳天目覚めて物をも言はず、男「アッ」と斗りに打ち下した、清も常時は却々油断無い男ではございますが、船の中で宜い加減に身体を使つた其上に、荷物の中を攀じ登つた闇の中で、突如に脳天を打たれたのだから堪りませんが、遺失策つたッ」と思ふ間も無く、正氣を失つて甲板に掛けた手を放すと等しく、撥ッ斗りに一丈も有る船艙の底へ、氣を失つた儘陥り込んだ、此時彼方の黒暗の中より、バラ／＼と躍り出でたる五六人の人影、〇姐御、那の野郎は何うしました、大層な音がしたチア有りませんか」

彼の男は、バツと外套を脱ぎ捨て、男「ウム、今彼奴が頭を出した處を、此金槌で撲つた處が、其儘正氣を失なひ船艙の底へ落ち込んだ様子だ、早く燈火を持つて御出でよ」と言ふ聲は確かに優しき女の聲、其内に一人の男は、船の中で使ふ提燈に火を点じて、四邊を照した其光りで彼の水夫の外套を着て居た者を見る、コワ如何に、男には有らで、水色の洋装を着た一人の女、顔色は蒼白にして目は少し吊り上り、思ひ切り庇を突き出した高襟女で、鼻筋の通りた處、口元のメつた處は、何様一癖有りげの女でございます、女「サア金次、熊八造、お前は此下へ下りて行つて、早く今の野郎を縛つて仕敷へッオイ、李明さん、勸造さん、お前方は此綱を下へ下げて、今の野郎を甲板へ吊り上げ無エ、其れから外の者は船艙へ下りて行つて、女共を又茶箱の中へ入れて仕舞はねば不可無い、皆ウム合点だ」と四五人の日本人、支那人は、荷物縛つて下へ降りて行く、

支那アノ、お幾さん、姐さん、私し此網を下へ投て宜敷いか
 と一人の支那人は網を下へ投らうとするお幾「イヤ李明さん、然
 うチア無いのよ、チャンくなんてエ者は、何故斯んなに頓問
 だらうねエ、投るんチヤ無いよ、繩の端しを下へ吊り下げるん
 ですよ李明ア、然う有りますか、私し支那人有ります、充分日
 本言葉判ら無い、網を投つて仕舞ふ、ボコベン有りますな お幾
 ナヨツ、仕方無いチヤンコロだよ、何故お前は其んなに間故
 けだらう、ア、勘造さん、お前手傳つて引揚げて御呉れよ 勘造
 エ、ツ、宜うがす、コウく李明、貴様は俺れのする事を見て
 居ると宜いや、斯うするんだよ」とスルく「と網の端しを下へ
 操り下した、處へ彼方船の方より、ギユツく「と靴音をさ
 せて出て来た一人の西洋人、此有様を見て彼のお幾と言はれた
 女に向ひ西洋ア、一体是れ、何うした事ですか お幾ア、貴方
 今ね、斯うく云々の譯なのよ、其れで四五人の者を船倉へ入

れて、此網で引上げますから、貴方其處で見ているらつしやいよ
 西洋ウム然う有るか、私し折角金儲け樂しみにして居るのに、
 貴り損なふ、大變面白く無い、宜く貴方見付けました お幾オホ
 、、、、、斯んな時斗りは大變に御世辭が宜いのね、マア黙止
 つて在らつしやい」と云つて居る間に船倉の中では「オーイ
 姐御、サア大丈夫だから引揚げて下さい 女ア、宜いよ、サア
 李明さん、勘造さん、何うでも宜いから早く引揚げて下さい、
 二人「ウム合点だ。サア李明、手を添へろ李明マ、宜う有ります
 却々重たい、ウームく」と二人が力に任して引揚げたが、却々
 一丈斗りの下からでは、重たいと見へて上り懸い、其内に下か
 ら荷物を縛つて上つて来た悪者共も手を添へて、漸くの事に引
 揚げた姿を見ると、憐れむ可し島村清は、襦袢を着た儘正氣を
 失つて、後ろ手に確く縛られ、上から吊り下げた網を以つて、
 雁字鍋めに縛られて、宛然ら死人同様に成つて甲板へ横たわつ

後 島 村 清

た お幾、オ、八造、何うも御苦勞だつたね、何うしたい下の女は
 八造へエ、何時の間にか茶箱を潰して、七人乍ら外にして、ア
 ルく、隅の方には震へて居ましたから、元の通りに茶箱の中へ投
 り込んで、又釘付けにして置きましたお幾、ム然うかい、其り
 ア何うも御苦勞だつたね、其れから金太に、船は何う仕たい、
 八造へイ、今後から皆上つて来ます」と言つて居る間に、五六
 人の者は、アロく上へ上つて来るお幾、オ、皆の者、何うも御
 苦勞く、アア是れから此野郎を船の帆柱へ縛り付けて御呉れ
 妾しが一發御見舞ひ申した後は、此大海へ投り込んで、鐵や鉸
 の飼食にして遣るのよ、皆宜うがす」と五六人の荒男は、島
 村清の手取り足取り、船の帆柱の處へ運んで参り、帆柱の根方
 へ身動きも出来無位、ひに縛り付けたお幾、其れで、此儘短銃を
 御見舞ひ申すに引導を渡した上、海の色氣が無くつて面白く無
 生返して引導を渡した上、海の色氣が無くつて面白く無

後 島 村 清

金太、お前下へ行つて、桶へ水を一杯汲んで来て御呉れ、何ア
 に眞水チア無くても宜い、湖水で充分だよ金太、宜うがす」と金
 太と言へる一人の男は、聽てパケツへ水を一杯汲んで来たお幾、
 其れを其奴つの頭から打掛けて、背中を一つ打ん撲つて御覽よ
 金太へエ、頭から打掛けるんでけすかいお幾、然うよ金太、其り
 ア姐御、何ほ何だつて餘まり酷いチア有りませんか、何うせ今
 でも半死にで、正氣も何も無いんですから、此儘撃ち殺したつ
 て、此方は全じ水葬禮、其方が片附きが早いでせうお幾、何アに
 一度は言つて聞かして遣ら無きア、飛んだ芝居の文句チア無い
 が、死んで閻魔の前に行つた時、死んだ譯が判ら無いチア、地
 獄で巾が利が無いたらう、オホ、早く打掛けて御覽よ
 金太へエ、宜うがす」と金太と言へる悪漢は、パケツの水を島
 村清の頭から、ザーツと一杯浴せ掛け、握り固めた拳骨で金太
 此野郎ツ、確固りしろツ」とドシツと一つ打ちますると、水の

冷たさど、今の拳骨が急所に當つたと見へ、清は清ウツムツと斗りに思ひ吹き返したお巖、オイ野郎、何うだね、少しは氣が注いたかい」と言ふ聲に、島村清、ハツと氣が注いて見ると、身は少しの身動きも出来無い程に固く帆柱へ縛り付けられ、前には一人の西洋人と、一人の洋妻らしい洋装した女、其他には支那人、日本人取交て七八人、ツラリと竝んで居る其有様、清は無念ッと思ひ乍ら清ウツム、全体貴様等は、何者だ、僕を此帆柱へ縛り付けて何うする心算だお巖、何うするか斯うするか、今に其れは判つて来るが、不用ぬ事をしてお前さんが、此方の商買道具を助け出し、邪魔をするから斯う成るのだ、今もお前さんが氣を失つた儘、此世の眼をさせ様かとは思つたが、其れでは餘り可哀そうだから、妻しが親切に生氣に返らして進げたのよ、清ウツム、其れで何う仕儀と言ふのだお巖、お前さんは何も知ら無いで、此エラヌマツク號に乗込んだのだらうが、實此船は南

船と言ふのは表面的、賊は密輸入、醜業婦密統の専問船だよ、清エーッお巖、其れ共知らずに乗込んだのはお前さんの不幸せ天運と諒めて早く覺悟をするが宜いよ、冥途の土産に妾等の名前は横濱で、今チヤ洋妾お巖と言つて、少しア人に知られた者だが、遠く生れは越前鯖江、小さい時から男狂ひ、十五の年に馴れ染めた、田舎廻りの下手俳優、其奴つの甘い口車に乗せられて、國を飛び出した其後は、遂に國奴にも振り捨てられ、行方定ぬ旅鳥で、所々方々を飛び廻りて居る其内に、欺した男の數知れず、其内日本國中を股に掛け、遂に長門の下の關で、持つた男が手管者、準の三次と言つては、瀛車箱乗りの大頭、其れに教へられた其後は、恐嚇、詐欺や、拘摸竊盜、其れが高じて美人局、段々重ぬる悪事の數々、其内にも警察の目に止り、赤い仕衣も三度四度、モウ一所にも居られ無く成り、流氷來た

のが横濱港、今では此英國人の洋妾と成つて、密航婦が専業の
 様に成つて仕舞つたのさ、サアモウ是れ丈け聞かしてア充分たら
 うから、覺悟をせしよッ」と豫て用意の短銃を取り出し、お幾、オ
 イ熊、其燈火を此方へ向けて、狙いの定まる様にして御呉れよし
 と今しも彼の洋妾お幾は、彈丸の俱合を調べて居る其顔を、島
 村清は何氣無く見て驚いた。渣、ウーム然うか、残念千萬だがモ
 ウ斯う成つては仕方ない、貴様等の手の内の者だが、併し貴
 様は思ひ起せば六年前、俺れが未だ陸軍士官學校に在學當時
 日光見物の戻り途、涼車中で亂暴した西洋人を、取つて押へた
 事が有つたが、其時の洋妾ヂヤ無いか」言はれて此方の西洋人
 洋妾お幾も驚き乍らお幾、ウム、本當に其時の畜生ほうか、アノ
 貴方、ソレ私し共が流車の中で、赤恥をかゝされた那の時の野
 郎ですよ西洋、ウム、然う有りますか、其れでは私しも其敵討ら
 に、短銃を以つて撃つて遣らうお幾、ウム、其れでは貴方と二人

で撃ち殺して、其の跡は此の大海原の藻芥にして遣りませう
 西洋宜う有ります」と二人は同じく短銃を取り出し、カンテラ
 の燈火に狙ひを定め、お幾、サア野郎、今撃つろ、渣、ウム、日本男
 兒の島村清だ、決して卑怯な真似は仕舞い、何うしたつて許し
 は呉れまい、サア撃て、此胸を撃て、日本男兒の赤心
 は、血汐の色に仍つて發輝されるのだ、サア撃て、お幾、ウム宜
 いよ、サア貴方西洋ア、宜敷い」と二人は今しも狙いを定め、一
 一、間、斗りの間隔を置いて、引金に人差指を掛け、今しも轟然一
 發、兩個の彈丸は飛んで島村清の胸部へ命中せんとするの、一利
 那、海の彼方に暗を裂いて尖々と輝し出した、一道の探海燈、宛
 然、天の一方を破つて洩れ出す晃々たる日光の如く、今しも
 引金を引かんとする露國汽船エラスミツラの甲板は、バアッ白
 晝の如くに其探海燈に照らされた。

後 島 村 清

亞米利加カリフォルニア州の西の海岸、彼の有名なる黄金關の片
 傍に、吾が日本人が組織した、一代漁業會社が起つた、此漁業
 會社の社長は、五年以前から此亞米利加に來つた人でございま
 す、必す米國人が大日本帝國の財産に仕樣と言ふので、最初
 は、必す吾が大日本帝國の財産に仕樣と言ふので、最初は先づ
 其の海岸に、小さな家を借り受け、自分只一人で釣道具を拵ら
 へ、少し斗りの魚を取つては、毎日桑港の町で賣つて居りまし
 た、暫くの間に金を貯めたものと見へ、船を買ひ網を造り、
 他に身體の壯健な日本人五六名を雇ふて、盛んに漁業を致して
 居る内に、忽ち一年斗りの間に、澤山の漁業を成し、却々利益
 を納める様に成つた、處が讀者諸君も御承知の通り、米國人は

第 五 回

後 島 村 清

平日は大抵牛肉、或は羊、馬の内杯を喰つて居りますが、金曜
 日に限つては、特に魚の肉を喰ふ習慣に成つて居ります、其上
 に近頃では段々、其邊りに住む人が澤山に成つて、牛、羊
 厥の肉杯が大層高價になり、且り日本人、支那人杯が澤山移住
 するもので、魚類の賣れる事は非常なものでございませ
 然し米國でも、更に漁業をする人が無いのでは有りませ
 何分皆近頃始めた人斗りで、到底も日本人の様に、海の魚を取
 る上手な人が居ない、處へ以つて來て熟練な日本人が、得意の
 扶俵を以つて、澤山に居る魚を漁するのでございませ、其
 利益は大したもの、其内にも此二三年と言ふものは、次第に船
 を作り、網を増し、人を雇つて、今では漁船が三百餘人を使つ
 て居る事三千人、米國西海岸の漁業は殆ど此會社の物と成つて
 仕舞つた其内に、社長は、自分一人の物で無く、日本人一般
 の物だと言ふ處から、古く雇つた人々に其資本金を分配して遣

り、合資会社と言ふ事にしては居るが、元々社長の金斗りであ
 りますから、社中の権利は皆此社長が持つて居るのでございま
 す、處で此会社は、社員は皆日本人斗りで、一人も外國人を使
 はす、遠く吾日本國を離れて、天概萬里、互に相親んで其組合
 の固い事は、宛も數千人を一体と成せし如く、社長は父社員
 は子の如く、誠に仲好く暮して居ります、處が此社長は、斯く
 盛大な會社長として、澤山な財産を持つて居乍ら、尙ほ一生懸
 命に成つて事業を致して居りますから、米國人は素より事業家
 を尊ぶ處で、朋友と成らん、嫁を世話せんとする者も尠なくは
 ございませせんが、併し社長は其んな事には決して耳を傾けず、
 只會社の事業を致して居る斗り、然るに或日の事、豫て心易く
 するど一人の日本人が、此會社へ來りて、社長と何か頻りに話
 しを致して居る。○ア、杉さん、貴方は此米國へ來て、今迄日
 本人が未だ來さるる大事業を致されたので、吾々日本人の肩見

が廣く成つたので、最早此れ丈けの大事業をすれば、天晴
 れ吾が日本人の名譽を海外へ擧げたので、此上は早く相當な者
 を選んで結婚を成し、而て尙事業を擴張しられては如何でござ
 いませう」果せる哉、是れを明治二十八年に、三國全盟、遼東
 還付の事を憤慨して、島村清の許に一書を殘して吾日本國を去
 つたる、彼の陸軍豫備中尉、杉金之助でございませう、今しも親
 しき人より、斯く訊ねられて金之助は金之「アハ、ハ、ハ、東洋
 の日本男兒、未だ僕の思ふ百分の一にも成りませんで、何うし
 て恩愛の道に迷ふ事が出来ませう、先年或事の爲めに一旦定ま
 つた線さへ絶つて、僕の命さへ度外に置いた此身体です、未だ
 一度事有れば、何んな事に成るか判ら無いのです……イヤ未
 だ少し面白き事を追つて見度いと心掛けて居るのですよ、〇へ
 エ、其れでは此頃風の如く、愈々米國と英國と戦争を開く
 様に成つた晩は、何か大金儲の御見込みでも有りますか金之イ

ヤ見込みは兎に角として、何か面白い事が出来ませう、僕も先
 年日清戦争の當時、戦地へ行つて働いて見た丈けつ、其何れに
 も腕を振つた事が有りませんから、何か遣つて見ませう。○ハ
 ア然うですか、其れは御樂しみです。ねエと二人は四方山の
 話しを致して居る、其頃彼の朽艦十艘、常備兵一萬七千人さへ
 有らば、全米國三十八州を守らる事が出来ると、久しく誇つて居
 た米國人も、彼の北米加多海岸漁業事件の談判が破烈して、
 遂に英米二國の戦争が起つて來た、合衆國三十八州の兵士も、
 世界第一の強國と言はれた英國の兵には勝つ事が出来無い、米
 國の海軍は悉く米國の軍港内に追ひ詰められ、陸軍も又加多
 州を追ひ退けられて、米軍は連戦連敗、所謂手も足も出無い
 と言ふ有様でございます、何しろ英吉利國は、十九世紀の始め
 に於いて、米國を屬國として居た處が、彼の有名なる獨立戦争
 の爲めに、三十八州が連合して居た處が、彼の有名なる獨立戦争
 は

獨立したのですから、遺恨の有る戦争だ、其處で英國軍は數十
 萬の猛將、勇卒、三十萬人、加多に上陸して三手に別れ、一
 軍は東より、一軍は中部、他の一軍は英國大平洋海岸と連合し
 て西部の米國を攻撃した、其れが爲めに杉金之助が持つて居る
 漁業會社も、漁をする事が出来ません、仕方が無いから漁師三
 千人、社員百數十人は、空しくブラ／＼遊んで居ると云ふ有様
 是れを眺めた社長杉金之助は、或日三千何百人と言ふ雇人を、
 其會社の大庭に呼び寄せ、高台を作つて其上に登り、演説を致
 しました、金之諸君、皆さん、豫ねて御存じの通り、此度當米國
 と英國と戦争を起し、米國は毎度連戦連敗、其れは爲めに吾
 々の職業もする事が出来無い、處で吾々は今迄此米國の爲めに
 利益を受けて居るので有るから、吾々日本人の義侠心を現して
 大に米國の軍を助け様と思ひます、今此三千何百人の人数を以
 つて大義勇團を作り、決死の運動を仕様と思ひます、成るか成

らざるは今は判りませんが、併し日本人が義勇の名は、何萬年
 後と雖も消ゆる時は無い、此小さな身体を以つて、吾日本國の
 大名譽を買ふは誠に快事と言は無ければ成りません、賛成の人
 は手を舉げて下さい」と手を舉げ、足を鳴らして説き終ります
 ると、何しろ義に勇む吾大日本國の同胞は、ドツと斗りに鯨波
 の聲を舉げ、一度に兩手を舉げて賛成をした。○ウワツワツ、
 賛成くッ △遣る可しく、□面白、杉社長萬歳ッ」と宛
 ら天地に響く大賛成の聲と共に、愈々三千何百人の日本人が、
 米國の爲めに義勇團を作る事に成つたのでございませす、此方は
 暫く御預りと致して置きました、彼の島村清夫婦の媒介に仍り
 杉金の助と許嫁を致しました、玉井松三郎の令嬢、春枝の方
 を申上げる事に仕ります、却説玉井春枝に於きましたは、假令
 ひ許嫁斗りて、未だ結婚は仕無いと雖も、既に約束を致したる
 上は未來の良夫とす可き者は、杉金の助より外には無く、其良

夫が或事業を起す爲めに米國へ渡航を致したと言ふ事を聞いて
 其れでは女乍らも良夫の事業を救けんと、父松三郎に願つて米
 國に渡航を致し、所々方々と杉金の助の行邊を捜しました、
 何うしても所在が判ら無い、仕方が無いから玉井春枝は、紐育
 女子大學校に入學致しましたが、天性の伶俐なるが爲め、三ヶ
 年の間の勉強で、芽出度く其學校を卒業致し、今は豫て懇意に
 する紐育府在住の日本領事、木村菊十郎と言ふ、春枝の叔父に
 當る人の家に寄留をして、尙類りに勉強を致して居るのでござ
 います、今日しも玉井春枝に於きましては、紐育府領事館内な
 る、自分の部家に籠つて、其日の米國新聞を見て居りました、
 何か變つた新聞記事に目が付いたと見へて、忽ち屹度立上り、
 部家の扉を開けて、主人の妻秋子の部家に入り來り春枝與さん
 今日の新報に桑港在留の日本人が、義勇兵を起した事が出て居
 りますね秋子ハイ出て居ますよ、妾しも先程讀みました春枝然

うして其義勇兵の大將は、漁業會社の杉金之助と言ふ人ですつてね、秋子「ハイ、杉と言ふ人だそうです、春枝さん、貴女は其人を御存じなので、秋子「ハイ……、イ、エ……、アノ少し斗りのですか、春枝「ハイ、米國へ來てからは御目に掛りませんが、國に居た時、二三度顔を見た事が有るので、秋子「へエ、然うです、春枝「アノ奥様、日本人か此義舉をして呉れたのは、本國の譽れにも成つて、誠に悦ばしいと思ひますよ、日本人の男子仲間が、斯んな大きい義侠な事をして呉れたからには、妾し其の女達も、何か手柄に成る事を始め無ければ、成りますまい、秋子「然うね、併し始めると言ふた處で、女では何もする事が無いでせう、春枝「何と言つて、女で外の事は出来ませんから、赤十字社の看護婦にでも成りませう、秋子「オ、然うですね、併し妾共は良人の有る身体で、何うする事も出来ませんので、誠に残念で

すわ、春枝「赤十字社の看護婦には、上等社會の人も、好んで居る位ひで、日本の赤十字社でも澤山立派な人が這入つて居ます、秋子「然し、看護婦に成つたら戦地へ行か無ければ成らず、妾し送ちは何だか恐い様な氣がしてよ、春枝「其んな事は有りませんよ、今此米國に來て居る日本人も澤山に有ります故、一同揃つて看護婦と成り、日本人の手で一つの赤十字社病院を起して、日本の義侠心を外國へ見せるのです、一人助けても人の爲め、二人助けても國の爲め、其れが日本婦人の譽れにも成つて、世界中へ評判をされれば、妾しは彈丸に中つて死んでも介意ひませぬ、秋子「オ、氣味の悪い、妾しなんぢは、戦争の話しを聞くのさへ怖い位ひよ、貴方だつて折角今迄勉強成すつた御身体を、萬一御怪我でも成さると不可せんから、御止し成さいよ、春枝「だつて杉さんが此義舉を御始め成すつたのに……、秋子「誰れが始め

や……秋子「萬一や何です、オホ、……」
 致して居たる其日より、一月斗り経つたる或一日、紐育の新聞紙は大に日本男女の義侠心を賞めた記事を掲げて居ります、先日カリホルニア漁業會社の社長、杉金之助氏は、社員三千數百人を集めて義勇團を作り、吾が米國軍を助けたる事數知れず、今又此紐育に玉井春枝と言へる人は、一の赤十字病院を起して、到る處に傷病兵を救はんとする、吾が米國々々民は、深く厚く此日本人に禮を述べざる可からず、

此後の米國は連戦連勝、向ふ所敵無く、破竹の勢ひを以つて、みましたが、其内に杉金之助に於きましては、始の陸軍中佐資格で米國の軍隊付と成り、大佐、少將、中將と、段々々々を進められて、遂に米國加奈多に於いて、英軍三十萬、米四十萬、其れに付屬したる日本義勇團の三千何百人は、前後

第六回

日の大合戦に、米軍は遂に時の參謀長杉金之助の智略を以つて、悉く英兵を破り、遂に英國軍を國外に追ひ拂ひました處より、英國、米國の媾和談判と成り、遂に平和と成つたのでございませ、杉金之助は戦争終りて最も名譽有る米國の勳章を送られ、其名は世界に轟き渡る、此方日本赤十字社の、米國に於ける働きに仍つて、是又玉井春枝は勳章と報酬を受け、世界各國に、日本婦人の美名を唱はれる事に成る、サア御話しは跡へ展つて、彼の島村清が日本海上、露國漁船エラスミック號甲板の大活劇に移る事に致しませう……。

今しも日本海々々、夜は深く更け渡りて、聞ゆる物は慄々たる波の音と、エラスミック號機鏽の鳴る音斗り、島村清は哀れ

悪漢、毒婦の不注意を喰つて、正氣を失つた處を、高き小手に縛られたれ、船部の帆柱の根方に縛り付け、表面エラスミック船長として、實は英國人にして、日本婦女誘拐者たる一人の異人種と、毒婦洋妾お幾の二人が爲めに、今しも短銃を以つて、ドンと一發、胸板に照り出した一剎那、不意に後の方よりバックと燈の光に仍つて、規ひを定めて居たる二人の甲板上を、僅かに提燈の光に仍つて、今迄黒暗にたる悪漢悪婦、續いて下の七八名は、不意に探海燈を以つて、板上は宛然と白晝の如く照し出されたから、ハツと驚く二人の者は思はず短銃の火蓋を切るを忘れて仕舞ひ、ヒョイツと探海燈の方を眺めた全時に、ドンドン、ビリビリと眠れる如き静かさを破つて、撃ち出した一發の砲聲、天地に響いて物凄く森々とした、是れが此當時、北清事變の爲め、海上を警戒の傍ら、浦汐斯徳港より日本教賀港の間を往來せる、軍艦を

でございいます、今しも撃ち出した一發の大砲は、是れが瀛船に向つて、進行を止めいと言ふ合圖の大砲、是れを聞いた西洋人、洋妾お幾、其他の者は、ハツと斗りに打驚く、中にも洋妾お幾の如きは、お幾サア貴方、愚圖くして居れば、今の軍艦が追駈けて來るは必定、オイ、熊、八藏、ハ、早く小艇を御して、逃れる仕度をして御呉れよとバラバラと舷門に臨んで駈け出した、是れを聞いたる四五人の者は、皆オウ、然うだ逃げろ、貴方、早く逃げ無いと大變ですよと西洋人の腕を掴んでア、貴方、早く逃げ無いと大變ですよと西洋人の腕を掴んで引張りましたが、彼の西洋人は虚路く致、乍ら西洋貴女、其れで……セ、船体惜しい有りますお幾、何を言つて居らつしやるんですよ、其んな事を言つて居らつしやつては、命に係る大變ですよ、早く逃げろ、逃げられる丈け逃げませうと無理に西洋人の手を引張つて、舷門口の方へ、バラバラと駈

後 島 村 清

出して行く、斯る處へ後遊の方より、白波を蹴立て、進んで来た一隻の軍艦、引續いて探海燈を以つて、此のユラスミックの船休を照し乍ら、ゴウク、追駈けて来る、甲板の上に短銃の爲めに、既に覺悟をして居た處で、すから、甲板は白晝の如くに出た短銃の観念に閉じた眼をハツと開いて見ると、甲板は白晝の如くに出た短銃の照し出される乍ら、七八人の惡漢毒婦は、天の救けと大に喜び、身動つと其處へ立上らんと致しました、が身は結めの繩固く、身動さへも出来無い有様、清ヤツ残念だ、と身悶へして居る其内に、後遊の方より一隻の軍艦、速力早めて追駈け来る様子、此方惡漢、惡婦の連中は、今しも船門口の處に駈けつて参り、吊し上げたる素繩を、バツと切離すと等しく、小艇はガラ、ヒラ、ツと海面臨んで落ちて来た、身軽く船門口からヒラ

後 島 村 清

リ飛び移つたる洋妾お幾、續いて件の西洋人、惡漢五六人は、バラバラと皆々其れへ乗移り、今しも一番後の一人が擡を、持つた儘彼の小艇に乘移らんと成せし、其時遅く彼の時早し、深海燈を以つて見定めたる規ひは誤り、彼の軍艦より、又もやドンドン、ドンドン、ビリ、と空に響いて物凄く撃ち出した大砲は、彼の小艇の後部に命中したから、何堪りませう、バアツと一問斗り小艇は宙に飛び上るよと相見へたが、乗組んだ七八名の惡漢、毒婦は、海底深く落ち入つて、小艇の破片は宛然ら秋の木の葉の飛ぶ如く、パーワ、と四散して仕舞つた、此時船底に在つて其れ、作業を致して居る火夫、水夫の連中は、先刻よりの砲聲及び、今の大音響に胆を潰し、バラ、と、ツと楯段傳つて甲板へ来て見れば、船門口は小艇の破片と、何者の肉片か血か判ら無いが、甲板の上は真赤に染つて居る有様、〇「キヤツ」と一人が其處へ平倒つた様子に、外の連中

清村島の後

も何事やらんと駈けて行く。此方島村清に於きましては、彼の水夫、火夫共を呼び立てんと致して居る内、又もや梯段傳つてド、ド、ド、ドと、甲板へ躍り上つた十五六人の人影、何者やらんと眼を定めて見て有れば、各々一艇宛の鐵砲を擡へたる、是れ吾大日本國軍艦乗組の水兵でございませう、鐵い海軍大尉の制服着けたる一人の海軍士官、抜劍の儘、バツと甲板へ躍り上ると等しく、彼の海軍士官は士官ソレ其奴等を打ん縛つて仕舞へツ、其れから大村北井、三橋、其方等は機關室へ行つて、機械を止めるッ」と號令を下しますると三橋ハツ」と答へて三四人の水兵は、又もや梯段傳ひに下へ降りて行く、後に残つた十人斗りの水兵は、甲板に虚路へ一々縛り上げた、ミツク號の水夫、火夫を、瞬く間に其れへ一々縛り上げた、其内にエラスミツク號は、機械の響きがパタツと止むと等しく、進行力も無くなつた様子、此時此有様を眺めた島村清は、ヤレ

清村島の夜

嬉しやど、思ひ乍ら、彼の海軍士官に聲を掛けて、清ア、君ッ海軍の御方、僕は島村清と言つて、陸軍大尉だが、委細は後で御話しをするから、早く此繩を解いて呉れ給へッ」と聲を擧げると彼の海軍大尉は、ヒョイツと後邊を振り返つて、大尉エツ、君が陸軍大尉の島村清君か、清ウム、然うです、大尉ウム、然うか、仔細は後から聞かして、兎に角繩を解いて進げ様」とツカ、ツと駈けて来て、島村清の繩を解いた、其内に水兵はエラスミツク號の水夫、火夫を悉く縛り上げて、アロク、海軍大尉の前、引張つて参り、水夫大尉殿、此奴等は何うしませう、大尉ウム、暫く其儘にして置けエ、此處に居られるのは、陸軍大尉島村清と言ふ人だから、此人に仔細を聞けば充分判るだらう、時に島村君、僕は浪花艦乗組の海軍大尉、鈴木正義と言ふ者です、すが、全体此商船へ君が御乗組みに成つたのは、如何なる譯で、すが、と問ひ掛りられて島村清は、自分が海外派遣を命ぜられ

た一條より、教賀港に於いて此露國漁船と稱するエラスミック
 號に塔乗し、浦沙斯德港へ行かうと爲した處、斯様く云々の
 譯にて、此帆柱の根元に縛り付けられ、今や其船長及び、洋妾
 お幾人の爲めに、短銃を持つて狙撃なさんとするの刹那、
 浪花艦より照された探海燈及び進行停止の砲聲に、危き難を
 免れたる次第、及び悪漢、毒婦が逃げんとして、彼の小艇に乗
 込んだる其時しも、又もや浪花艦より撃ち出した大砲の爲めに
 小艇は碎けて乗込んだる悪漢毒婦は、行方知れずに相成つたる
 一條を、言葉短かに話しを致しますと、彼の海軍士官も、或
 は驚き或は怒り、シツと島村の言葉を聞いて居りましたが大尉
 ウーム、其れでは島村君何ですか、今御話しに成つた誘拐婦と
 言ふのは、此舷底に居るのですか、積ア、然うです、其れで未
 だ船客も七八名居た筈ですが、其んな譯で何れが船客やら、何
 れが誘拐専門の者やら、陸張り判ら無くなつたのですよ正義ハ

・ア然うですか、其れでは一つ捜して見ませう 渣僕も一つ船
 室へ行く序に、案内を致しませうと二人は打連れ立つて、三
 四人の水兵を引連れ、三等船客の客室へ来て見ると、七八名の
 男は、蒼く成つて船室の片隅に震へて居るから、清は事情を言
 ひ聞かせて、上甲板の方へ上げて仕舞ひ、案内知つたる船客の
 中へ来て見ると、茶箱に入られた婦人は、相變らず元の如く
 に針付けにして有るから、海軍大尉鈴木正義は、携へたる携帶
 電燈を照して、海軍水兵に指揮を教し、一つ箱の蓋をば明
 けて彼れ憐れなる婦人を救ひ出だし、是れも甲板上へ連れて來
 る、尙も二人は客室、船長室を捜して、積荷書類、其他重要
 る書物等を一纏めにして、甲板へ上つて参り、其れ等の物と照
 し合せ乍ら、彼のエラスミック號乗組みの水夫、火夫杯を取調
 べに及びましたる處、是れ等の者は別に悪意無く、皆長崎地方
 から知らずに雇はれて、此船へ乗込んだ事が判つた、其處で鈴

木海軍大尉は、是れ等の者の戒めを解き、尙此エラフミツク號の船籍を調べて見ると、何處の船やら墮張り判ら無い、併し機關の他飾付の物杯を調べて見ると、何うやら支那に有名なる彼の海賊船の古船を、修繕した様な處が有るから、委細の事を認め、後邊の方にジツと返事を待つて居る軍艦、浪花艦へ對し、一人の水兵に此書面を持たして遣る、スルと浪花艦よりは又もや一人の風采立派なる紳士を乗せて、小艇は飛ぶ如くにエラスミツク號へ戻つて來て、舷門口へ着くと彼の紳士は、水兵に先んじて甲板へ上つて參り、大尉鈴木正義に一禮を施した上、尙島村清の方に向つて叮嚀に禮を施し紳士ア、今此鈴木大尉殿の御書面に仍つて、貴方が島村清君だと旨ふ事を承つたのです、然うですか」と問ひ掛けられて島村も、全じく叮嚀に禮を返し、清「ハア然うです、陸軍大尉島村清と言ふのは僕です紳士ア、貴方が島村君か、豫て御書面を以つて度々御尋ね下

されたが、御面會をするのは今が始めて、僕は不來乍ら君の家内と致して居られる、綾子の兄、松山弘行です、清エツ、其れでは貴方が兄様ですか、弘行然うです、清さん、不在中は種々家内の者が厄介に成りました、清イヤ却つて私しこそ……、併し兄様、貴方の御顔を見て思ひ出すのは、亡く成られた故陸軍大佐、今では父松山忠行殿の事です、豫て御知らせは致して置きました、今では謹んで御悔みを申し上げます、弘行イヤ、父は軍人の本分を盡して亡く成つたのですから、敢へて歎く事は致しません、併し生前に面會する事の出来無かつたので残念です、清「ハッ、御察し申します」と二人は愁然として暫く言葉もございませなんだが、聽ての事に島村清、清併し兄様、貴方が今日御歸りに成ると言ふ事が判つたのでしたら、私しも一日や二日は、出發を延期しても宜かつたのですが、御知らせは無かつたので、すか、弘行「ウム、未だ僕ら四五日は猶豫が有ると思つて居た處、

後 島 村 清

御承知の北清事變の爲めか、僕が浦沙斯德へ着すると全時に、外務省より營口の領事を命せられ、折宜く其處へ浪花艦が浦沙斯德を出發すると言ふので、譯を言つて艦長に頼み、便乗したのですが、教賀へ着いたら電報で知らせる筈だったので、清ア、然うでしたか、僕は又此二十五日に、陸軍省より海外派遣の命を受け、此船に便乗する以前、手紙を以つて御知らせはしたのですが、其れでは其手紙は行き違ひに成つたのでせう、弘行ウム、多分然うでしたらう、處で清さん、今此鈴木大尉殿の書面に依ると、此エラスミック號と言ふのは、密航婦誘拐を醜業の様に依ると、居る船だそうですナ、清ハイ、然うに違ひ有りません、弘行ウム、處で清さんを始め、未だ七八名の船客が有るのだから、此儘此船を日本へ引いて歸ると言ふ譯にも行かす、依つて此エラスミック號は、鈴木大尉殿に願つて一先づ浦沙斯德へ廻航せしめ、誘拐された婦人は浪花艦へ引取つて、日本へ連れ

後 島 村 清

歸り、相當なる所置を取る事に、艦長共相談して來ましたから何うか左様御承知を願ひませう、清其れは何うも有難う存じます、弘行其れでは鈴木大尉、斯様な場合ですから、正當の指揮は出來ませんが、臨機の處置として、今御話しの通り願ひ度いですが、何うでせう、正義ハア宜敷い、併し此水兵、其他本船の水夫は此儘本船に御留め置きを願ひます、弘行ア、宜敷い、其れで此島村大尉を始め、船客を浦沙斯德へ上陸させた上、全港の領事に願つて、正當の手續を踏み、再び貴方の御乗組みに成つて、教賀港迄御廻航を願ひます、正義ハア承知致しました、弘行併し清さん、此船に乗組んで居たと言ふ偽艦長、及び其他の者は先程の小艇の轉覆で、助かつた者は無いでせうな、清ハア、私しも此處へ縛り付けられた儘、此方から見て居りましたが、其儘七名斗りの者は行方も不明と成つたのですから、多分助かつた者有りませう、弘行ハア、所謂天罰ですな……、其れでは清

さん、僕は浪花艦へ引取つて、日本へ歸る事に致します、貴方も何うか御機嫌宜く………清ハツ有難く存じます、不在中は宜敷く御願ひ申します、何れ二三年の内には歸ります、改めて御願ひ申します、正義ハイ、承知いたしました、松山弘行は、流石英再び小艇に乗つて、海の方々に殿然と碇泊の浪花艦差して歸つて行く、此方は鈴木大尉は、水兵、水夫、火夫共を其れく差圖をして、自分には船長の假代理として、豫て用意の吾大日本國の浪花艦より、別れの禮式として、ドーンと撃ち出す空砲一旗を帆柱の上に掲げ、出帆の準備等残る方無く整へた、此時彼發、此方エラスミック等に於きましては、是れに答へてアツと演笛を海に響かして、愈々機關を發動致させましたから、白波を蹴つて北へくと進航する、浪花艦は是れ又波濤を分け

第七回

て日本國へ歸つて行く、此時夜はホノノと明け放れて東の空に太陽は一尖光を現すや否、宛然ら吾日本國の前途を壽ほく如く、日本海上を照し出した、其勇ましき事は到底も言葉に盡され無い位ひでございませ、サア愈々此島村清が、浦沙斯徳に於きましての御話しより、引續いて欧州漫遊の一條に移るのでござ

斯くして此分捕漁船エラスミック號は、鈴木大尉を船長と成し其他の水兵、水夫、火夫杯を船員とし、島村清其他八名の船客を乗せて、日本海上に軍艦浪花艦と別れを告げ、北へくと針路を取り、遂に其翌日無事、露領浦沙斯徳港へ着船を致しました、其處で島村清其他の船客は、小艇に乗つて上陸致し、

鈴木大尉も同じく上陸して、其時の浦沙斯徳在留日本領事館へ
 有りし次第を言つて届けを致しました。其處で領事大井義雄は
 早速鈴木海軍大尉と同道して税關へ歩つて参り、島村清、其他
 船客を証人として他の書類と共に届出でを致しますと、税
 關に於いても異議無く荷物陸揚、船体は日本國へ引揚げの許を
 受けたから、荷物を税關へ預けて置いて、入港してから三日目
 に、船は又もや鈴木海軍大尉船長として、日本國の物と成り、
 其日の内に鈴木大尉は、島村清に別れを告げ、日本國へ歸つて
 来たのでございます、其處で島村清は、何も彼も全部落着いて
 仕舞つた事でございますから、浦沙斯徳港の日本旅館、致賀屋
 と云ふ宿屋に泊り込み、充分防寒の服杯を買ひ求めた上、歐州
 直通の西比利亞鐵道汽車便を、停車場で尋ねて見たる處、惜し
 いかな丁度島村清が、此浦沙斯徳へ着船の當日、直通の列車
 は出て仕舞つて無い、全休此西比利亞鐵道と云ふのは、道々各

所へ停車する汽車ならば、毎日有るのでございませぬが、直通列
 車に云つては、一週間に一度しか無い、方今は其んな事は有り
 ませぬが、開通當時の西比利亞鐵道は、賊に不便で有つて、俱
 合宜く行けば着船當日に乗込む事が出来るが、都合が悪いと一
 週間も浦沙斯徳の宿屋で、汽車便を待ち合して居無ければ成ら
 無い、島村清も丁度船便は宜い俱合に着いたのです、エラス
 ミツク號船体の爲めに、二三日は無駄に過ぎて仕舞つたが爲め
 途に其日出発の汽車に間に合はず、五六日は此處に空しく滞在
 する事に成つた、残念だとは思つたが仕方が無い、日々浦沙斯
 徳港の市中を、ブラ、見物致し乍ら、一日二日と送つて居る
 内、丁度十一月一日の夜、餘り退屈で仕方が無い處から、身輕
 き背廣服に護底の靴を穿ち、興業物でも見様と思ひ乍ら、太
 き洋杖を振り廻して、宿と定めたる致賀屋を立出で、ナラリ、
 と歩行いて居る、處が今此島村清が泊つて居る宿屋の近傍は、

細ひ、其上には防寒用の目斗り出した支那帽子、片手には夜目
 にも著き明晃々たる一挺の短銃。ワツ／＼と打倒れた島村清
 の傍に近寄つて参り、彼の短銃を差向け乍ら「オイ、島村清
 とか盲ふ馬鹿者奴ッ、何ほ貴様が威張つても、モウ斯う成つて
 は敵ふまい、へ、ン」片頬に笑を含み乍ら、足を以つて、バ
 ッと向ふへ蹴飛ばした、然るに島村清に於いては、一發の弾丸の
 爲めに正氣を失つたと見へて、パッタリ向ふの方へ轉がつて行
 く、彼の曲者は能く／＼島村清の生死を見定めて置いた上、
 ウム、是れでマア敵は討つたと言ふものだ、ドリヤお前の旅金
 は残らず貰つて行くよ」と短銃を衣兜に納めて、彼の島村清が
 着して居る洋服の衣兜に、グツと手を突込んだ一刹那、今迄打
 倒れて居た島村清は、右手を延して今しも衣兜に突込んだ彼の
 曲者の、利腕グツと迫取るよと相見へたが、清「エイッ」と一
 聲、乍ら彼の曲者を、ドツとばかりに二三間、彼方の方へ投げ出

した、不意を喰つた彼の曲者は「失策つたッ」こパツと起き
 上らうとする處へ、飛鳥の如く飛び込み來つた島村清、起しも
 立てず彼の曲者の、襟首グツと引押へ「清「コリヤ曲者、今聞い
 て居れば、此僕の名前を能く知つて居る様子だが、貴様は何者
 だッ、起きろ／＼ッ」と襟首掴んでグツと引き起したが、目斗り
 出して居るから、薩張り判ら無い、清「貴様は言葉と言ひ、又俺
 れの名前を知つて居る處を見ると、何か遺恨の在る奴つらしい
 が、サア白状しろ、何うだッ」と彼の曲者の衣兜に手を差入れ
 短銃を取出さうとする、彼の曲者も今は一生懸命、清の油断
 を見澄まして、パツと島村清を突き飛ばして、逃げ出さうとする、
 清「エイッ馬鹿奴ッ、斯う成つてバタ／＼騒いだつて何にも成
 ら無いのだろ、強いて騒ぎ廻る様だつたら爲めに宜く無いッ」
 と言ひ乍ら「清「エイッ」と一聲、彼の曲者の脇腹に菟けて當身
 を喰はした曲者「ウムッ」と其儘彼の曲者は、正氣を失つて

後 島 村 清

各國民の居留地に成つて居りました、其處の角を廻つて向ふへ行くと、支那人の居留地でもございまして、何しろ寒い國でござい
ますから、人通りも誠に少く、支那人町の方へ曲つて來ると、
一軒の軒に掲げ出した瓦斯燈斗りが、暗を照らして物凄く
空は氷りて星の光りはキラキラと致して居る清ア、寒む、斯
んな事なら外套を着て來れば宜かつた、シャツを二枚も重ねた
のだから大丈夫だらうと思つて出て來たが、是れでは何うも遣
り切れ無い、オ、寒む、風邪を引きそうだが、一層引返して外
套を着て來様」と獨り言を云ひ乍ら、ヒヨイと後邊を振り返つた
其途端、彼方薄暗き瓦斯燈の下に、チヨロクツと駆け込んだ
る一人の人影、其れが支那人町の軒下へ隠れた様子だか
ら、目利く是れを見付けた島村清、ハツと驚き乍ら踏止まり、
心の中に「清オヤツ、何だか怪しい、今俺が後邊を振り向
いたと同時に、那軒の下へ確かかに人が駆け込んだに違ひ無い、

後 島 村 清

併し支那人の内の者が、何處かへ使ひにでも行つて、歸つて來
たかと思へば何でも無い様なもの、何だか怪しい様な心持ち
がして成らん、何にもせよ此處に静として居る譯には行か無い
油断仕無い様に探つて見様」と思ひ乍ら、故意とバツリく
ソと靴音を致させ乍ら、手には洋杖を握りぬめて、油断無く彼
の瓦斯燈の下に來て見たが、別らに怪しい者も居世い、清ハ、ア
矢張り誰れか使ひにでも行つて、家の内へ這入つたのだ、斯
んな事なら何も心配する事は無かつたに、其表口をシロく打
眺の乍ら、一間斗り向ふの方へ行き過ぎたが、未だ何うやら心
に掛るものでございまして、シロリツと後邊の方を振り返つ
た其途端、ドツと斗りに撃ち出した一發の短銃、島村清は急所
に命中したと見へて、清「ウムツ」と一聲、握ツと其所へ打倒
れた、是れを眺めて此方の曲者は、濼々たる白煙の中より、
カ、ツと出て參つた姿を見ると、身には長やかなる支那服を

細ひ、其上には防寒用の目斗り出した支那帽子、片手には夜目
 にも著き明晃々たる一挺の短銃、ワツ／＼と打倒れた島村清
 の傍に近寄つて参り、彼の短銃を差向け乍ら「オイ、島村清
 とか言ふ馬鹿者奴ツ、何は貴様が威張つても、モウ斯う成つて
 は敵ふまい、へ、ン」片頬に笑を含み乍ら、足を以つて、パ
 ッと向ふへ蹴飛ばした、然るに島村清に於いては、一發の弾丸の
 爲めに正氣を失つたと見へて、バツタリ向ふの方へ轉がつて行
 く、彼の曲者は能く／＼島村清の生死を見定めて置いた上、
 ウム、是れでマア敵は討つたと言ふものだ、ドリヤお前の旅金
 は残らず貰つて行くよ」と短銃を衣兜に納めて、彼の島村清が
 着して居る洋服の衣兜に、グツと手を突込んだ一刹那、今迄打
 倒れて居た島村清は、右手を延して今しも衣兜に突込んだ彼の
 曲者の、利腕グツと追取るよと相見へたが、清エイツ」と一
 秒乍ら彼の曲者を、ドツとばかりに二三間、彼の方へ投げ出

した、不意を喰つた彼の曲者は「失策つたツ」とバツと起き
 上らうとする處へ、飛鳥の如く飛び込み來つた島村清、起しも
 立てず彼の曲者の、襟首グツと引押へ、清ユリヤ曲者、今聞い
 て居れば、此僕の名前を能く知つて居る様子だが、貴様は何者
 だツ、起きろ／＼と襟首掴んでグツと引き起したが、目斗り
 出して居るから、薩張り判ら無い、清貴様は言葉と言ひ、又俺
 れの名前を知つて居る處を見ると、何か遺恨の在る奴つらしい
 が、サア白状しろ、何うだツ」と彼の曲者の衣兜に手を差入れ
 短銃を取出さうとする、彼の曲者も今は一生懸命、清の油断
 を見澄まして、バツと島村清を突き飛ばして、逃げ出さうとする、
 清エイツ馬鹿奴ツ、斯う成つてバツ／＼騒いだつて何にも成
 ら無いのだろ、強いて騒ぎ廻る様だつたら爲めに宜く無いぞ」
 と言ひ乍ら、清エイツ」と一聲、彼の曲者の脇腹に宜く無い
 を喰はした曲者「ウムツ」と一聲、彼の曲者は、正氣を失つて

ッタリ其處へ打倒れる、清は手早く短銃を取り上げ、自分の衣
兜に納めて仕舞ひ、彼の曲者が冠つて居る、支那人用の目斗り
出した防寒帽子を取つて見ると、這は抑も如何に此曲者こそ、
彼の洋妾お幾でございます、清は今迄洋妾お幾は、彼の浪花艦
より撃ち出した弾丸の爲めに、一溜りも無く海底の藻屑と消へ
失せたりと思つて居る上、眞逆に女たとは気が注か無いから、
ハツと斗りに打絡き、清オヤツ、貴様は洋妾お幾だナ、ウーム
命冥加な奴だ……、ウーム、宜しくと何か心に点頭き乍ら、
又もや清「エイッ」と一活を入れると、ウーンと息吹き返した
洋妾お幾、シロリ清の顔を見るや否や、バアツと又もや逃げ出
さんとする、清「オイ洋妾お幾とやら、逃げ様たつて逃がしは仕
無い、サア貴様は那れから、何うして命を助かつたか、白状し
ろッ」とグイッとして利腕を引捕れて居るから、流石の洋妾お幾も
モウ仕方が無いお幾、ウム、一度成らす二度三度、お前様に危害

を加へた此お幾、サア何う成りとするが宜いよ」と度胸を据へ
其處へ座り直した清ウム、大抵其う言だらうと思つて居た、
が併しお幾とやら、望みならば命を取るが、或は領事館へ引渡
しても宜いが、僕が少し尋ね度い事が有るのだが、何うだ其れ
に答へをするか、言はれて洋妾お幾も、意外に島村清の言葉に
訝り乍らお幾何うせ斯う成つた曉は、何に依らず決して包み隠
しは仕無いのよ、サア何を聞き度いのか言つて御覧、清ウム、
外の事チア無いが此五六日以前、貴様は彼のエラヌミツク號の
甲板で、嚇かす心算か何うかは知ら無いが、貴様が今迄した悪
事を、僕に對して言つて居たナお幾、ハイ然うですよ、清其れで
其時お前は、生れは越前鯖江だと言つた様だナお幾、ハイ、清ウ
ム、然らば聞くが、萬一やお前は姓を岩村と言つて、恭一と言
ふ一人の弟が有りは仕無いか、是れを聞いたる洋妾お幾、俄に
顔色を變へ乍ら、ハツと此方を向き直り、不思議そうに島村清

の顔を打眺めお幾、エーッ、貴方は何うして其れを御存じ……
 清ウム、其れでは察しに逆はす岩村と言ふのだナ、お幾、ハイ然
 うでございませす、清ウムお幾とやら、貴様は兩親の事を知つて
 居るかお幾へエ、兩親の事と申しますと、兩親は何うか致しま
 したのでございませすか、清ウム、譯を言はねば判ら無いが、實
 はお幾とやら斯うだ、今を去る事三ヶ年以前、僕が未だ中尉の
 身で、何でも十二月の中旬頃だったと思ふが、其日は朝からの
 雪空で、降らねば宜いと思ひ乍ら、軍隊の用事で陸軍參謀本
 部へ行き、遂に用事が長引いて、歸り掛けたのは彼是れ夜の八
 時頃、參謀本部の門を出ると、ビエーッ、と吹き出した其寒
 風、下を見ると何時の間にか積つたか判ら無いが、眞白に雪が積
 つて居る、其れにも足らで未だチラリ、と降つて居る雪は、
 頬面に風と共に吹き付けて、其寒い事は宛然ら身を切るゝ様
 だ、殊に其日は寒いからと思つて、馬丁の留吉と言ふ者は先き

に返して仕舞つたから、スッポリ頭から外套を冠つて、雪を踏
 んで歸り掛けたが丁度日比谷門前の處に来ると、片傍の軒下に
 立つた一人の男が有るのだ、お幾、ハイ、清、僕は乞食か何かだらう
 と思つて、ズツと行過ぎ様としたのだが、何だか氣に成る様な
 心持ちがしたので、ツカ、ツと其方へ近寄て行き、オイ、
 お前は其處に何をして居るのだと、聲を蒐けると彼の男は、へ
 イ私しは苦學生でございませす、今は此雪で仕事が無く、其れ
 が爲めに宿賃も取る事が出来ませんで、此處へ一晩野宿を仕
 様と思つて居るのです、決して怪しい者チアございませんと震
 へ聲で言つて居るのが、何うやらまた年若い男らしいのだ、
 其處で僕は仕事と言ふのは全体何をして居るのだと言ふと、損
 料貸しの人力車を借りて、其れを曳いて居るのですと言ふチア
 無いがお幾、ハイ……、清、其處で僕は其男に、年を聞いて見ると
 十七才だと言ふので、嗚呼可哀そうな者だと思つたのだ、全体

僕はお前環は知ら無いが、小さい時分には随分苦勞をして、今斯う成つたのも或恩人の爲めに、引揚げられたので有るから、人一倍に憐れを催し、其れでは今夜一晩は、俺れの家泊めて遣るから来いと云つて、連れて歸つて飯も喰はし、種々話しを聞いて見ると、人力車を曳き乍ら、今では精華中學校の三年に通つて居ると云ふ、其言葉から素振が、却々確固りして居る様だから、殊に仍つたら俺れの家置いて、書生代りに使つた上で、晝間は學校へ通はして遣らうと、種々生國杯の事を聞いて見ると、其れが何うだ、今お前に言つた越前江の岩村恭一と言ふ者なのだお幾へエーッ、清其れから僕は其岩村を書生に置き、通ひ馴れた精華中學校へ遣つて成績を見るとき、何時も級中で一二番と言ふ好成绩、是りア面白いと思ひ乍ら、一日く送つて居る内に、精華中學校も昨年の春、遂に優等で卒業して其當時は軍人に成ると言つて、一生懸命勉強をして居たが、此

頃では或事に感したと言つて、外交官に目的を變へ、今では僕の家から毎晩外國語學校へ通ひ、一生懸命に勉強して居るのだお幾へエーッ、ア、知りません事とて、重ね々貴方様に對して、危害を加へんとした此妾し、何と申上げて宜敷いやら、遣イヤ其れは宜い、併し折々其岩村と話しの序でに、家内の様子を聞いて見ると、其岩村の言ふのは、私しにはお幾と言つて一人の姉が有りますが、十二年以前に私しと兩親を捨て置いて、旅役者と断落ちを致し、其後少しの音信も無い、其れを苦にして兩親は、四五五年の内に引續いて無く成つたが、死ぬる最期の際迄も、其姉お幾と言ふ者の事を言つて居たと云ふのたお幾ハイ……」と流石毒婦の洋妾お幾も、良心の無い者ではございませんから、ワツと斗りに泣き伏した清其れから其岩村は、一人の叔父を便りに東京へ出て来たが、其叔父と言ふのが何處へ行つたか皆目行方が知れず、遂に苦學生と成つて、日比

谷門外に佇んで居たのだ」と一伍一什を話しますると、毒婦洋
 妾お幾は、尙も急ぎ来る涙を止め兼ね、差俯向いて泣き入つて
 居りましたが、漸く涙の顔を上げお幾ア、知らぬ事とて貴方様
 に、度々の危害を加へ、弟の大恩人様に對して一度成らず二度
 三度、既に御命迄も取らんと致したる此妾し、今日こそ天命の
 盡きる處でございませう何卒此上は貴方様の思ふ通り、何う成
 りと成さつて下さいませし、御願ひでございませう、併し弟恭一に
 も、別れて、早や十二年、一度顔は見度いと思ひまするが、到底
 も叶はぬ今の仕儀、尙此上共弟の身の上、宜敷く御願ひ申しま
 す」と眞實面に表はして、顔も得上げず又もやワツと泣き出し
 た、島村清はジツと其様子を見つめ乍ら清ウム、貴様の様な者
 は生かして置いても益無き奴だから、今僕が命を取つて遣るが
 併し貴様は那のエラスミツク號の小艇から海へ落ちて、何うし
 て助つたのだお幾ハイ、未だ悪運の盡き無き處でございませう

か、小艇から落ちてハツと氣を失つた儘、暫くの間は何事も存
 じませんでしたが、何だかガク／＼言ふ香に、ふと氣が注いで
 目を開けて見ますと、妾しは一艘の帆前船の甲板に寝て居り
 ました、四邊には四五人の外國人が、何かから判らぬ事を言ひ乍
 ら、妾しの四邊を取り巻いて、頻りに介抱して居ます、其處で
 妾しは起き上つて、手眞似、片言で話しを致しますと、其れ
 は露西亞人の商船で、何でも密輸入船らしいのでございませう、
 是れが田舎女の女とか、人馴れ無き者でしたら、恐ろしがつて
 傍へ寄るのも厭やなのでせうが、今迄散々悪事と言ふ悪事は仕
 盡して来た此妾し、巧く其奴ツの船長を取り込んで、遂に其者
 に連れられて此浦沙斯德へ上陸を致しまして、今では其家に居
 りますが、妾し少し小遣錢が不自由に成つて来ましたので、
 昨日の朝ブラ／＼此町を歩行いて居る内に、彼の敦賀屋の表口
 に、ヒョイト貴方の御姿を見たので、昨日から見張りをして、

先刻貴方が戸外の方へ御出でに成る跡を付け、遂に此處で短銃を以つて撃つたのでございませぬ。清ウム然うか、僕は又貴様に油断をさせる爲めに、故意と打ち倒れて居たのだが、併し其れで何れも彼も判つた、サア洋妾お幾、イヤ岩村お幾、望みの通り此短銃で、貴様の命は取つて遣る、覺悟しろお幾、ハイ、何うか御願ひ申します、清弟の事は決して心配をするな、お幾、ハイ、清ア宜しか、今だろッ」とスックと斗りに突立ち上り、衣兜の短銃取り出して、ジツと覗ひを定めて居る、洋妾お幾は流石奇婦の覺悟宜く、着て居た外套をパツと脱ぎ捨て、島村清の方を向いて、ピタリッとその處へ座り乍らお幾、サア何うか御願ひ申します」と兩手を膝にチャンと置き、目を閉じた儘、ジツと覺悟を致して居る、今しも島村清は覗ひを定め、引金に手を掛けるよと相見へたが、清ウムッ」と一聲火蓋を切つて、ドツと斗りに撃ち放した、サア此納りは如何相成りませうや、一寸一服致し

第八章

まして、次席に委しく申述べます。

今しも轟然一聲、島村清が切つて放した短銃の爲めに、哀れや洋妾お幾は其場にパツタリ打倒れたと思ひの外、呆然として相變らず、膝も崩さず坐つて居る、島村清は片頬に笑みを含んで短銃を提げた儘、ツカ／＼とお幾の方へ進んで来るから、意外の威に討たれた洋妾お幾、お幾、オヤ旦那様、何うか遊ばしたの、でございませぬが、清、イヤ何うも仕無い、オ、お幾、貴様の命は僕が預つて置くが、貴様は愈々改心をするのだナ、お幾、ハイ、今更に成つて改心をした處が、何にも成りは致しません、併し死んで行く身体でも、改心をして居れば、少しは心易く死ぬる事が出来ると思ひまして……

清、ウム宜く申した、其れでこそ

清 村 島 の 後

吾大日本帝國に生を更けた甲斐が有るのだ、併しお幾、貴様は何うかして今迄の罪を償ひ度いとは思やア仕無いがお幾、貴様は其れではモウ出来なす事なら致し度いのは山々でございます、清居るのかお幾、ハイ、今貴様の居る家の、其露西亞人は一体何を其れにしては餘り其仕掛けが大變で、毎日歩つて来るのは支那人斗り、荷物と言つたら裏の一軒家に一杯詰まつて居ます、が、何でも鐵砲だとか、或はダイナマイト、彈丸、其他食料品、杯斗り、何處からと無く寄せ集めて来ては、汽車に積んで送り出す様子でございます、清ウーム、然るか、扱ては其れこそ常時支那暴徒の軍隊に、軍器、彈藥を賣り込む奴つに相違無シテ、今日は何うして居るお幾、ハイ、今日は其五六人の露西亞人と、二三人の支那人が、何處かへ軍器、彈藥を集めに行つて、不在でございしますが、明晩は多分歸るだらうと思ひます、清ウーム

清 村 島 の 後

然るか、何とお幾、僕を秘かに其お前の家へ手引きをして、何處かへ隠して置いては呉れまいかお幾、ハイ、清イヤ事故を言は無り、ア判ら無いが、實はお前も聞いて居る通り、今支那には深山の暴徒が起つて、北京城内の各國公使館を焼討ちするやら又は各國居留民を殺害するやら、既に吾日本の公使館付一等書記官、橋原君杯は、其暴徒の爲めに命を陥されたので有る、然るに其暴徒は却々其勢力が有つて、軍器、彈藥、食料杯は、非常に充分に有る様子、何處から買入れて、何う言ふ案梅にして取寄せるのか判ら無いが爲め、益々其勢ひを増し、其れが爲め各國軍隊も、非常に弱つて居る有様だ、其れで其軍器、彈藥、糧食の道さへ絶てば、早速其暴徒は手も足も出無く成るは必定、處が今お前の話に仍つて見ると、何うやら其奴ツ等が其軍器、彈藥杯を賣込んで居る様子だから、其れを取押へて其筋へ引渡せば、吾大日本の名譽勳功は、世界各國に響き渡つて、其上北

京在留數百萬の人間が、命を全うする事が出来る譯、何うだお幾、お前が今迄の罪滅しに、僕を手引きして其奴等を取押へる手助けをして呉れ」と事故を委しく言つて頼みますると、誠に吾大日本帝國に生を受けた岩村お幾、悪に強ければ善にも強しの本性を現してお幾、ハイ能く分りました、今迄は只ウヤ／＼と暮して居ましたが、其んな深山の人の爲めに成つて、其上日本其れではお前は快く引受けて呉れるかお幾、ハイ確に御引受け申しました、併し家には留守番の者が一人有つて、其者の目に掛つては大事でございますから、今から御全道申しまして、二度目に妾しが戸を開ける迄、何うか表門口の樹の中に隠れて居て下さいませ、清ウム其れでは僕は歸つて、外套を着して来るから、暫く此處で待つて居て呉れ」とお幾を待たして於いて島村清は、彼の教賀屋へ歸つて参り、宿へは今晚と明日は、此浦沙

斯徳の御茶屋町で遊んで来ると言ひ於いて、急ぎ元の處へ来て見ると、洋妾お幾は温和しく待ち受けて居る、清オ、待たして濟ま無かつたお幾、イエ、何う致しまして、其れでは御案内申しませう」と島村清は洋妾お幾に案内をさせ、途々尙も種々と謀斗を廻し乍ら、三ツ四ツの辻を曲つて、五丁斗り歩行いたと思ふと、此處はモウ居留地を出外れて、純粹な露西亞人斗りの町でございいます、早や夜は更け渡つて居りますから、人の子一人通つて居無い、水りの如き大地は、歩行く度びにカン／＼音が致して居る、所々の軒下に出して有る瓦斯燈の火も、薄暗く、何の物音も聞へ無い、洋妾お幾は一軒の汚ない西洋建の表門へ行んでお幾、アノ旦那様、是れが妾しの家でございいます、甚だ恐れ入りますが、此生垣の間で、暫く何うか御待ち下さいませ、様、清ウム宜し、成る可く早く仕度をして呉れよお幾、ハイ宜敷うございませ」とお幾はツカ／＼と表戸の處へ進んで行く、

清村島の後

に此ブランデーを御飲り成さいますし、其れで此パンは朝迄に
暇が空いては成りませんから、御用意に御持ち成さい」と何
と親切に心を盡して待遇して居る、島村清は禮を言ひ乍ら、ア
ランデーを一杯飲み、パンを衣兜に納めて、暫く話しを致して
居る内に、三時が鳴り、四時が鳴った、清サアお幾、今鳴つたの
は四時の時計だから、今から隠れて居様、お幾然う成さいますし」
と島村清はお幾の庭台の下へ身を隠した、お幾は尙も其上へ手
布の大きい奴つを四枚も掛けて、外から見ても、到底も分ら無
い様に致して置き、自分は暖爐の側に來つて、時の移るを相待
つて居りますと、暫くして表戸をドン／＼と叩く者が有る
お幾旦那様、何うやら歸つて來た様でございますから、御氣を
御注成して下さい、清ウム大丈夫だお幾其れで先刻の短銃は
御持ちでございませうね、清ウム確かに持つて居るお幾其れで
は妾しが御知らせ申します迄、暫く御辛抱を願ひます」と言ひ

清村島の後

置いて洋妾お幾は、自分の部家へ外からピンと銃を下して置
き、其儘暫く何の音も致しません、島村清は用意充分に致して
豫て用意の短銃を、衣兜の奥深く忍ばせ、シツと様子を見つて
居ると、表戸の方に當つて、何か大きな箱を五六個、ゴト／＼
ゴト／＼と奥の方へ轉がして行く、暫くすると其音も止んで
後は何の物音も仕無い、其内に五時が鳴る、六時、七時と次第
に時は移つて來たが、丁度七時半頃とも思ひ、洋妾お幾は
部家の扉を開けて退入つて來た、今しも寢台の下に隠れて居る
島村清の姿を覗き込み乍らお幾サア旦那様、今妾しがランデー
を飲まして、七八名の奴つを寢かし付けて來ましたから、モ
ウ大丈夫でございませう、何うも御待たせ申しました、清然うか
シテ先刻何か大きな荷物を持つて歸つた様子だが、例の軍器、
彈藥杯だらうな、お幾ハイ、今日は何でも鐵砲が千挺に、彈藥が
一萬七千發、其れにパンが五六十貫と、鐵詰杯が澤山に有るそ

うでございす。清は寝台の下から匍出して参り、却々太した物だナと言ひ乍ら、
 隙を掛けて、洋妾お幾が用意して居た麻細を持ち、片手に短銃の引金へ
 て呉れんと、洋妾お幾に案内を致させ、お幾の部家を出て、忍
 び込んだる、彼の密輸入露西亞人の部家、秘と身を片寄せて、現
 いて見ると、食卓の上にはブランドー、ジョン、三鞭、其他洋酒の
 瓶倒れて居る、其廻りには寝台を七八台並べて、毘だりけの
 露西亞人は、前後も知らず高野まで寝込んで居る様子、仕合せ
 宜しと島村清は、ズイツと只一人の内裡へ這入つて参り、
 ツと進み、こむと見る間に、中にも首領と覺しき一人の露西亞人を
 手早く高小手に縛り上げた、ハツと目を覺した彼の一人、
 有様に大に驚き、何か高聲に怒鳴り出した、島村清は今しも
 樹を喰まさんと思つて居る處へ、高聲に怒鳴られたものでござ

いますから、遺失策つたツと言ひ乍ら、片手に持つたる短銃
 取るより早く、胸部を目蒐けてズドンと斗りに撃ち放した、何
 かに以つて堪りませう露西亞アツと一撃、口中よりガラ／＼
 ツと黒血を吐いて、其儘其處へ打倒れる、此砲音に驚いたる跡
 五六人の露西亞人は、バアツと寝台を飛び起き乍ら、中なる一
 人は物をも言はず、島村清を目蒐けて、ドツと斗りに組付いて
 来た、不意を打たれた島村清、短銃片手に撃ち出す事も成らず
 遺オツ来いツと言ひ乍ら、今しも飛び掛つて来た一人の利
 腕グイツと取るより早く、講道館流捨身の一手、手早く左手を
 以つて敵の首へ巻き付けた、振り解かんとする奴ツを、除かさ
 す付け込む島村清、清エイツと一撃、腰を捻つた其早業、身
 の丈け六尺有餘の露西亞人は、ドツと三四間、彼方の方へ投げ
 出された、此時島村清は、短銃片手に差し向け乍ら、片傍の柱
 を小櫃に取り、清ア来いツと身構へた、此時二三人の露西

亞人は豫て用意の獵銃取るより早く、三方四方から、一度に島
 村に規ひを定め、ドツと引金を引いたが、這は如何に、充分常時
 から彈丸は込めて有る奴ツが、何うしたものか一發も發し無い
 ハツと驚く露西亞人は、鐵砲其處へ投げ捨て、何か高聲に怒
 鳴り乍ら、バラツと逃げ出さんとする處を、規ひ定めた島
 村は、續け様にズドン、ド、ドンと三四發撃ち出したから、
 流石の悪漢も將落しに入口へ打倒れた、残った奴ツは死骸を
 踏み込へ、バツと部家の外へ飛び出すと、此處にも一發、二發を
 ズドドンッ續けて撃ち出す鐵砲に、ドツと血煙り立つた二三人
 バタリと打倒れた、處が今迄食卓の下に隠れて居た一人の
 悪漢は島村清の隙を規つて、バラツと表の方へ飛び出さん
 とするを、飛鳥の如く飛び掛つた島村清、清エイツと一發、
 濫川の流の當身の早業、バツタリ其處へ打倒れる處を、清は飛び
 込んで、用意の麻繩を以つて、雁字搦めに縛り上げて、清エイ

ツと再び活を入れると、難無く氣の注いだ悪漢は、目斗りバ
 タリと致して居る、處へツカ、ツと、鐵砲片手に遁入つて來
 た洋妾お幾、お幾旦那様、都合宜う参りましたが、何處も御怪我
 はございませんか、清オウお幾、何うも御苦勞だった、何處も
 怪我は無いよ、お前が鐵砲の彈丸を抜いて置いて呉れたので、
 僕の命は助かつたのだ、何うも御苦勞だったお幾併し旦那、此
 上は何う致しませう、清ウム、僕は是から一走り、領事館迄行
 つて來るから、暫く此奴ツの番をして居て呉れ、お幾ハイ畏りま
 した、島村清は、彼の縛つた露西亞人を、洋妾お幾に任して置
 いて、領事館へ駈け付けて行く、暫くして清は日本領事北川春
 雄、其他二三名の領事館書記を連れて、現場へ乗込んで來る、
 此處で島村清は自分の官職、姓名を名乗り、此場の始末を事落
 ちも無く領事に話しをする、領事北川春雄は、委細の様子を聞い
 て大に驚き、容易ならざる事なりと在つて、直様沙彌斯徳の警

領事官、警察官、其他浦沙斯德在任の軍隊へ此由を通知する、其處で日本
 の捕られた悪漢を取調べて見ると、此悪漢の主領は露領、ハル
 ビンの生れで、名をマアテムスキーと言ふ者、其配下には十五
 六人の悪漢が有つて、遠く南清、即ち上海邊りの悪漢と通じ、
 南清より軍器、彈藥、食料品其他の者を密輸出して、此浦沙斯
 德へ持つて参り、北清の暴徒に賣渡して居ると言ふ事が判つた
 其處で早速其者は牢内へ放り込み、其れく手裏を得て、悪事
 に加擔の者を引捕へ、嚴重な調べに包み切れず、皆々白狀致し
 て仕舞つた、其處で悪漢の死骸は警察署の方で取片付け、豫て
 貯への軍器、彈藥、食料品等を一々引揚げて調べて見ると、却
 々大した金高の物でございませう、其れ等の物は皆露國政府の没
 収品と成り、島村清は吾が日本政府及露西亞政府より、非常
 に御賞めの言葉を賜り、大に面目を施した事でございませう、サ

ア是れより如何なる奇談がございませうや、回を追ふて辨し續
 ける事に致します……

第九回

其處で島村清に於きましては、其翌日彼の洋妾お幾を自分の宿
 とする教賀屋を連れて戻り、遺扱てお幾、今度は何うも一方成
 らぬ骨折りで、誠に有難い、北清の暴徒も軍器、彈藥の輸送を
 絶へたから、是れは日ならず平らぐ事と思ふ、又僕も其れが爲
 めに、日本政府、及び露西亞政府より、大に御賞めの言葉
 を賜り、尙其上成らず露西亞政府より、勳章も賜ると言ふ内
 々の知らせも有つたが、併し僕は少し思ふ處が有つて、其勳章
 丈けは御断りを置いて置いたが、何しろ名譽な事を仕出したのだ
 就いてはお前の身の上だが、昨日領事の北川春雄君に是れ

後 島 村 清

たと話しをした處が、其れは何うも感心なものだと言ふので、萬一其者が日本へ歸るのなら、及ぶ可き丈け便宜を計らうて遣ると言つて居る、お前も何時迄斯んな事をして居ては、第一末の見たも無く、弟の名譽、續いて吾大日本帝國の名譽にも關する事だから、早く日本へ歸る様にしたら宜からう」と言はれて洋妾お幾は頭を下けお幾「ハイ、妾しも既に命の無い處を、少しでも日本の爲めに成る事を致しまして、此上の嬉しい事はございませぬ、併し今迄妾しが、貴方様に對して種々、願ひ事計りを致しました、其れは御許し下さいませのでございませうか、清ウム、モウ然うお前が改心をした上は、僕はその罪を憎んで其人を憎まず、決して心には掛けて居無い、其れは必ず心配をする事は無いお幾「エツ、其れでは妾の罪を御許し下さいませるか、ア、誠に有難う存じます、清就いてはお幾、お前が日本へ歸つた處で、生れ故郷の越前には両親は無し、別々に是れと

後 島 村 清

言つて行く處も無からうから、僕が手紙を一本書いて遣る故、其手紙を以つて東京四谷坂町の松山家を尋ねて行き、お前の弟も居るから、暫く一緒に暮して居れ、其内二三年経てば僕も日本へ歸るから、其時には又何か相談にも乗らう」と此親切なる清の言葉に、流石の洋妾お幾も涙を流しお幾、其れでは何分宜敷く御願ひ申します」と言ふので、遂に此お幾は清に手紙を書いて貰ひ、尙清より浦沙斯徳領事へ、萬事船便の事杯を頼んで清に貰ひ受けた小遣錢十圓を懐中に納め、其翌日の涼船便で、遂に日本國へ歸つて行つたのでございませぬ、其内に島村清は、尙一日二日と此浦沙斯徳に滞在して居たが、遂に十一月六日、此浦沙斯徳より露都セントピーターズパーク行きの、直通列車に乗つて、浦沙斯徳港を跡に成し、歐州を差して出發致しました、其れより三日目の朝、遂に露都セントピーターズパークに着致しました、其れより島村清は羅間の古跡で感慨し、

プラタルの海峡も、何時しか過ぎて行先は、是れそ世界に名
 も高き英國ロンドン、佛蘭西パリスの月と花を眺め、其れより
 引返して和蘭の都アリスナルダム、獨逸ベルリンと滞在をして
 各國の人情、風俗を察し、一生懸命に外國語を勉強致して居る
 處が御話し變つて此方は彼の杉金之助でございませぬ、自分
 國カリホルニア州で、大漁業會社を作り、盛んに漁業を致して
 居りました其内に、彼の有名なる英米戦争が起つて來た、其處
 で杉金之助は、部下の雇人を集めて米國の爲めに義勇軍を編成
 致し、加多州境に於いて大に英軍を破り、其勳功に仍つて次
 第に官位も登り、仕舞ひには陸軍中將の資格に進められた、又
 彼の杉金之助と許嫁なる、玉井春枝も同じく米國の爲めに日
 赤十字社分院を作り、英國、米國の傷病者を收容して、人道
 爲めに盡した事でございますから、此杉金之助、玉井春枝の兩
 人の名と共に、日本人義侠の名は、廣く世界各國に響き渡つた

事でございます、其内愈々戦争は終りを告げ、遂に平和に相成つ
 た處から、杉金之助は強いて米國陸軍中將と言ふ職を辭し、漁
 業會社は自分腹心の副社長、茨城縣人村田正夫と言ふ者に譲つ
 て、自分は豫て貯へ金の五萬圓を携へ、一艘の蒸氣船を買ひ込
 んで、杉金之助自分が、雇人の内より選抜したる、二百人斗り
 の人数を引連れ、愈々南洋へ乗出すと言ふ事に成つた、此期を外して
 は一大事と思つたが、態々杉金之助の居室を訪問し、口を極め
 て玉井春枝と結婚の事を勧め、杉金之助は未だ自分の思ふ事
 が、充分達し無い内に、結婚しては不可無いと、幾度か辭退
 を成し、彼の日本を出発する當時、親友島村清に殘した手紙杯
 の事を言つて、頻りに辭退を致しました、強いての勧めに今
 は否み兼ね、遂に此領事木村氣十郎の立會ひに仍つて、紐育府
 の教會堂で假りの結婚式を舉行した、其處で杉金之助は、妻春

後 島 村 清

枝を召し連れて、五萬圓の金の内で買ひ求めたる、六十噸の漁船に乗り組み、桑港を出發したのが、明治三十四年十一月三日、天長節の佳節でございませぬ、此乗組員の中には、随分面白い男も有るのでございませぬ、其れは段々に申し上げる事として、此處には省いて置きます、其處で船の方には一門の大砲を据へ、數ヶ月分の糧食を積み込み、日章旗を注頭高く揚げて、假りに此船を日本丸と命名し、米國の紳士、紳商は申すに及ばず、數多の婦人杯に送られて、愈々桑港を出帆致しました、船長は假りに杉金之助が役目を勤め、外に豫て汽船の航路に經驗の有る水先案内者を雇つて居ります、其處で船は針路を南へくと取つて遂に其年十二月初旬、船は南洋群島の東端、ベルカ島へ着船を致しました、桑港を出て一ヶ月餘りの航海に、大風雨にも遭つた海豚や鯨の群にも會つた、其れは長虹や、陸地では到底も見られ無い

後 島 村 清

様な珍らしい物にも出會つたのでございませぬ、斯んな事を一々申上げて居りました、却つて讀者諸君の御退屈と存じ、只是れ丈けを申し上げて置きます、抑も此ベルカ島と言ふのは、一寸吾日本の淡路島位の大きさでございませぬ、人口は八千人位ひで、此島の北の端にチニルカと言ふ港がございませぬ、此の港には英國人、佛蘭西人、和蘭人杯が、百人斗り住居を致して居りますが、一體に淋しい無人島同様な小島で、何故杉金之助が此淋しい島に碇泊したかと申しますと、一先づ此チニルカ港へ道入つて船体の破損杯を取繕ひ、船員にも一ヶ月以上漫々たる海上を航海した、其疲勞を休ません爲めでございます、其處で船は港内へ道入つて參り、杉金之助は妻眷杯、及び其れに從つて居る下女代りの女、其他二三名の船員を残して置いて來る、處が此チニルカ港町の兩側には、數多の土人がズラ

リと並んで、物珍らしそうに眺め乍ら、口々に何か喚き立て、
 居る、勿論言葉は南洋言葉で、一切判りませんが、是れを日本
 語に直し見ると、何れの國でも獲ら無いのは人心。○何うで
 す、随分歩つて来ましたね。□サア歩つて来ましたか、一体何
 うする、心算でせう。○此島を取るのチア無いでせうが、
 逆其んな事も有るまいが、一体何處の者だい。甲何でも日本人
 ださ。乙ホーム然うかなア、随分併し大きな奴ツも居るな。
 甲ウム、日本人だつて中にア大きに奴ツも居るんだらう。乙
 アレ見ろ、那の三番目を威張つて歩行く奴ツは、宛然は熊見
 た様な野郎だナ。△ウム、其次に行く奴ツは、支那人の様だ。
 と男連中は種々と喚き立て居る、中にも女の連中は女乙アレ
 せう。女乙マア何てエ美男子でせう。と口々に思ひくに饒舌つ
 て居る、此島の家は大底土人の住家は葦藁でございしますが、所

々に西洋人が住んで居りますから、西洋館の却々立派な家も見
 へて居る、土人は皆裸体で、腰の邊りに一寸した棕櫚の葉を
 當てゝ居る丈け、其内にも土人の主立つた首長は、流石に大將
 分と見へて肩から胸へ掛けてモスリンの様な布を引掛け、瑪瑙
 やら緑寶石やら珊瑚珠杯の寶玉を、糸に通してブラ／＼首へ掛
 けて居る、頭には木の葉で作つた帽子に、鷲の羽の大きい奴ツ
 を突き着し、手には鋭利な鎗や、鋒杯を携へて、色はと言へば
 例の通り真黒けでございす、此處は南洋諸島の内でも、一番
 早く開けた處で、別に杉金之助の一行に、危害を加へる様な事
 動も見へません、十二月とは言ふもの、流石處は南洋の事と
 て、却々一通りの暑氣ではございませぬ、キラ／＼照り付ける
 様な日の光りは、チリ／＼顔も手足も焦げ付く様な暑さだ、此
 時列の中程に歩いて居た杉金之助、其傍に付いて居た一人の
 船員は、金之助の方を向いて。○船長、人夫共も大分弱つて居

る様子ですが、何處かで休ませうか金之ウム上田、其う言ふ
 お前が大分疲れて居る様だろ、アハ、上田何アに其んな
 静チアございませんが……金、兎に角此の邊へ天幕を張つて、
 少し休息する事に仕様」と其れ、命令を傳へますると、豫て
 手分けをして居たと見へて、瞬く間に大きな天幕を張り、二三
 時間も此中へ這入つて、貳百人計りの同勢が、暫く息休めを致
 して居る、其内に豫て定めた賄方は、土地を堀り立て、火を焚
 き、飯を焚き茶を沸かして、四邊の野山を眺めづ、皆に夕飯
 を喰つて居る、彼方の五六人の水夫、寄り集つて話しを致して
 居る、甲オイ菱田、幾何船が家たと言つて、一ヶ月餘りも船に
 乗つて居ると、ウンザリして仕舞ふな菱田、ウム然うだとも、俺
 りア天幕暮しでも介意んから、切つて一月も此處に泊つて居る
 と宜いなア、〇二三日内に船も修復するだらうから、其うすり
 ア又直ぐ航海だ、厭やだなア、其れよりア早く目的の無人島を

見付け出して、寶物をウンと取つて見度いのだ、航海だと思ふ
 と厭やに成つちまうナア、乙ハ、船乗りが海を厭やチ
 ア、遣り切り無エよ、△幾何船乗りだからつて、一月余りの航
 海チア飽きて來らアナ、幾何船乗りだつて古い奴ツは厭やだがらなア、
 〇アハ、却々素晴らしい別嬪も居るんだナ、今井ハ、ハ、ハ、
 て居りア、却々素晴らしい別嬪も居るんだナ、今井ハ、ハ、ハ、
 りア貴様西洋人だよ、其管チア無エか、各各自に好きな話
 しを致して居る内に、杉金之助は腹心と頼む宮城三之助、大村
 喜平、三木佐男の三人を呼び寄せ、金之助、扱て諸君と漸く諸君の御
 盡力に仍つて、此ベルカ島へ着致しましたに就いては、二三日
 の間に本船の修繕及び船員の休養を成し、而して後豫定の通り
 無人島を探索に行く考へで有りませんが、當ベルカ島も大分開化
 に向つたとは申し乍ら、未だ野蠻人が澤山に住んで居ります、
 仍つて僕は今晚は此天幕内で露營をする心組みの處、心に掛る

は本船の事です、依つて僕等は本船の船長として、船員一体の取
 締をせねば成らず、其處で宿城三之助君は、船員二十名を連れ
 て、本船へ歸つて居て下さい、大村喜平君、三木佐男君の兩人
 は、此天幕の外で徹夜焚火をして、猛獸、悪蛇の警戒を願ひま
 す、尤も御兩人共起きて居るには及びませんが、十人宛の交
 代番の者の取締りとして、其れの監督を願ひます、僕等は只
 今から三時迄起きて居りますから、尙委細の事は後に御打合せ
 を致しませう」と申し渡しますると宮城、大村、三木の三人は
 聲を揃へて三人ハイ宜敷うございませう」と、皆々承知を致しま
 す、其處で杉金之助は、二百人斗りの船員の中から、屈竟の者
 二十人を選び、宮城三之助に付けて日本丸へ歸して仕舞ふ、又
 残つた者より二十人を選んで、其れを十人宛二手に手分けを致
 し、大村喜平、三木佐男の兩人へ是れを托し、其他の船員には
 其邊りの山や林に分け入らせて、炬火の原料にする枯木、枯草

を澤山に集めて來させた、其内に日が暮れて仕舞つたものでご
 さいまから、杉金之助は自分の事務室兼寢室に致して居る天幕
 の中へ這入つて來て、暫く休息して居る内に、大村喜平及び其
 れに付き從ふ十人の船員は、時こそ宜けれど、ドン／＼と焚
 火を仕出した、他の船員は日頃の疲れもあり、殊に明日の仕
 が有るものでございませうから、各々定め天幕へ這入つて寝て
 仕舞ふ、杉金之助は鐵砲を背に負ふて、プラ／＼と方々の天幕の
 外を歩行き廻り乍ら、次第に更け行く空を眺めて居る内に、船
 て、變代の時間が來ると、大村喜平に從つて居た十人の船員をし
 て、十二時から交代の三木佐男の連中を起して廻る、其内交代
 の者が揃つた處を見て大村喜平は杉金之助に一禮を成し、定め
 の天幕へ這入つて寝て仕舞ふ、斯うして暫く杉金之助は、又も
 や各天幕の外を警戒して、自分の天幕へ歸つて來ると、何うや
 ら眠くなつた様でございませうから、懐中時計を出して見ると、

早や三時少く廻つて居る、其處で尙も後の事を能く三木佐男、
 其他十人の者に頼んで置いて、自分には毛布を一枚廣げて其れで
 身体を包んだ儘、グーッグーッ寝て仕舞ふ、暫くウトウトと
 眠つたかと思つた其途端、杉金之助の天幕の外へ、ズタズタと
 と駈けて来た一人の船員、船セ、船長……、タ、大變だ、
 起きて下さいッ」と天幕の外から、大聲出して呼はつた、ハッ
 と目を覺した杉金之助、金之助、何だ、何うしたのだ船員ハイ、今
 人が五十人斗り、槍や刀で押し寄せて来たのですッ、金之助、其
 りア大變だッ、此方に怪我人は無いか船員、へい私しは三木さん
 の言ひ付けで、貴方の處へ御知らせに來たのですから、何にも
 存じませぬ金之助、宜し、今行くッ」と是より杉金之助が、
 相州の住人國光二尺七寸の一刀を以つて、是等蠻人の中に斬り
 込むと言ふ御話し、引續いて無人島発見の一條は、回を追ふて
 言上仕ります。

第十回

今しも杉金之助に於きましては、船員の知らせに依りバツと其
 處へ起き上り、洋服の上に兵士帯を纏め、相州國光二尺七寸の
 大刀を帶し、天幕を飛び出して、バラツと炬火を目當てに
 來て見ると、彼の船員の知らせに違はず、身の丈六尺から七
 尺斗りも有らうと言ふ蠻人が五六十人、何やら大聲に喚き立て
 乍ら恐ろしく長い槍や刀、又は鉞の様な物を持つて、ドツと斗
 りに向つて來る、此方は日本丸乗組の水夫や人夫が二三十人、
 小刀や棍棒、中には日本刀を以つて防いで居るが、何しろ對
 手は五六十人の大男、命知らずに押し寄せた事でございますか
 ら、却々其れ丈けの人敵では防ぎ切れ無い、此方を見ると三木
 佐男、豫て用意の鐵炮を以つて、ドンクク打ち放して居る

が何しろ向ふは薄暗がり、充分に覗ひが定まら無い、其内に
 向ふの燈人は、長やかなる槍を振り、又は刀、鉾を以つて四方
 八方に斬り立て、居るから、此方には早や二三人の手負人が出
 来た様子、其内に方々の天幕から、二人三人宛、飛び出して参り
 應戦は致して居るもの、何を言つても真夜中に、不意の襲撃
 でございませうから、思ふ様には参りません、此体眺めた杉金之
 助、大刀の柄に手を掛けるよと相見へたが、今しも三木佐男を
 臨んで横合から、長槍を以つて突出さんとする一人の燈人を、
 金之「エイッ」と一聲、抜き討ちに、後袈裟に切り付けた、何かは
 以つて堪りませう、燈人「ワァッ」と斗りに血煙り立つて打つ倒れ
 る、佐男、オウ船長、斯様な有様です、金之「ウム、何アに燈人の五十
 人や百人、東に成つて来たつて知れたものだ、併し君は何うも
 御苦労だった、是れから僕が引受けるから、君は少し後邊の方
 で見て居給へッ」と言ひ乍ら、彼の大刀を真向に振り冠つた儘

彼の燈人共、杉金之助の前、後左右を、金之助、只一人を、彼の長槍
 も、身体、退ましき四五人の燈人は、金之助、只一人を、彼の長槍
 長刀、鉾を以つて、徹塵に成れと斬り付ける、金之「心得たりッ」
 と、杉金之助、落花に遊ぶ胡蝶の影、水に漂る稻妻か、大袈裟、
 小袈裟、車斬り、真向、梨削り、唐竹削り、前後左右に大敵を引受け
 乍ら、バツタ、と斬つて落す、是れを見たる流石の燈人も、
 餘程恐ろしかつたと見へて、屍骸を踏み越へ蹴飛ばしながら、逸足
 差して逃げ出した、此時、此處へ駆けて来た、三木佐男、佐男、船長
 何處も御怪我は有りませんでしたか、金之「イヤ、僕は怪我は無
 オ、イヤ、皆の者、追駈けるのは駄目だ、止せッ」と大聲に
 呼はりますと、皆々、其れへ歸つて来る、其處で杉金之助は、船
 員共を調べて見ると、負傷した者が僅かに三人、向ふの死骸は十
 二人、早速、其負傷者の手當てをして、彼の燈人の死骸は、其處

後 島 村 清

の土を掘つて埋めて仕舞つた、然う斯うして居る内にホノ
 と夜は明け放れて来たから、其處で杉金之助は、一日も早く
 様な危険な處を逃れ、目的の無人島を探さんと船員一人夫を
 勵して、船の修繕を急がした、何しろ二百人からの人間が、
 目も振らず精出した仕事でございませうから、其日の内に修繕
 済し、船底の帆殻を除き、ペンキもスツカリ塗り代へて仕舞つ
 た、其處で全員は又もや乗船を致し、其翌朝未明に此港内を抜
 ち、カ島を離れた日本丸は、二週間斗りの間南洋諸島の間を
 け、海原を探して見たが、四方八方を望遠鏡で眺めて見たが、
 明日かど首を延し、四方八方を望遠鏡で眺めて見たが、今日か
 る物は只だ海面と、空の色斗り、然るに丁度南洋諸島を出抜
 た一週間の目の朝、豫て見張り付けて有る一人の水夫が、外
 の

後 島 村 清

水夫を呼び掛けて、ソツと南の方を目詰め乍ら
 公向ふを見ねエ、何だか知らんが青い島様な物が見へるチア
 無エか吉公何アに例の雲だらう、貴様等の目で何が見へるもの
 か、〇馬鹿を言へッ、其れでも俺れ、船長から、見張りの役を
 承わつて居るんだ、何うでも那ア島に遠へ無エ、貴様目が宜
 いつて自慢する位ひなら、此橋へ上つて見て来い吉公何を言つ
 て居るんだい、貴様が見付けたのなら、貴様が登つて見ろ、〇
 ウム宜し、俺れが登つて見来て遣る、少し待つて居れエと宛
 言ひ乍ら、一人の水夫は橋に架けた細梯子を、スル／＼と宛
 然ら猿の様に登つて行く、此處等は常から稽古を致して居るか
 ら却々巧いものでございませう、今しも橋の上に登つて行つた一
 人の水夫は、肩より斜に掛けて居る双眼鏡を目に當てがい乍ら
 一生懸命夢中に成つて、南の方を眺めて居たが、暫くすると橋
 の上から頓聲、〇船長、見へましたッ、
 〇船長、見へましたッ、
 〇船長、見へましたッ、

者な者なら行けるたらう、然し那の断崖、絶壁を登るのが大難
 だらう、義忠何アに船長、腰へ浮袋の二つも付けて、網で身体を
 縛つてさへ置けば、真逆の時には其れを手繰れば宜うございま
 せう、金之然うだす、其れでモウ人選はして有るのですか、義忠ハ
 ア、屈竟な奴ツを五人選抜して置きました、其中でも杉田と言
 ふ男が、泳ぎは一番達者なのです、金之チア其五人を此處へ呼ん
 で下さい、義忠ハ宜敷うございます……、オイ松本ッ、貴様俺
 れの部家へ行つて、休んで居る五人を皆来いと言つて呼んで来
 て呉れ、松本ハ「長りました」とポイイは下へ降りて行く、引違
 へて出て来たのは身の丈は五尺五六寸、屈竟な若者斗り、米
 國海岸の漁場で、練へ上げた身体でございますから、皆立派な
 体格の者斗り、義忠ア、諸君、何うも御若勞です、今船長に引會
 はしますから、一寸整列をして下さい……、船長、右の端しが
 杉田、其れから中村、秋父、熊田、井上と言ふ順です、金之ウム

然うですか、諸君、御苦勞だが何分大任を御頼みます、此日本
 丸、否無人島發見の成功も不成功も、一つに諸君の双肩に掛つ
 て居るのだから、呉々も御頼をして置く」と一寸頭を下げると
 中にも重立つた杉田大吉は、大言承知致しました、御心配は御無
 用に願ひます、能度勤めは果して来ますと、決然として言ひ放
 つた、杉金之助は喜び乍ら命之其れを聞いて安心した、何うか
 何分頼むよ」と是から五人は出發の用意をする、浮袋は兩脇に
 一つ宛、各々一本宛の細繩を腰へ纏り付けて、ズラリと甲板右
 手の方へ竝んで立つた五人の壯漢、義忠ア用意は宜いか、其れ
 一、二、三ッ」と未だ言葉も終らぬ内、〇「ヤッ」と斗りに身を
 躍らして海中へ飛び込んだ、五人の勇ましさ、船からは二百何
 十人の壯漢が、一度に〇「ワァッワァッ」と擧げたる應援の聲、
 此方五人の壯漢は、板手を切つて岸邊を臨み泳いで行く、難無
 く泳ぎ付いた人々は、無事に岸の側迄で来たの下をございますか

清村島の後

初此断崖、絶壁を登つて行くのが又大役だ、杉田と言ふのが下の四人を見返りながら杉田オイ皆ッ、俺が先に登つて行くか、ら、繩を引張ら無い様にして順々に登つて来いッ」と真先きがけに崖を登る、船からは二百人斗りの船員が船員萬歳ッ、杉田ッ、確固りやれッ」と引續いて應援の聲に勵まされて、熱心は恐ろしいもの、三四丈も有らうと思はれる険しい崖も、一番先きに杉田大吉は、ヤッとの事で登り上つた、引續いて四人の壯漢は、ッロくッロく上つて来た、是れを眺めた日本丸の甲板は、皆ッアッアッと言ふ鯨波の聲と共に、拍手喝采の聲を揚げ、杉田大吉、其他四人の壯漢は、細繩を手繰つて段々々々、さな綱を引き寄せ、其れを以つて此方の大岩へ確固と縛り付け、杉田オイ、綱を引けッ」と五人が大音聲に船へ呼はると、〇、オウ合点ッ」と此方甲板上の二百人斗りの船員は、力合して、オイ、一生懸命彼の大綱を引出すと、流石浮城の如

清村島の後

き大船も、次第に岸邊の方へ寄つて来る、其處をヒツタリ日本丸が此岸邊へ着しますと、直ぐ繩を付けて引揚げた繩梯子に仍つて、杉金之助以下百人斗りの船員、順々に島へ上陸した、其處で所々方々港の横な處を捜し廻つて見ると、其岩より二三十丁彼方の方に、大きな川が有つて、其川沿に少し港の横な入込んだ海が有つたから、更に命令を傳へて、其港口へ船を廻させる、其處で軍器、彈藥、其他諸器械、雜具杯を、ボーイに積載して是れを陸揚成し、船には二三人の火夫を止の置いたなりで、船員、火夫、水夫、ボーイに至る迄、スツカリ上陸をして仕舞ふ、其處で杉金之助は、人夫頭なる家木三藏と言ふ者に言ひ付けて、海岸を去る二三丁の堂へ長さ五間、巾二三間の堀立小屋を二十斗り建てる機に申し付け、外に天幕を十斗り、其内で自分の天幕と定めたる中へ、春枝、其他石使ひの女、杯を住はせ、外の天幕には事務所、賄部、其他の種々な事を、

皆航海長山下義忠に一任して置き、自分は三木、大村、其他重
 立つた者五六人と、壯漢百人斗りを引連れて、奥へへと進
 んで行つた、未だ正確に島の面積は斗つて見ませんが、凡そ吾
 が日本の臺灣位には有つて、土地は黒土で随分沃へて居る様で
 ございませう、見渡す限り草茫々と生へ茂つて、中には幾抱へも
 有る椰子や、棕栝、其他稀れには朱檀や黒檀杯も鬱蒼と繁茂し
 て居る、杉金之助の一行は、早や三十丁斗りも奥へ這入つて來
 たが、少しも山らしい物は見へ無い、後邊を振り返りながら金之
 助、金之、何うだ諸君、少しも山らしい物が見へ無い、後邊を振り返りながら金之
 ますると三木佐男、佐男、ハイ、海岸の組合から孝へても、山の無
 い筈は無いです、何うしたものでせう、併し奥の方には険し
 い山が有るのでございませう」と話しながら尙も奥深く進んで
 行かうとする、此時大村喜平は最前から頻りに鼻をヒョ付かせ
 て居たが喜平船長、何うも變です、金之、何が變なのだい喜平、ハ

イ、何うも變な臭氣がするです、何か居るのデア無いでせうか
 金之、ウーム然うかなア、此時三木佐男も、洋杖で頻りに草原を
 掻き廻しながら佐男、ウーム成程、妙な臭ひがする、蛇ヂヤ無い
 か知ら、何だか生臭いよ」と一人が言ひ出すと又一人、〇ウム
 蛇だ、ウーム、蛇に違ひ無い」と皆口々に叫んで居る、折りし
 も先登に進んで居た一人の水夫は、ハタ、ウームと駈け付け來り
 水夫、セ、船長、へ、蛇です、而かも大蛇です、金之、ウーム然うか
 今も蛇ヂヤ無いかと言つて居たのだ、何處だ、ウーム夫水、へ、彼
 方です、ア、那れです、と水夫が指差した方向を見ると、成
 程一抱へも有らうと云ふ椰子の木と、グルリ、と身体を卷き
 付けたる大蛇、而かも雌雄と見へて二匹の蛇、胴の廻りは三尺
 も有らうかと云ふ恐ろしい奴ッが、ジツと此方を睨み詰めて居
 る、杉金之助は急かす騒がす、後邊を振り返つて一同に打向ひ
 金之、諸君、斯んな小蛇の二三匹位ひは蹴殺して、も通る可きで

有るが、賭君も久して船窓に有つて、不聊に苦しまれたらうと察する、依つて聊か慰みの爲めに那奴ツを打ち殺さうと思ふ。故に此内より三人の勇士を募るから、吾れと思はん者は、此處へ出て此大蛇を退治るが宜からう」と昔道云はさす一同の中より躍り出した五六人の壯漢、○船長、何うか私しに其退治の御委任を願ひます、△イヤ船長、斯んな奴ツの五四や十四、是非私しに願ひます、○イヤ私しに……」と五六人の者が吾れ勝ちに願ひます、○イヤ私しに……」と五六人の難うございます」と皆々得物を携へて、身仕度を致して居る、大蛇も一行の成勢に恐れかた、鎌首を持ち上げたなりで、急に飛び掛らうとも致しません、中にも身の丈け抜群の壯漢一人は、日本刀を抜きかざして、面も覆らすバラツツと進んで行き、蛇の間層が二三尺の處へ来たかと思ふと、

大蛇の上顎目掛けて斬り下した、一匹の大蛇は急所の痛手に少しひるんだが、今一匹は夫の敵と思つたか、朱盆の様な大口を開いて、ズル／＼と身体を延ばすと等しく、只一呑みと彼の壯漢目掛けて飛び掛つて来た、待ち構へて居た他の五人は、得物を引提げて、三方四方より追取り圍み、一時に斬り込んで行つたので、流石の大蛇も数々の痛手に弱り果て、遂に血に漂よりて死んで仕舞つた、杉金之助は此体眺めて厚く五人の者を賞め、金之何うも君方の勇氣には感心をした、實は吾輩は此蛇を餌にして、諸君の勇氣を試して見たのだ、衆い、頼もしい、何うか此勇氣は何時迄も持つて居て貰ひ度い」と遂に大蛇の死骸は其儘にして置いて、又もや列を整へ、五六里も進んで行つたと思ふ頃、一同は俄に廣々とした野原に出た、無論草は茫々として生へ繁つて、彼方此方には處處に鬱蒼たる大木が宛然ら林の如くに立つて居る、此時大村喜平は望遠鏡を出して、熱心に行

清村島の後

手を見詰めて居たが喜平船長、此野原は随分廣いんですよ、左
様五六里廻りも有りませう、何うです、此處へ一つ住家を定め
ませうか、云ひますると三木佐男、早速に賛成して佐男然うだ
く、船長、此處に一先づ都を定め置いて、其れから方々を捜
した上、未だ宜い處が有つたら、早速其處へ代る事に致しては
何うでせう」と頼りに二人が勧めますから杉金之助、金之「ウム」
と暫く考へて居りましたが金之然うですな、成程、他に宜い處
を見出す迄、暫分此處を根據地として四方八方へ探險隊を出す
事に仕様」と一同の者に命令を傳へて、携へ來つた天幕を建て
野宿の用意を充分に致した、斯くして此杉金之助の率ゆる一隊
は、土地を掘つて窟を築き、平釜を掛けて飯の用意をする、十
人計りの人夫に云ひ付けて、彼の海岸より米、鹽、醬油、其
他日々入用の物を取寄せ、全体を六ツに分けて、四方八方へ探
險隊を出し、其内大工専門の者には、木を切らして家を建てさ

清村島の後

せ、壁を塗つて此島一体の役所の如き物と建て、杉金之助が島
長と成つて、其下には航海長の山下義忠を副島長とし、全島を
二ツに分けて、一方を東部一方を西部と名付け、東部長には三
木佐男、西部長は大村喜平を任命し、全島の探險長として所々
城三之助に任し、其れには人夫、船員等百人を付屬させて所々
の金鑛、鑛山、森林、漁業、其他の事を調査致させまします、
却々澤山金目の物が有ると云ふ事が判つた、杉金之助は大に喜
び乍ら、建て上つた島の役所に自分は日々出勤を致し、三木佐
男、大村喜平、宮城三之助を督勵して、殖産、農業、鑛山の途
を開き、家を建て道を開き、港を築き日夜管々として働いて居
る内に、早や春又秋を重ねて、杉金之助が此島を見出して以
何時しか二年目の春を迎へたのでございませう、此時に山下義
忠、三木佐男、大村喜平、宮城三之助の連中が、一生懸命に事
を計つたので、今では土地を拓く事業も大に捗どり、田畑には

稲や麥杯が澤山に植へ付けられ、山には澤山の果物が、秋にで
 も成れば其果物で赤く成る位ひ、運河は縦横に掘られ、道路は
 八方に通じ、海岸には港を築いて、今では外國船も横々入港す
 る様に成つた、其他建築物はブラリと彼の廣野に並び立て、
 野原を見事な出来無いと云ふ有様、其他には所々の鑛山から
 堀り出す金銀、ダイヤモンド、寶石、紅玉、海には澤山の漁獲
 と、海底には驚く可き大きな珊瑚、其他鯨杯が取られて、此島
 から取れる物産の内、年々西洋諸國へ輸出する金高は殆ど三四
 百萬圓其内の二割を取つて年々日本政府へ軍資金の豫備として
 献納する事に成つた、其内に杉金の助は此島を、日本國に故縁
 で大和島と名付け、其島の一番高い處に一本の大木を植へて、
 其木に大日本帝國領地と筆太に書いて、是れを深く彫り込んだ
 其内に吾日本政府より數多の威状を、杉金の助に對して下した
 る、金之助は大に是れを名譽として、斯く成功の報を本國島村

清の處へ申して遣る、島村清も丁度此手紙の着いた時に、歐州
 漫遊を終つて無事日本國へ歸り、其功に依つて陸軍少佐に任せ
 られた時で有つたから、重ねくの大喜びにて、懇篤なる賞賛
 状を大和島へ送る、斯くして暫くは何事も無く暮して居りまし
 たが、其内に年改まつて明治三十七年の春、彼の日露戦争が起
 つたが爲めに、島村清、杉金の助の兩人は、如何なる働きを致
 しまするか、一寸御免を蒙りまして、次の一席より申上げる事
 に致します………

第十一回

時は維れ明治三十七年二月拾日の朝未明、仁川沖に轟然として
 鳴り響く砲聲は、是れ吾海軍大將東郷平八郎君が、彼の露西
 亞艦隊の朝鮮近海碇泊を、砲撃して遠く旅順港口へ追ひ退けた

清村島の後

る事にございます。續いて吾大日本帝國、大元帥陛下よりの宣
 戦詔勅と成り、愈々日露交戦の端緒が開かれた。是れより先き
 本書の主人公たる島村清に於きましては、前年、即ち明治三十
 六年十一月、吾、陸軍省より電報を以つて、急に歸朝す可き命
 令が下つたから、島村清は早速仕度を整へ、其年十二月に三年
 振りて愈々日本國へ歸朝致しました。其處で陸軍省よりは、島
 村清を陸軍歩兵少佐に狂じ、第一師團參謀部付きを命せられる
 斯くして毎日、島村清は陸軍第一師團參謀部へ出勤致して居
 る内、明くれば明治三十七年二月初旬、別れて既に十年の星霜
 を経たる親友、杉金之助より手紙が来たので、さいいます。清は
 親友金の助の成功を吾事の如くに打喜び、妻の綾子にも此話し
 を致し、互に杉金の助の評さ杯を致して居る。又島村清の義兄
 即ち杉山弘行は、清國營口の領事に赴任して居る處が未だ始末の付
 結婚をして、清國營口の領事に赴任して居る處が未だ始末の付

清村島の後

いて居無いは、彼の洋妾お幾、今は松山家の仲働きお千代と
 共に、眞實しく松山家にて働いて居るが、是れも近々の内
 島村清が使つて居る畜生、肉身の弟岩村恭一が外務省にて外交
 官の試験を受ける事に成つて居るから、試験が都合宜く行き次
 第、一家を借り受けて其方へ引取る事に成つて居るから、島村
 清も大に安心をして、日々精勤をして居ります。處か前申し上げ
 ましたる通り、二月十七日仁川沖の海戦より、日露間の戦争と
 成り、第一師團は二月廿日、愈々戦地へ出發の命令が下りまし
 た、一師團付き將校、下士卒の喜びは如何斗り、皆々喜色満面
 に現れて欣喜雀躍、隊中は其評さで持ち切りと言ふ有様、島村
 清も其日は種々の準備に忙がしく、夜に入つて後馬に跨つて歸
 つて來、四谷坂町の家、馬丁の留吉が表門口より、留吉御歸りッ
 と言ふ聲に、玄關へ出迎へに來たのは妻の綾子、松山家未亡人
 静子、續いてお幾、其れに書生の岩村恭一、綾子御歸り遊ばせ

お慶御歸り」と言つて居る内に、ツカ／＼と立關へ這入つて、
 来た島村清、清オ、御母様、愈々今晩出發する事に成りました
 から、御喜び下さい、實は今も歸れ無いと思つて居たのですが、
 一寸の隙を貰つて歸つて来たのです」と立關口へ突立つた儘、
 言葉短かに話しをする、豫ねて覺悟は致して居たる未亡人静子
 妻の綾子も今更の如くに驚きました、流石は軍人の妻女丈に
 有つて、却々騒ぐ様な事は無い、静子、オヤ然うかい、其れはマア
 御穿出度い、併し一寸位は宜んだらうから、マア上へ上つて
 暫く休んだら何うです、清イヤ御母様、何うして其んな時間
 無いのです、是れで御別れ申します……オイ綾子、不在中は萬
 事お前が氣を注いで、巧く家をやつて呉れ無きア困るよ、綾子ハ
 イ其れはモウ充分承知して居ります、及ばす乍ら妾しも、御不
 在中は御母様も御相談をして、決して御心配は御させ申しま
 せぬから、何うか御安心を願ひます、清ウム、其れで私も安心

だ、其れでは御母様、何うか願ひます、お幾、お千代、岩村
 お前方も何うか不在中宜敷く頼んで置く」と言ひ捨て、呉れ、留吉ハ
 再び表へ立出で、遺オイ留吉、御苦勞だが引返して呉れ、留吉ハ
 イ宜うが、其れでは誰方も御免成せエ」と留吉も同じく暇乞
 ひをして、馬の轡を取ると、ヒラリ馬上に跨つた島村清、ハイ
 ヨツと一鞭當てるや否や、馬は宙を飛んで参謀部へ歸つて来る
 是れから後乗船の場所、又は兵員の數、上陸地点杯を申し上げま
 しては、軍隊の秘密を現す事にも相成り、又餘り面白くもござ
 いませんから、此處には略して置いて、是れより島村清の勳功
 談に移る事に致します、第一師團、即ち島村少佐の屬する一軍
 は、遼東半島の或地点に上陸致して後、第五師團と聯合して金
 州城を陥落し、引續いて海軍と聯絡を通じて、露國が海軍の根
 據と頼んで居る、彼の旅順港を攻撃する事に成つたのでござい
 ます、處が旅順港には遠く露西亞本國より、西比利亞鐵道に依

清 村 島 の 後

つて、幾萬の軍隊及び糧食を送つて来る。其上に西比利亞鐵道の
 の路道に架したる電信線に依つて、露國參謀本部の命令及び
 此方からの通信も、怠らす致して居るものでございませうから、
 幾何勇猛なる海軍と雖も、何うしても旅順口及び通信の道を絶たね
 る事が出来無い、何うでも此軍隊輸送及び通信の道を絶たね
 は成らるのでございませうが、何しろ露西亞政府は清國政府に對
 し、九十九年間借用の條約を結び、永遠に此旅順口を東洋に於
 ける海軍の根據地と定めて、其意氣込みを以つて作つた鐵道、
 電信ですから、普通通りの事では却々其途を絶つ譯には参りませ
 ん、此時第一師團長伏見宮殿下、第二師團長野津大將閣下に於
 かせられても、種々御心配に成つて居られますが、別に是れ
 と言つて宜い御考へも浮ば無い、空しく金州城外城内に營
 して、二三日の日を過されて居る。第一師團第一聯隊、第二大
 隊長島村少佐は時しも五月十八日の午後十一時頃、金州城外三

清 村 島 の 後

里と言ふ、明樁屯と言ふ處に天幕を張つて露營を致して居りま
 したが、モウ此第一師團も、既に茲數日の内には否でも應でも
 旅順口へ對して進撃せねば成らぬのですから、島村清は天幕の
 内に只一人粗末な机を前にして、頻りに軍用書類を取調べて居
 る處へ、佩劍の音をガチャ／＼言はせ乍ら退入つて来たのは、
 是れが島村清の卒ゆる大隊中の勇士と呼ばれたる、第二中隊長
 島海健三と言ふ陸軍中尉でございませう、島海中尉は這入つて來
 るや否は島海大隊長ツと言ひ乍ら、直立不動の姿制を取つて
 擧手の禮を施した、島村清はヒョイツと頭を揚げて見ると、豫
 て自分の部下として、將來見込みの有る奴つたぞ、大層可愛
 つて居る島海中尉でございませうから、清ウム島海か、何うだ、
 此夜更けに何か用でも有るのか、島海ハイ大隊長殿、別に用事な
 言ふ譯でもございませうが、餘り此頃の軍令が緩漫こしい様な
 心持ちがして、其れが爲めに今日も何うしたものか、癡付かれま

清村島の後

せん、其れで御話しに上つたのです。清ウム然し鳥海、お前は軍令が緩慢な言つて居るが、其んな事を言つては不可ぬよ、上官の方々も大變に其れが爲めに心配をして居られるのだが、今それと言つて仕方が無いから、静として居るのだ、お前等の身分で軍令を免や角言ふのは宜く無い事だ、屹度謎むが宜いよ、鳥海ハイ、誠にれ濟みません、清イヤ、決して谷めるのでは無い、併しお前の言つて居るのは、當第一師團全体の心たらうア、思ひ起せば遠く樺太掠奪以來、近くは遼東半島遺付の此方、屈辱に屈辱を重ね、遺恨に遺恨を加へた敵國で有り乍ら、只此旅順港一ヶ所の爲めに、數萬の軍隊が空しく腕を撫して居ると言ふのは、誠に残念な事だ、實にお前の言ふのは無理は無いぞ、鳥海ハイ、大隊長殿、何うも残念です、清併し鳥海、マア、茲二三日間待つて見ろ、其内には何か面白い事が有るだらうから、併し外は月が出て居るか何うだ、鳥海ハイ、朧月が出て居り

清村島の後

ます、古歌に「照りもせず雲りも果てぬ春の夜の、朧る月夜にしく物を無き」とか言つて、風流な物だと言ひますが、吾々は無骨な性質だと見へて、面白くも思ひません、清然うたなア、是れでも日本の國に居る時は、夜櫻杯を見に行つて、月が出て居ると却々宜いものだが、満州の月では仕方が有るまい、併し鳥海、露營を点検かた、其處等を少し歩いて見様で、は無いか、鳥海ハイ、御供致しませう、其處で鳥村清は書類を自分め、ク、と地圖杯と一緒に巻いて机の抽斗に納め、自分の從卒を呼び、清オイ米田、俺れは少し散歩して来るから、暫くのの間番をして居て呉れ、其機の抽斗には、重要な物が退入つて居るんだから、必ず油断をしては成らんぞ、米田ハイ、畏りました、と從卒米田、藤太郎は、天幕の入口に銃を構へて、四邊に氣を配つて居る、此方鳥村清、鳥海中尉の兩人は、何か小聲で話しを致し乍ら、彼方、此方に露營の天幕を見廻り、清何うだ、鳥

後 島 村 清

海、俺れも随分不風流な生れでは有るが、此臘月を見ると日本
 の事が思ひ出されて、何だか懐かしい様な心持がする様だろ
 烏海、左様でございませう、昔し不識庵武田信玄は、川中島で上
 杉謙信と戦を交へた時、或夜月を眺めて詩を賦したと言ふ事を
 聞いて居りますから、如何なる猛將勇士でも、人の情には變り
 の無いものでございませう」と今しも二人は話し乍ら、途の四
 五丁も此方へ来たと思ふ途端、後邊の方に當つて、ドッドーン
 と響き渡つた鐵砲の響き、ハツと驚いた島村清、清島海、今
 のは確かに鐵砲の響きだが、一体何うしたのだらう烏海、ハイッ、
 ナア何うしたのでせう、清オイ烏海、何が何でも今の音は確か
 に俺れの天幕の近くに相違無いッ、ソレ續けッ」と島村清は、
 佩劍の柄に手を掛け乍ら、元來し途へ一目散、宙を飛んで駆け
 出した、續いて烏海健三も、全じく佩劍の柄に手を掛け乍ら、
 烏海、スワ一大事ッ」と是れも續いて韋駄天走り、ドッど斗りに

後 島 村 清

駆け出した、此時遅し彼の時早し、續いて又もやド、ド、ド
 響き渡る鐵砲の響、駈け乍らに島村清は、清オヤッ、又響つた
 ナ、ハチ何だらう、敵が寄せて来たのなら、一發や二發の鐵砲
 を撃つ筈が無い、又斥候兵でも狙撃した鐵砲なら、呼子の笛で
 り吹く筈だが、可訝しい組合だッ」と思ひ乍ら島村清は、半丁
 斗り此方に戻つて來ると、ヒタリ足を止め、身を草原の中に秘
 めて、シツと向ふの様子を窺つて居ると、折りしもの臘月で、
 充分の事は判りませんが、丁度島村清が露營をして居た天幕の
 外に、鐵砲構へた從卒が、隘路、四邊を見廻して居る様子だ
 から、ホッと安心をした島村清、清オイ烏海、今の鐵砲は誰れ
 か、愚戲をしたのだらう、俺れの天幕には何の事も無い様だ、
 烏海、へい、私しも先刻から透して見て居まするけれど、別に是
 れと言つて怪しい事も無い様です、向ふに立つて居るのは今の
 從卒でせう」と言つて居る奴ッを取にも入れず、島村清は何か

後 島 村 清

訝しき物でも見出したか、暫く黙止つた其儘に、
 めて向ふの方を見て居りましたが、清オイ鳥海、
 大變が出来た
 ら、俺れは事に依つたら國へ申譯の爲めに切腹でも仕無
 くらぬが鳥海へエ、其りア何うして、清ウム鳥海、
 那れを
 見い那れを……、今俺れの天幕の外に立つて居るの
 は、那りア
 從卒チア無いが、充分な事は判ら無いが、支那人に違
 ひ無い、
 鳥海「エツ支那人ッ……、大隊長殿、其りア大變ですな、
 那の天
 幕の中には地圖や書類が這入つて居るのでせう、清ウム
 然うた
 秘密地圖や秘密書類は何時身につけて居るが、那處の
 机の抽
 斗へ入れて置いたのは、普通の書類や地圖だから、強
 いて軍
 の秘密に關する物では無いけれど共、其れかと言つて
 全く必要
 な書類斗りでも無い、其れをムザく盗まれると言ふ様
 な事
 は、俺れは何共申譯が無い、併し那の支那人は可訝な
 奴ッだナ
 別に逃げ出そうとも仕無いで、ウロウロして居るのは、
 何うし

後 島 村 清

たのだから鳥海「ア何うしたのでせう、清オイ鳥海、
 お前は其
 方から廻つて那の支那人の後邊から追駈けて見ろ、
 俺れは此方
 から行つて、兩方から挟み討ちにして引捕へて遣ら
 う鳥海「ハイ
 長りました、清成る可く向ふへ氣取られぬ様にせ
 なければ不可
 んが鳥海宜敷うございます」と鳥海中尉は、足音を
 忍ばせて草
 原を匍ひ乍ら、天幕の後邊側へ廻つて行く、此方島
 村清に於き
 ましては、是れも足音を忍ばせ乍ら、ソロソロと
 彼の怪しき
 支那人目蒐つて進み寄る、今しも島村少佐は、支
 那人を去る七
 八間此方迄来て、臙月の影に向ふを透して見ると、
 僞方無き
 長身、肥大の支那人二人、四邊をジロジロと睨め
 廻し乍ら、俯向
 いて何かコンコン致して居る様子、ハテ何たら
 と思つた島村は
 向も臙を定めて透して見ると、其天幕の外には二
 人の死骸が横
 倒つて居る、一人は彼の從卒に透ひ無いけれ共、
 外の一人の死
 骸は誰れたらうと、愈々分ら無く成つた儘、
 シツと鳥海中尉の

委が見へるかど、向ふの方を眺めると、折しも天幕の後邊側に
 ズツタと立つた鳥海中尉、時こそ宜けれど島村清と立上
 ると其儘に、バラ／＼と飛鳥の如くに彼の怪しき支那人に
 り掛り、清「コリヤツ」と一聲彼の支那人の襟首グイツと引
 むが否や、肩に擔いだ岩石落し、一間斗り彼の方へ、ドツと
 斗りに投げ付けた、然るに不思議や彼の支那人は、投げられ
 らにヒラリ身を翻がへすと等しく、パツと其處へ突立つた、
 かさず鳥海己れツと躍り掛つた鳥海中尉、突然り彼の怪しき
 支那人の襟首グイツと引掴んだ一刹那支那日本大人、マ、待
 宜敷いツと彼の支那人は、鳥海中尉の利腕グイツと引握つた
 鳥村清は餘りの不思議な支那人の舉動に驚き乍ら、ツカ／＼と
 と進み来り、清貴様は一体何者だツと一喝一聲怒鳴り付ける
 と、彼の支那人は、ツと臆月に島村清の顔を眺めて居りま
 したが支那ヤツ、貴様は島村チア無いかツ、俺れだ／＼と

第十二回

パツと鳥海中尉の手を振り放ちて、佩剣に掛けたる島村清の右
 の腕を握つた、サア此怪しき支那人は、果して何者でござい
 せう、又此場の納りは如何相成りませうや、一寸御免を蒙り
 す……。

今しも彼の怪しき支那人は、島村清の右の腕を握り、
 支那ヤツ島村無事かツ、俺れだ杉だツ、俺れだよ島村、俺れ
 だツ、聞くより島村清も、ハツと胸騒し乍ら、隙月の影に彼の
 支那人の面体を見詰めたが、夢か現か拾年以前、遠東還付の事
 を憤慨して、遠く天外萬里の南洋に去り、本年二月中旬に、
 し振りの手紙を寄越したる、兄弟も及ばぬ親友、杉金之助に
 ひ無いから、パツと杉金之助の腕を握り返し乍ら、思はず兩眼

後 島 村 清

の涙ハク、聲迄震へて、清オウ杉かつ、ド、何うして此
 戦地へ来た。宜く来た杉ツ、宜く来て呉れた、何うしたのだ此
 姿は……と言ひさしたなりで、暫く兩人共、無言の他に打過
 ぎる、此時島海中尉は譯が判りませんから島海大隊長殿、全
 是れは何うしたのです。清オ、島海、此の男は休戦軍中尉で
 貴様も知つて居るだらうが、思ひ起せば拾年前、彼の日清戦
 役後、遼東半島還付の事に憤慨して、遠く南洋に去り、無人島
 を發見して、今大和島を建設して居る俺れの親友、杉金之助
 ぶ者だ、必ず怪しい者では無い島海エツ、其れでは此方が杉
 之助君ですが、清オウ然うだ、決して怪しい者では無い、貴
 は暫く歸つて休んで居るが宜い、俺れは少し杉と話しが有
 から島海、ハイ畏りました、其れでは御免を戴ります」と島
 尉は擧手の禮も施したなりで、向ふの方へ歸つて行く、島
 は其姿を見送つた後、手を取つて天幕の中へ杉金之助を引
 入れ

後 島 村 清

乍ら、寝臺に腰を掛けて、清オイ杉、君は其腰掛けへ掛けて呉
 れ」と今迄自分が掛けて居た椅子を指差したから、杉金之助は
 金之「ウム」と言ひ乍ら其れへ掛けた。清時、杉、久し振りだつ
 た、金之「ウム」久し振りだ、併し君も無事で先づ芽出度い、清ウ
 ム、アア身体丈け丈夫だ、併し杉、何うも合點の行か無い今夜
 の次、全貴様は何うして此處へ出て来たのだ、金之「オウ、譯
 を言へば判る事だが、併し其れは後廻しとして置いて、僕が今
 夜此處へ来た用事と言ふのは、吾が大日本帝國の軍隊へ、粗食
 を送らん其爲めに、此處迄出て来て見る考へて、向ふの山の
 へ身を匂ひ乍ら、そつと日本軍隊が露營の天幕の様子を窺つて
 居ると、僕より半丁斗り先きに立つた一人の男が有る、是れも
 同じく忍んで来た物と見へて、此向ふの草原に腰を屈めたなり
 で、此天幕の方へ忍んで来るチア無いか、處か月は前面に朧ろに
 出て居るので、向ふの姿は能く見へるが、此方の姿は向ふに氣

が注か無い様子だから、僕もハテ怪しい奴だナと思ひ乍ら、其後を付けて来て見ると、此天幕の後邊側に秘と忍び寄つた其男は、立番の兵の油断を見計して、衣着に有つた短銃を取り出し、後ろから其立番兵士に視ひを定めて、ドンと一發撃ら殺して仕舞つたのだ。清フツ金之僕は是りア敵軍の奴ツに違ひ無いと思つたから、其場で直ぐに取押へて遣らうかと思つたものよ、待つて待つて居ると、彼の怪しき一人の男は、秘と天幕の向ふへ忍んで行き、人無きを見定めたか、突然り天幕の中へ駆け入つて、今度出て来たのを見ると、片手に何か紙の巻いた様な物を携へて居るぢア無いか、而かも其れが支那人の服装でそして居るが、偽ふ方無き赤髭だよ。清フツム、其れから金之其れで僕は、ア此奴ツア露探だナツと思つたから、秘と倒れた番兵の鐵砲を取つて、其赤髭を一撃の許に撃ち殺して遣つて、其書類は取り

上げたのだが、其書類を返す事が出来無いから、誰れか早く此處へ戻つて来れば書類を返し、其上糧食の事を話して置かうと思つて待つて居た處へ、突然り君が飛び出して来て、僕を投げ飛ばしたのだ、サア其書類は君に返すから、改めて受取つて呉れ。是れを聞いたる島村清は、渣ア、有難い、君なればこそ此書類が僕の手に返つて来る、萬一此書類を盗まれる様な事が有れば僕は一切腹して申譯を仕無ければ成ら無い、何うも有難い、其れで事情はスツカリ判つたが、君は一体此滿州へ、何んな譯があつて来て居るのだ、君が南洋の大和島から寄越して呉れた手紙は、確かに僕が出征する五六日以前に受取つて、毎日妻綾子と共に、君の噂さをして居たのだ、併し今此處に立つて居た番兵は、モウ死んで仕舞つた様子か金之ウム、僕も何うかして救けて遣り度いと思つて、種々と介抱をして見たけれど、肺部に重傷を負ふて居るから、到底も助かる見込は無い。清フツム

然うか、其れは可愛そうな事をして仕舞つた、其れでモ一人の西洋人も、モウ救から無いが金之ウム、是れも一發で倒れた、モウ多分救かるまい、清併し露探だとして見ると何か重要な物を持つて居るかも知れ無いから、一應捜して見様、金之ウム宜からう、と二人の者は、蠟燭に火を点して天幕の外へ出て来て見ると、從卒は早や既に冷たく成つて居る、杉金之助は彼の倒れて居る支那服を翻つた西洋人を、襟髪に手を掛けて引き起し乍ら金之ウイ島村、是れもモウ駄目だ、其れに何も書類杯は持つて居無いが、清其れでは萬一の事を斗つて、必要なる物は皆置いて来た物と見え、此從卒の死骸は明朝僕が部下の者に申付けて埋めて遣る事にするが、其奴ツは其處へ捨て置けば、吾軍の手で何處かへ埋葬するだらう」と言ひ乍ら、島村清は何の氣も無く、ヒヨイツと彼の杉金之助が引き起した西洋人の屍骸の顔を見て居たが、何か思ひ當る事でも有つたのか、清オヤツ、杉

ッ、其西洋人を僕ア知つて居るがッ、金之何にッ、君は此西洋人を知つて居るのか、清ウム、確かに其奴ツは、目印しがある、鼻の横手に少し斬傷があるだらう、金之ウム有る、其時、日光見物をした、其奴ツは僕が未だ士官學校へ入學の當時、日暮も知ら無、其歸りの流車中で、今の僕の妻綾子、其當時は未だ何も知ら無、其内だつたが、無禮な事をした物だから、撲り付けて遣つた事がある、其れから僕が洋行する時分に、孰かから船に乗つた事、船長が其奴ツだ、金之フム、其リア妙な因縁だから、清まだ妙な事が有るのだ、と是から其船中の大活劇より、及び今其お幾と言ふ洋港に於いて、洋妾お幾を取押へたる事、及び今其お幾と言ふ洋妾は、島村清が使つて居る書生岩村恭一の姉で有つた、其縁に依り、今では島村清の家を奉公をして居る一條を、言葉短かに物誠に、天の配合の面白い處だ、金之ウム、然うか、所謂是れこそ佛

法の所謂因縁だナ 清其れは此奴ッは僕が乗つて居たエラスミ
 ック號で浪花艦から撃出した大砲の爲めに、今迄命を陥した
 事と斗り思つて居たが、悪運強く何人から救け上げられ、今日
 迄生き永らへて居たものと見へる、其れで悪事も未だ仕足ら無
 かつたか、斯んな露探杯をして吾軍に不利益を與へるとは、憎
 んでも尙ほ飽き足らざる奴ッだ、君は能く此奴ッを撃殺して呉
 れた金之何アに、僕も其んな事と知らずに撃ち殺して遣つたの
 だが、其れでは國の爲め、又一つには君の敵を討つた様なもの
 だ、清ウムマア然うだ、然し杉、マア兎に角這入つて君の話
 しを聞かう金之ウム、道入らう」と二人は又もや天幕の中へ這
 入つて参り、元之如く各々腰を打ち掛け乍ら、改めて島村清は
 清其れで君に手紙を貰つた其月廿日、遂に僕は出征したのだ
 が、君は又何うして其んな姿で此滿州へ入り込んだのだ、僕
 矢張り君は南洋の大和島で、吾が日本國の爲めに利益有る働
 き

をして居る事だと斗り思つて居た、其れが此處で逢ふとは實に
 意外だ金之ウム、島村、是れには種々譯有るのだ、思ひ出せ
 は本年二月中旬、或る日本の商船が南洋の太和島へ寄港の際、
 今日日本では歐州の強國と言はれる露國と戦争を開き、既に仁川
 沖の海戦が動機と成つて、既に宣戰の詔勅迄も下つたと云ふ事
 を聞いたのだ、素々僕が亞米利加より、南洋諸島の無人島探險
 に行つたのも、始のはと云へば皆今の敵國たる露西亞の爲め、
 其れに空しく本國の大事を聞きながら、安閑として南洋に居る
 と云ふのは、日本男兒として耻づる處と思つたから、大和島は
 副島長の山下義忠と云ふ者に任して置き、僕に妻の春枝を引連
 れて、他に五十人斗りの部下を連れ、本年四月十日無事に長崎
 港へ着し、其れより汽車に搭じて廣島迄歸つた處、豫て僕が先
 年日本に居て軍隊の飯を食つて居た時に、懸意にして居た橋中
 佐が、現日本國の豪傑頭山滿、外務省の名士山笠圓次郎先生等の

主稱にて、或日本陸軍中將、及或少將の後援を得、日本義軍を編成し、名は陸軍通役官と云ふ名義の許に、千人斗りの同勢が、彼の満州へ出發すると云ふ噂を聞き、妻の春枝は廣島の同勢、或る宿屋へ残して置き、從つたる五拾人斗りの同勢と共に、其橋中佐に願つて其義軍中に加り、吾が第一軍、第二軍の參謀部と連絡を通じ、一に敵軍の密行、強行の偵察、二に兵站部の攻撃、三に敵軍の連絡を絶ち、四に側面乃至背面の大突撃を成す事、に成つて、今迄僕等の盡したる所は、鳳凰城、まひ此金州城で有るが、二三日前に僕の率ゆる一隊が、露軍の側面より突撃し、兵粘部を騒がして其騒ぎに乗じ、奪ひ取つたる兵糧、彈藥軍用金貨を、吾が軍に送らんとして、僕が今日此地に忍んで來た處が、今の有様、オイ島村君、僕の話しと云ふのは斯んなものだと始めて聞いた日本義軍の働き、島村清、聞く事々に驚き、清、杉、ア、杉君、流石は日本男兒の君だ、能くも

其れ丈け働いて呉れた、僕も豫て或筋より、日本義軍の有る事は聞いては居たが、其義軍の一方大將が、君で有らうとは知ら無かつた金之ツム、然し僕も未だ澤山用事を控へて居る身体だから、何時迄も話しをして居る譯には不可無い、併し島村君が居れば丁度幸ひだ、明日午前七時を期し、此回ふの山を越すと、柳架屯と云ふ一寸した處が有る、途は一里斗りも有るが、其處に其糧食や軍器が積み上げて有るから、其時間迄に必ず取りに寄越して呉れ、却々澤山の品物だから到底も一大隊位ひの兵では運び切れまいが、二大隊斗りも寄越して呉れさへすれば車輪も其儘にして有るから大丈夫だ、清ツム其れは何うも有難う、僕には日本國を代表して、君の働きを感謝するよ、金之何アに國民として盡す可き事を盡した次第だ、決して禮杯には及ばない、其れでは島村、命が有れば又重ねて居るのだから、其名が出版は

僕だと思つて呉れ、其れでは是れで別れるが、清ウムと島村清は、何やら頻りに考へ込んで居りました。是れから何處へ行く金之ウム僕か、僕は是れから數十里北へ取つて、雅兒河附近へ行つて、或る重大なる任務に服さねば成らぬ。今一擧こそ吾が軍の死活に關する大事で、事は成ると成らぬの二途にして、其一途は……、オイ島村、只一死有るのみだ。清ウツ、其れでは杉君は雅兒河へ行くのか、雅兒河と云やア、西比利亞鐵道の太鐵橋の有る處では無いか、金之ウツ然うた。清ウツ、然うか、オイ杉君、吾々が空しく此處に駐屯仕無ければ成らぬと云ふは、實に其鐵道有るが故だ、君を送るは生別にして又死別を兼ねる物、到底再會に期する事は出来ぬが、國に報する只一死有るのみだ、杉君、確固し頼むが、金之ウツ島村ッ、古へ蒙古の大軍十萬の兵、吾が神州を犯さんとして、筑前多々羅濱邊に押し寄せた時、突然起つた神風は、流石十萬の大軍も

全滅して、生還した者は僅に三人たつた。云ふでは無いか、吾が日本男兒には、天佑と云ふ物が有るから、誓つて此大任務は遣り遂げて見せるが、明日か、遅く共明後日の快報を聞いて呉れ、清ウツ、杉君、何うか頼むが、モ一度君の顔が見度い、此方へ來て呉れ、金之ウム島村、僕も君の顔は今日が見納めだらうと二人は互に寄り添ひ乍ら、ホロリと落す血の涙、流石鬼をも恐れぬ我勇士も、今は堪らなく成つたか、互に固く手を握り、めづら、暫し言葉もございませぬ、其内に月は段々西の山の端に傾いて行く、杉君の助は、涙を拭ひ、金之島村ッ、何時迄経つても名残りは盡き無し、僕が行くが、何うか身体を大切にしてくれ、呉れ、清ウツ、杉君も身体を大事にし、金之ウツ有難う、其れでは島村、清ウツ、杉君、余之左らばだッ」と叫ぶなりで身を翻すよと相見へたが、其儘彼方の山頂を差して、一目散に駆けて行く。應て杉君の助は山頂に達した時分に、ヒョイツと此方を振

清村島の後

平原を包んで仕舞つた、處が彼所の高地より驀然と馬を乗出し、

清村島の後

て来た四名の支那人、此鐵橋の此方迄來ると、云ひ合した様に

一方の木の影にシツと身を秘めて、此方の大人と呼ばれた一人は、
 つて居る、此時夜の茫々際涯無き大蒙古の淋しさを破つて、遙
 か彼方の方より一道の光りが尖くよと相見へたが、忽ち森々と
 し、進行し來つた西比利亞鐵道の列車、宛然ら長蛇の空を飛ぶ如
 き勢ひを以つて、此方を差して進行して來る様子、是れを眺め
 た和大人、氣が氣ア無い和太オイ、溝口、益本、まだか
 向ふから汽車が進行して來た、此汽車が來る時分には、此向
 ふに露營をして居る露西亞兵は、皆此山上より鯨波の聲を擧げ
 る事に成つて居るから、其う成つたら萬事止むたぞ、オイ未だ
 かツと聲を秘めて聲を掛けた、此時鐵橋の下側に身を秘めて
 一生懸命作業に従事して居た溝口、益本の兩人、兩人ハイ、今直
 ぐです、一寸待つて下さい、今です和太オウ早くして呉れ、
 ウ汽車は一丁斗りの處に來た、兩人ハイ今ですと云ふ内に、

列車は轟々として、猛兎河の大鐵橋へ掛つて來る、此時鐵橋の
 下に在つた二人の者は、パラッといふと堤防上へ飛び上つて參り
 兩人ハイ和大人、早く導火を願ひますと二間斗の導火の先
 端を、和大人の前に差出した和太オウ御苦勞だッ」とバツと
 寸を摩つた一刹那、列車は大鐵橋の中央迄進行して來る、時こ
 と來れど和大人、燐寸の火を導火へ点じたかと思ふと、バチッ
 バチッといふ火花を散らし乍ら、火は導火を傳つて、ダイナマ
 イトの方に傳つて行く和太オウ、溝口、益本、一生懸命に逃げ出
 せッといひたり馬背に跨がつた、心得たりと溝口、益本、續い
 て馬背にヒラリ跨つた其途端、此方堤上の方に當つて、ビリッ
 といふと吹き出す呼子の笛、續いて彼方山上に現れた一隊數百
 の露西亞騎兵隊、此時此方の列車は、轟々たる音響と共に、早
 や汽鐵車は彼の鐵橋を渡り終らんとするの刹那、ドンドン

グワラ、メリ、ツ、ツと、宛然ら天地も震動する
 斗りの大音響を發して、哀れや露西亞政府が九十九年の借換の
 爲め、其計畫を以つて架したる大鐵橋は、彼の和大人が一導の
 ダイナマイトの爲めに、バラ、ツと碎り落ちた、續いて
 悪蛇の如き大列車は、精銳なる世界一と自ら誇りたる露兵を滿
 載したる其儘に、何十丈とも知れざる雅兒河の上流、岩石峨々
 たる急流の中へ、ド、ドン、バリ、ツと墮落した、此方
 和大人の一行四人は、四人大日本帝國萬歲ッ」と、大萬歳の聲を
 跡にして、雲を霞と逃走する、彼方山上に現れた露兵の一隊は
 今しも天地を震動させて破烈した、谷底深く墮落した其有様に
 を進行して居た延々たる列車は、谷底深く墮落した其有様に
 を潰し、斬くは呆然として眺めて居りましたが、未だ燃へ残る
 火光の爲めに、彼の逃げ出した四人の姿を認められたから、
 ツ」と云ふ一令の許に、何百人と云ふ騎馬兵は、山下を目掛け

第十三回

て飛ぶが如くに彼の四人の跡を追駆けたが、何時しか彼の四人
 の者は、間に包まれて其儘に、姿は彼方に消へ去つて仕舞つた
 是れは實際有つた話してございまして、余は日本武士なり、絶
 叫して、空しくハルピンの露と消へ、強き百萬の荒鷹を挫ける
 横川沖、二勇士の同志にして、後此滿州義軍が、東昌臺の夜
 襲に利無く、志士安永東之助が空しく敵弾に倒たれる當時の状
 況を、同じく志士の内藤井龍一郎と言ふ人が携へたる手帖に書
 き止め、後年此書は高貴の御方に御覽に供へたと云ふ事で
 さいいます、併し是れは後の御話し、愈々是れより島村清が、吾
 る軍の爲めに身命を賭して使命を全うすると云ふ、最も壯烈極
 る御話しに移るのでございしますが、一寸一服致します……。

露國が海軍の根據地と頼んで居つた旅順港は、吾が勇猛なる閉塞隊の爲めに全く鎖されて、五千噸以上の船は出入りの出来無
い事に成つた、軍艦は無論通行する事が出来ません、宛然ら
爲めに港内深く潜んで居つた大小の軍艦二十何隻は、宛然ら
の鼠の如く、坐ながらにして自滅する外は無く成つて仕舞つた
殊に敏穩なる海軍の活動と共に、吾が第一師團第四師團の二
個師團は、遼東半島の或る地点に上陸して、直に敵軍を撃退し
た後、電線は昌圖近邊、鐵道は或る秘密なる吾が滿州義軍の爲
めに空しく破壊をして仕舞つたので、軍隊粗食の輸送は固よ
り、通信の途も全く絶たれて、前には海軍の虎を受け、後邊に
陸軍の狼を受け、旅順港を守る露國太平洋艦隊の残つた軍艦に
と、其の砲臺を守つて居る露國大平洋艦隊の残つた軍艦を
待つより外は、詮方無い事に成つたのでございませぬ、此處金州
城内の一民家には、彼の有名なる海軍總指令官東郷大將閣下、

前には粗末な机を置き、泰然として椅子に腰を掛けて居られる
其前には第一師團長野津大將、是れも全じく椅子に腰を下して
東郷大將と何か頼りに話しをして居られる、其傍には東郷大將
に従つて來られた海軍の首腦幕僚陸軍方では參謀部付の武
官併せて十七八名、ズラリと取巻いて扣へて居る、總て東郷大
將は口を開き東郷エ、野津君、今日此東郷が君の處へ伺つたの
は、外の事では無いが、彼の旅順港の事だ、敵乍らも羽翼を絶
たれ毛羽を抜かれて、僅に氣息喘々たる憐れむ可き者に向つて
優勢なる吾が海軍と陸軍とを以つて、攻撃を續けると言ふのは
只徒らに死傷者を多く出す斗りで、人道の上から言ふも、征討
の大義から見ても、吾が帝國の陸海軍が、名譽處チア無い事
の耻辱とする所でありませう野津、ウーム、成る程、其れは君の言
はれる通り、此野津も豫て考へて居た處です東郷、處で、是れは
何うしても敵將に向つて、降服を勧め、憐れむ可き多くの敵兵

を死地より救ひ出して、吾が帝國軍人の、道を守るに忠なる事を知らしめて遣らうと思ひます野津ハ、ア、其れは宜いでせう、其上萬一も吾軍人の好意を無視して、他く迄も抵抗する言ふのならば、其時こそは陸海軍人共に挾撃して立所に敵軍を壓殺しにして遣る事に致しませう東郷ソム、此東郷も其考へて有るが、併し降服を勸告すると言ふ事は決定しても、扱て使命を果す適任者を見出すと言ふのは頗る困難では無からうか、吾が海軍にも澤山の猛將勇士は、指を屈むるに暇無き程も有るが、扱て是れと言つて人選をする段に成ると、却々見出すのに困難な次第、其れで能く御相談に上つたのですが、君の方には適任者は無いでせうか野津ハ、ア、然うですなア、其れは却々六ヶ敷の問題ですな、資格として第一露西亞語が巧みで無ければ成ら無い、第二は士官以上で有らねば不可無い、第三には臨機應變の才智を持つて、其上餘程豪胆な者、第四死を顧る様では

駄目、と是れ丈の資格の備はつた將校は、却々人選が六ツケ敷いでせう、併し私しは今幕僚の報告書の中で、是れと思ふ者を以て後部の軍用靴の中より、二三枚の書類を出して参り野津は立見出さうと思ひますから、一寸待つて下さい」と野津中将は立つて後部の第一師團中の重なる將校ですが、此中で其れと思ふ者を人選して見ませう東郷ソム、然うですが、ハ、ア成程、澤山な將校ですな、成程、ソム野津是れは充分露語は出来るのですが、年が五十幾才と言ふのですから、到底も六ツケ敷い」二人の將軍は、頻りに那れか是れかと御相談に成つて居る其折しも、堪り兼ねてツカ、ツと進んで出た一人の少佐、例の参謀部付きの印しとして、右の肩から左の方へ斜めに、肩章を掛けて居る、是れを陸軍少佐島村清、其人をごさいます、ツカ、卓子の前に進んで参り、二人の將軍に擧手の禮を施して、御中言で甚だ恐れ入りますが、少々急に御願

ひ申し度う存じます」云ふ聲に、後邊を振り向いた野津中
 將中將オ、島村か、何か用事でも有るのか。清ハイ少々御願ひ
 申し度い事が有つて、此深山な上官の方々に失禮を省り見す、
 列を放れた様な次第でございませす野津ウーム、何う云ふ事デ
 ャア云つて見るが宜い。清ハイ、閣下、モウ勸降使の御選
 拔は成さいますしてございませすか野津ウム勸降使の選抜か……
 イヤまだデア、今此の通り海軍の東郷閣下と、報告書に依つて
 撰抜して居る處デヤ、其れが何うかしたのか。清イヤ何うも致
 しはしません、閣下、其の勸降使の役目を、小官に御命令を
 願ひ度いで、何うも甚だ出過ぎた御願ひでは有りますが、特
 別の御詮議を以つて、是非御許しを願ひます」と決心の色を
 に顯はして只管に願つて居る、野津中將も此島村清の意外な願
 ひに、暫し其顔を眺めて居たが、野津中將も此島村清の意外な願
 が行き度いと云ふのか……併し折角の希望だが、貴様はやる

譯に不可のデヤ。清ハイ其れは又何故でございませす野津何故と
 云つて、其様は此第一師團に必要の參謀官デヤ、だから任命す
 る譯に行かん。云ふのデヤ」と野津中將は最も嚴かに答へま
 した、併し是れは中將の眞意では無いので、實を云へば島村少
 佐は勸降使として欠点の無い適任者で、露語は三年も洋行して
 勉強して居る上に、辨舌は巧し、其上才智は申す迄も無く剛胆
 な事は此上も無い、官職は陸軍少佐で、風采は宜し恐らく是れ
 以上の適任者は、第一師團中にも無い位、其れは中將閣下に
 於かれても、充分見認めて居られるのでございませす、此得難
 い參謀官を見す、殺されに遣るのは、誠に残念な心持ちが
 するからでございませす、誠に此勸降使と云ふ者は、本當に無理の
 で任命するので、中將の斯く御心配に成るのは、本當に無理の
 無い處、然るに此時島村清は、中將の言葉に更に驚く氣色も無
 く、清ハツ、御言葉を返す様で、甚だ恐れ入りますが、多士濟々

たる吾が陸海軍には参謀官として適任の者は澤山に有ります、然し勅使の適任者は其の報告書にも有ります如く、僅か数名の者に過ぎ無いです、任務に軽重の別は無様なものですが、併し勅使の任務は重任中の重任で、是れが成功と否かは敵軍は素より吾が軍にも、至大の責任が有るので、申し上げざるも失禮の極みですが、幸ひにして私に御任命下さる上は、不肖乍ら誓つて任務を全うして歸ります、萬一不幸にして任命を辱しめる如き事が有りましたら、生きて再び吾が軍に還ら無し決心です、深く割腹して上は、大元帥陛下を始め奉り、閣下へる譯では有りませんが、不肖清に此の未曾有の勳功を樹て甘井に其他の人々に申譯を致します……閣下、平素の御愛願に甘せやうと云ふ、一片の御愛情が有りましたならば、柱つて此重任を御命令下さる様、伏して懇請致します」と云ひ終つた島村清は、如何にも心の内には固き決心の有る如く、熱誠は溢れて暗

涙さへ催して居る、野津中將は何にも云はず、只腕を拱いて考へて居られました、此時傍で聞いて居られた東郷大將は、小聲で何か頻りに野津中將と話しを致して居られたが、應ての事に野津中將は、組んだる腕を解くと共に、沈痛なる御言葉を以つて野津中將島村、今此東郷閣下とも種々御相談を申し上げた處、漸く相談が纏つた、清ハツ野津其れでは宜敷い、其の決心と熱心とを當て、如何にも貴様に勅使の任務を申付けた予遣エツ、其れでは此私に……野津ウム、吾が日本軍の面目を保ち、誓つて成功して歸れ、併し呉々も命令するが、假令成功を仕無いからと云つて、可憐命をムザくと捨て、は相成らんぞ、貴様の二身は大元帥陛下に捧げて有ると云ふ事を忘れぬ、宜いか、島村清は雀躍せん斗りに打喜んで、清閣下、井に東郷閣下、御厚意は死んでも忘却は致しません、御安神下さり、此の大任を身に受けました上は、必ず使命を全うして歸り